

532
91

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



7.10.3



横濱高等工業學校教授

大西友太著

と
教育

大正
14. 3. 24
内交

東京 寶文館藏版

532-91



序

本書は前著「認識と教育」に於て約束して置いた「歴史と教育」であつて、大體余の現任學校たる横濱高等工業學校の修身科で二年生に講義せるものを纏めたものに、余の専門の立場から一二の論文を加へたものである。

余は前著に於て認識が斷言命令の上に立つときに吾々の教育はその要領を得らるべき結論に達して居るが、これは實は謂はゞカントの認識の超越的先驗論から進んでフイヒテの先驗論理の立場に至り、個性の超論理的創造を承認すべき歴史の世界に轉廻して居るのである。本書ではこの立場から歴史を見、余は與へられたる事實としての歴史の文化史的材料を科學的に取り扱ふと共に、これを哲學的に批判して歴史の本質論に達して居る。歴史の眞理からいふときは、個性は自然科學的概念構成の極限に於て考へらるべきものであるべきことは勿論であるが、この個性も歴史の世界ではなほ自然哲學に於けるエレア派の實在たるの觀を脱せぬものがあるから、余はこれから更らに進んで國民的

個性を考へ、この個性の現在に於て凡ての歴史問題を現實的具體的に解決すべきものと考へる。今日多くの國民殊に我が國に於て社會の習俗が一般に一般的文化の幻映を追うて浮華に流れるのも、又工業が一般的翻譯的であつて眞の國民的事業とならぬのも歴史哲學に於けるこの眞理が徹底せぬのに歸因することが多い。これ余の最も遺憾とするところであつて、自然余は本書ではこの國民的個性の哲學的自覺に最も大なる力をつくして居る。吾々國民は須らく理想に活くべしといふのが余の本書に於ける提唱である。

吾々の有すべき眞の具體的歴史は國民的個性に全體の重味を托するものであるが、この個性の現在においては過去に關心する歴史よりも將來に關心する教育の方が人格の直接的働きとなつて居る。教育こそは歴史を生ずる「事行」である。随つて余は本書では歴史を論ずるに随つて教育の意見を述べては居るが、本來的立場に於ては教育から歴史を考へ、普遍史を内容とする國民教育に於て最も具體的に吾々の有すべき本來的職務を解決すべきことを哲學的に主張して居る。これが本書に於ける余の立場である。

本書の學究としての序文はこれにつきるが、なほ本書は本校の修身科の講義であると
いふ點から一言して置かねばならぬものがある。

本校の修身科では余は一年級倫理學概論、二年級歴史問題、三年級認識問題を中心として講義し、大體二年の終り頃になると現代人として具體的に道徳的判斷が出来るやうに準備すると共に、三年級の講義では一般に科學的知識を批判し、その根柢に實在すべき人格及び個性を明晰にしてこの道徳的判斷を一層深刻なるものとなし、道徳問題歴史問題に對する文化哲學的見識を相當に徹底せしむべき方針を探つて居る。これは本校教育が自由主義であつて特に個性を尊重して居るところから、これに對して修身科で出来るだけ思想の根柢を涵養せんとする目的を抱いて居るのと、又なほ一般には専門學校の教育として修身科では文化哲學的教育方針を探ることは、可なり自然科學の素養を有する青年を有爲の人材に教育するには是非必要であると信ずるの由るのである。

併し専門學校の修身であるからとも哲學的體系を以て講義すべきものではない。大體からいへば一般に思想問題に止まつて居る上に、この種の學校教育の常として時事問題には必ず十分の注意を拂はねばならぬものがある。随つて時間からいつても少くない時

間がいと少くなり、講義は極く大體の輪廓に止まらざるを得ぬ。その結果この講義を纏めた本書では學究的に取り纏めたもの、なほ前後の聯絡上哲學の純粹論理で主張すべき歴史の原理もたゞ歴史の文化哲學的精神を高調するに止まるところがないではない。尤もそれだけ一般讀者には読み易い譯である。又歴史哲學の原理を論ずるものとしては内容が多過ぎる感がないではない。併しこれは學生に對する講義として少くとも現代の社會問題をなるとだけ精細に理解せしめる教育上の必要から起つたものである。

省みれば昨年九月一日の大震火災は余には終生忘れがたき經驗である。余はこの「歴史と教育」をこの大震火災の苦難に直面しつゝ、執筆せることを特に本書の記念として永く記憶すべきものあるを覺える。

大正十三年十二月

横濱にて 大西友太

目次

歴史と教育

序論

- 一 人類の發生……………一
- 二 原始人の生活形式……………六
- 三 家及び故郷の歴史の意味……………三
- 四 家族生活の變遷……………三
- 五 社會の道德的結合……………五
- 六 歴史と教育……………六

本論

第一章 經濟と歴史

- 目次
- 一 自然と經濟價值……………五

目次

二 勞働と歴史……………二二

三 近代生活の困難……………二四

第二章 政治と歴史……………

- 一 法律の一般的性質……………二六
- 二 政治の根本原理……………二八
- 三 今日の資本勞働の法學的問題……………二七
- 四 今日の資本勞働の政治的問題……………三四

第三章 教育と歴史

- 一 教育の機會均等……………二六〇
- 二 學校の個性……………二七七
- 三 個性の教育……………二九六

第四章 歴史の本質

- 一 歴史に働いて居る力……………三三〇

- 二 歴史の本質……………三三一
- 三 歴史と教育の哲學的關係……………三七一

第五章 國史及び國民教育

- 一 言語と國民性……………三九〇
- 二 我が國の神話と國史の發達……………四三三
- 三 愛國者と愛國心……………四四三
- 四 國史の國際的發達……………四六四
- 五 國民教育の根本問題……………四九三

目次

目次



歴史と教育

大西友太著



人類の発生

聖書の中にあるモーゼスの創造史によるときは、人類の先祖はアダム・イヴであるとしてある。これによるときは人類の起原は明かに一元であるが、これは道徳的宗教的に人類の生活の統一的説明をなさんとする希望に出でたるものである。随つてこの種類の企ては獨りキリスト教のみでなく、一般に人類の文化が相當の發達をなせる場合に於ては、道徳的宗教的要求から自然に起るるところの企てであつて、我が國の記紀に於て國民の先祖を以て天之御中主神とするのも矢張その一例である。吾々は歴史について考察するときには、この道徳的宗教的一元の説明には相當の理由あるを發見し、随つて後に述べるが如くこれについても十分の注意を拂ふところがなければ

序論一 人類の發生

ばならぬ。併し科學的に人類の起原を考察するにあつては、この考察をなすよりも以前に先づ人類發生の自然的事實から調べて往かねばならぬが、生物學や人類學の教ふるところによるときは、人類の起原はエデンの園のアダム・イーヴに溯るべきものではなく、生物進化の系別によつて原始人類から更に溯つて人類前の先祖のことをも考ふべきものである。この方面の研究に依るときは初めて人類のこの地球上に現はれたのは今より約五六十年以前のことであつて、以來永く吾々の先祖は野蠻生活を續けて居つたが、今より四五千年以前歴史の示す如く吾々の先祖は漸く文明生活の園をまたいたのである。生物が初めて地球上に現はれたのは約八億萬年前のことであつて、爬蟲類の時代となつたのは一億萬年以前である。哺乳動物が現はれたのは約五千萬年以前のことであつて、人類に近い猿人 *ape-like man* の現はれたのは更に溯つて二百萬年以前である。この猿人から吾々の先祖たる人類が進化したのはこれより百四五十萬年ほど後のことであるから人類の發生は全く最近のことである。

儲、一體如何なる理由によつて生物がこの地球上に發生したのであらうか。哲學的に考へるならば諸種の深き理由があるが、姑らく科學的に考へるならば是れ地球の表面の變化が生物の存在を許すに至つたからである。生物は地球の表面ならびに大氣の状態が變化して生存が可能となる

に至つて我が地球上に現はれ、以來この變化と共に次第に進化の系列を作つて發達したものである。人類の發生といへども勿論この自然的進化を去るものではない、吾々の先祖は全く地球の狀態が變化してその存在を許されるに至つたときこの地上に現はれて來たのである。随つて人類の發生も一切生物と同様に一口にいふならば全く地球の地質學的理由によるものである。

併しこの人類も全地球に同年代に現はれたといふことは恐らくないことであらう。最古の人類と最近の人類とではこの地球上に現はれた年代に彼れ是れ大なる隔りがあるのであらう。地球の地質學的年代からいふときは同じであつてもこれを普通の年代に直して考へるときは莫大なる時代の違ひがあつたことであらうと思ふ。廣大なる地球の表面が同じ人類生存の條件を同じ時代につくつたとは考へられぬ。必らずその間に年代の差異及び場所の差異があつたに違ひなく、随つて發生した人類の年代及び種類に違ひがあつたに相違ない。今日地球上に住んで居る人類から見ても解剖學的構造及び生活様式が異なり、人種の大なる差異のあるのは何よりの證據である。人種は一元ではなく多元である。併し所謂五大人種といふやうな説が科學上正當なる説として承認されるべきものであるか否かといふことになるときは、吾々は容易にその眞否を確めること能はぬ。恐らくこの五大人種説を以て決定的學説とするには幾多の反對があることであらうと思ふ。

これ等の點については吾々は今後なほ幾多の新研究を積んだ後でなければ、その説の可否を決定すること能はぬが、兎に角人類の起原は從來宗教的若しくは道德的思想の統一上の要求から考へられて居つたやうに一元でなく、多元である。地球の地質學的條件によつて多少その發生の年代及び條件を異にして居ることだけは疑ふべき餘地がない。随つて人類は人種を異にするに随つて身體ならびに精神の自然的能力を異にして居つたことも亦疑ひないところである。併し今日吾々が地球上に生存せる人種に見る如き大なる差異の原型があつたのでは勿論なく、或る人種をして文明の大なる發達をなさしめたるに拘らず、他の人種をして何等の發達をもなすこと能はざらしめたといふやうな大なる原始的能力があつたのでない。何の人種もみな殆ど同一の原始的能力をもつて居つたが、只その中で忍耐と勤勉とを重ねた人種が今日の文明國民となつたのである。

これ吾々の注意すべき所であるが、一體人類の發生が既にこの忍耐と勤勉とによつて居る。以上述べたる地質學的變化の生物發生によるときは、動物の進化系列の過程中に於て人類のみに優越なる地位を有すべき理由はない。多少の違いはあつても大體同じ系列に屬すべきものとして、人類は動物とその範疇を同じくするものと考へねばならぬ筈である。併し事實はこの豫想を裏切つて人類のみ特に生物進化の系列中に於て優越なる地位を占めて居るが、これ既にその發

生の初めに當つて人類は特にその勤勉によつて自然による進化に多大の速度を與へた結果である。即ち人類の先祖は猿人の中では特に勤勉であつて手と頭とを使用することを忘れず、一口にいふならば知恵をしほつて働くべきことを忘れなかつたものである。手と頭とを使用する習慣は自然彼れ等に直立歩行の生活様式と身體構造との發達を促がし、人類の先祖は猿人の仲間を離れて樹から降りて地上に生活するやうになつた。されば猿人から人類が進化したのは既に他の動物の進化とその選を異にし、人類の生活様式は他の動物と異なつて特に勤勉であつて、彼れ等は社會的に協同して生活環象を開拓すべき能力を磨いた。社會的に生活勞働の價値を理解して居る。人類の歴史が生物進化よりも社會進化の形式をとるのはこのためである。吾々は人類の過去に於ける永き原始時代の生活を見たときは、あまりに自然のために翻弄せられその左右するところとなつて居るのに驚かざるを得ぬが、それでも人類は單なる動物と異なつて何處かに自然を征服せんために自らその知恵を工夫して働かんとする社會的特徴のあるを認めることが出来る。人類の歴史はこの努力が重つて、その社會的活動興味を中心として自然を見るに至つたときに長足の進歩をしたのである。理想主義歴史哲學に於て人類は文化問題に注意するに至るとき歴史が初めて見られるといふのはこのことである、余はこれ等の點について順次歴史の進歩を考へて往きたい

が、先づ原始時代に於ける人類の生活様式及びその自然に對する努力から考察して往かう。

二、原始人の生活様式

人類は只與へられたる自然中にさ迷ふものでなく、秩序ある宇宙間に於て自己に與へられたる一定の場所があると信ずる。野獸さへも或る限られたる生活場所を定めずして地球の表面を徘徊するものではない、廣大なる土地に於て、彼れ等は何處に到つても、その生活手段を得ぬではないけれども、實際に於てはたゞ一定の範圍を徘徊してその範圍内に於て生活手段を求めらるのみである。

或は會この自然的範圍を出でぬではないけれども、これ外的事情のために餘義なくせられるからであつて、自己の衝動的な要求によるのではない。新境遇の絶えず變化する中に於てこれに適應しつゝ、生活するといふことは一般に動物の最も苦痛とするところである。恐らく彼等は自己の最も熟知せるところの不變的表象を中心としてその周圍に次第に明晰の度の減少せる外的世界を構成するのたけなければ生活の安靜と幸福とを得ること能はぬのであらう。人類の冒險心は元來獸類よりも大であるから、人類は獸類よりもその生活の自然的環象を脱することが容易であつて彼等

は到るところに新住居を作るべき力をもつて居る、併しそれでも人類は只冒險心の満足を求めて無闇に新住居を作つて先きから先きへと移動するものではなく、出來得る限り一定の住處に定住してそこで先祖の跡を踏みながら事業を積み重ねて往かんとするものである。即ち人類はその傳來的の家を中心として連續的に生活事業を經營し、過去に於て得たところの生活事業を棄て、無益に新規の事業を追ふものではない。何處までも舊事業を基礎としてその上に新事業を經營せんとするのが普通である。これ人類の歴史では先づ家及び故郷が重んぜられる所以である。併し人類のこの歴史的衝動はその原始的生活の形式に於ては容易に満足せられるものではなく、狩獵生活から遊牧生活を経て農業の定住生活の時代に至つて初めて満足し得るところとなつた。随つて人類の歴史は農業時代から初まつて居る。

人類がまだ定住生活を營むに至らず動物と殆ど異なるところなき野蠻生活を營んで居つた時代は既にも一言したやうに非常に永かつたが、この時代に於ては人類の生活せる周圍に獐猛なる巨大の動物が多く、随つて人類は生存の安全を圖るために之れに對して防禦手段を講ぜねばならなかつたから、自然その生活は狩獵の形式を採るやうになつた。この生活方法に於ては人類は野獸を追うて生活せねばならぬから、自然彼れ等には定住生活の觀念が發達せぬ。廣き獵場の漠然た

る原野の觀念が發達し、生活事業を推積して勞働の記念物を造るべき考へがない。随つて僅少の狩獵によつてその自然的欲望の満足をさへ得れば、それ以上に望むところがなく、少しも貯蓄しようとしぬ。謂はゞ全く手から口への生活をなすのみであつて、勞働の結果を集積して生活の永久的記念物を作る如き念は更らない。文明の歴史的發展は彼れ等にはいまだ見ること能はざるところである。彼れ等の生活に於ては、狡猾なる忍耐と猛烈なる攻撃とが生活の二大要素であつて、彼れ等は最も注意してこれを研磨するを忘れぬ。随つてこの二能力は彼れ等にはよく發達して居るが、元來この能力は人類の高尙なる生活から見るときは價値あるものではない。彼れ等の生活に於ては全く息を殺した靜かなる抑制を以て野牛や猛虎の來るのを各瞬間毎に注意し、猛獸の注意するところとなつて逃亡又は逆襲せざる前に、彼れ等より進んで猛然これを攻撃し、一撃の下に打ち止めねばならぬ。故に彼れ等には自然狡猾なる靜肅と獍猛なる攻撃との習慣が發達する。彼れ等の家庭なき生活は自然社會的交際をなすべき機會なく、凡ての職業が餘りに單純であるから、彼れ等は他人の知識能力を以て自己の生活の補足的援助となすべき機會を發見することがない。只彼れ等が先祖の跡を踏むために多少動物よりも進歩せる生活を有せると、及びこの進歩せる生活が狭き範圍ではあるが彼れ等を動物と異なるる意味に於て社會的に結合せしめ、これ

によつて彼れ等は單純なる形式ではあるが人類の社會性を満足して僅少の部落間に動物的闘争を免れるのみである。

狩獵生活に比較するときは、牧畜生活は餘程歴史の發達に適當なる條件を有つて居る。この生活の經濟的整理は社會組織の文明的發達を伴うて居る。牧畜生活に於ても羊や豚その他の家畜を保護するために勇氣と活潑なる活動とを缺くことはない。この生活は動物生活の破壊を主眼とするものではなく、その養護を主眼とするものであるから、靜肅温順ではあるが卑怯や小膽に陥ることはない。この生活では勞働の忍耐の外に、なほ多くの知識と先見とを必要とするのみでなく、需要貨物の數が次第に多くなるから、この形式の生活に於て初めて小なる社會範圍内に於ける勞働の分業を生じ、社會生活の相互的援助を必要とするやうになる。随つて社會はこの形式の生活に於て急速に發達する。人々は單獨の生活と異つてその社會的交際によつて生活の補足的刺戟を得るから、教育的發達が著しくなる。狩獵生活に於ては何等の仕事もなき無爲閑散なる間暇と非常なる懸命の努力を要する勞働とが突然相交代する。人々は生活の獲物を見るときは一時熱情的に勞働するが、その他のときは怠惰に過ごすのみである。随つて勞働の叡智的發達を見られぬ。これに比較するときは牧畜生活に於ては確實に繼續せる職業を有し、休息と勞働とが補足的關係

で並行するから、この生活では自然労働が連続的に發達する利益がある。

加之、この生活様式に於ては自然の必要上單獨生活の代りに社會生活が發達し、財産に對する位置が自然社會的位置に變化を生じ、社會秩序及び階級なるものを發生する。こゝに牧畜生活に於ては狩獵生活に於て見ることも能はざるところの文化の發展に最も必要なる二概念即ち經濟及び社會なる二概念が發生して來る。この生活に於て初めて自然的經濟の發達が社會組織の發達と相伴ひ、人類はその生活經濟の上に秩序ある社會生活を營むやうになる。ロッチェは人類の生存の中心が自然界より社會の人爲的世界に移るときに明瞭に人間生活が初まり將來發展の可能が見られるというて居るが、牧畜民が社會生活を作りその興味を以て自然を觀察するに到つて初めて人類に明瞭なる人生の概念及びその將來發展の歴史の可能が現はるのである、人類の本性を満足し得べき意義ある生活及び教育はこの様式の生活に至つて初めて吾々の發見し得るところとなつた。勿論この牧畜生活は所謂水草を追うて移動するものであるから、永久的定住生活といふことが出來ぬけれども、或る期間の定住はこの様式の生活には缺くべからざるところである。この生活に於ては人々はその家畜を自然的牧場に於て飼育する必要上、その住處を週期的に變更する必要はあるけれども、或る期日の後にはまた元住處に歸つて來るから、何等の定住處もなく遠方に徘徊

する狩獵生活に比較するときはその生活條件が文化の發展に對して遙かに大なる利益を有して居る。余は既に本節の初めに當つて人類はその生活に於て家とこれを維持すべき一定の所有物及び勞働範圍とを要求するものであると述べたが、この要求を満足し得べき生活は牧畜生活に於て人類の稍具體的に發見せるところである。狩獵生活に於ては未だこれを發見すること能はぬ。住處及び勞働について一定の場所を有するのは牧畜民になつてからであるが、彼れ等の生活に於ては牧畜の必要上、自然住民はその故郷と考へるところの土地を有し、生活事業を以て必然的にその土地の山林牧野と結合するから、彼れ等に對してはその郷土の景色は狩獵民に對すると異なり、歴史的社會的意味を有つて來る。彼れ等には故郷の景色は只冒險生活の背景ではなく、一定の生活勞働を記念する自然的象徴である。自然は事物の堆積ではなく、先祖からの生活勞働の記念である。

余は前著『認識と教育』で吾々は自然を以て生活勞働の記念であると考へるときに、その自然から本來的意味で教育的の影響を受られる點について述べたが、歴史の進歩から考へるならば、人類はこの牧畜生活に於て初めて教育的發達をなすべき端緒を得たといへる。併しこの形式の生活は未だ吾々の有すべき文明の至上結果を生ずるものでは勿論ない。家畜の性質及び能力、彼れ

等に必要なる保護ならびに彼れ等の人類に對する從順の程度からいうても、將たまた氣候及び社會的生活事情から考へても文明の發展に對しては大きな制限のあることは容易に想像し得られるところであるが、この生活様式から農業生活に移るときは、文明の發展は長足の進歩を見られる。言ふまでもなく農業の定住生活に於ては、第一經濟上人々は動物世界よりも確實に多量の生活維持手段を與へる植物世界に依頼する結果、生活の安定といふことが得られる。勿論狩獵生活の原始人も或る意味では農業を知らぬではない。例へばパン樹の栽培によりて食物を得るといふやうなことは實行したところである。併し彼れ等のこの栽培といふものは只自然樹の側に少しばかり氣まぐれに植ゑるといふ位のことであつて、農業として栽培したのではない。随つて彼れ等の生活様式は依然としてその狩獵によつて決定されて居る。随つてパン樹の栽培によつて自然が人口繁殖に與へた鐵則を破るといふことはない。吾々の先祖が豊富なる食物を準備し、この鐵則の制限を破つて社會の發達を來たしたのは、この農業生活に入つてから後のことである。この生活に於て初めて人々は本來の意味に於て手と頭とを使つて適者生存の自然の大なる原則に適應し大なる繁榮を得て來た。グラントは人種の分配及びその淘汰による進化の法則は一切の動物を通じて異なるものではないが、人類の場合には疾病とか又は社會的及び經濟的競争による淘汰とい

ふものは、その大部分が食物供給の制限に對する適應によりて緩和せられて居るといふて居るが、實にこの語の通りであつて人類の繁殖及びその發達は食物に對する適應的運動によつて調節せられるところ最も多く、この適應運動が叡智的に巧妙なるために人類は地球上殆ど到る處に生活するを得る。人類の如く實く地球上に分配せる動物の種類は他にない。人類は進歩せる知識の叡智的適應によつて食物供給を中心としてその周圍を開拓し、以て自然の許す範圍内に於て最も大なる繁榮を得つゝあるが、この意味に於て吾々の先祖が農業生活に轉じたのは歴史上最も大なる意義のあることである。所謂有史といふことは人類に於ては農業生活時代から後のことであるのは吾々の最も注意すべきことであらう。一體自然はその吝嗇なる天産物を以てその中に住む動物に生活の満足を與へぬ。殊に人類の生存に最も重要な食物について十分なる供給を與へぬ。随つて太古代から繁殖力の最も盛んなる人類は食物に苦められて居る。かくて食物に關する注意は人類の原始的時代より怠らなかつたところであつて、實はトーマスに食料に關するものゝ最も多いといふことは何よりも雄辯に原始的人類がその食物の適應に苦心して居つたことを語るものである。農業時代に人類の文明が頓に發達したといふことは既に述べたる如く全くこの食物に對する適應に於て正確なるを得たのに由ること最も多い。人類の歴史は全く吾々の先祖が農業に

よつて自然の人口繁殖に對する大なる制限を破つて自由に繁殖すべき經濟世界を作つたときに初まり、その定住生活によりてこの生活労働を繼次的に發展すると共に發展して居る。古代の歴史に於て一切人類を通じて農業尊重の習俗を有するのは所以ありといはねばならぬ。

熱帯地方に於ては人類は生活労働によらずして植物から生活の豊富なる維持手段を發見する。随つてこの地方に於ては人類は無盡藏の麴果樹の倉庫の中に生活して居るやうなものである。食ひ盡せば自然はまた新らたに與へるから食物の心配は更らにない。即ち食物の人口制限がない。

住民の人口が次第に増加して、社會的形式の生活をなすに至つたといふことは敢て怪しむに足らぬところである。随つて彼れ等には最も早くから文明が發達した。併し彼れ等は只自然の與へる大なる恩恵を享樂するのみであつて、彼等から進んでその自然を一層大なる恩恵を有せるものに開拓するといふことをせぬ。謂はゞ自然の奴隸となつて居るのみであるから、その文明は全く原始的のものに止まるのみであつて、永續的に發達せぬ。彼れ等は自然の恩恵によつて社會的享樂を覺えるが、熱帯の自然的生活では一般に所謂早熟であつて、多數の感覺的慾望の衝動が生活經驗の未熟なる時代に勃然として發生するから、人々は自然何等の抑制をも知らぬ放縱な生活に流れ、進歩的社會生活の道德的調節などは彼れ等には見る影もない。放縱な慾望の満足と怠惰な

る時間の空費との外に、彼れ等の生活を飾るものがない。南洋の土人の生活を見ればよくこの事情が判ると思ふ。彼れ等は如何にして食物や生活維持の手段を得るか、少しもその苦心を知らぬ。生産的労働は彼れ等には全く見ることも能はざるところである。今日彼れ等が文明人の間に互して朝夕その刺戟を受けてすらもなほ農業の意味すら理解すること能はぬ。種を蒔くことは知つても收穫になるまで何の手入れをも加へぬ。種を蒔けばそのまま放任して置いて收穫の時期を待つのみである。農業といふよりも寧ろ天産業であつて、自然の恩恵を待つばかりに何等の努力をも爲すところがない。全く豊富なる自然の中に歌つたり躍つたりして一生を過ごすのみである。文明的努力及びその歴史的發達といふやうなものは、少しも彼れ等には認められぬ。今日吾々から見るときは、彼れ等には全く文明の歴史を作るべき能力が否定されて居るのでないかとさへ思はれるほどである。

余はこゝに人類の文明的能力についてなほ一言したいと思ふ。元來創造の目的からいふときは、或る人種が文明能力を有するが、他の人種はこれを有せぬといふことは、吾々の想像し難きところである。創造された以上は人類は各々その土地に於て文明を發展すべき餘地を有するものと考へねばならぬ。勿論人類は地球上に於ては既に述べたる如くその發生の事情を異にし、随つて自

然その能力を異にして居る。併し既に断つた如く或る人種が文明の大なる發達をなすに拘らず他の人種は全くこれを發達すること能はぬといふやうな宿命的差異を有せるものでは勿論なく、その初めに於ては殆ど論するに足らざる程の差異であつたが、只その能力を使用する方向及び方法によつて次第に大なる差異を生じ、終に今日文明人と野蠻人との間に見る如き大なる差異を生ずるに至つたのである。歐洲人は忍耐強くその能力を使用したるために、今日の歴史を作るに至つたことは、すでに前小著に於ても述べたところであるが、今日人類の有するところの歴史發展の差異といふものは、彼れ等の地球上に於ける發生以後、殊に有史以後、否、寧ろ最近二三百年に於ける人類の勤勉によるものが最も多いのである。

今日一般に所謂有色人種は怠惰であり、内氣であつて、想郷病に襲はれ易く活動を好まぬ。白色人種に比較するときは、活動的發明的才能に缺けて居る。兩人種は全く原始的能力に於てその範疇を異にせるでないかと想像されるほどである。如何に考へてもバナ、や波斯菓若しくはコア、ナッツの天與の繁殖によつて人類に天惠の倉庫を與へ食物の無盡の藏を與へるところでは、人類は只熱情的に一時に花々しくその能力を使用するのみであつて、勞働の叡智的繼續といふことを知らぬ。彼れ等はたゞその麴果樹に對する感謝や賞讃の印象と單純なる生活の詩的構想とを

有するのみである。所謂熱帶文學を有するのみである。彼れ等の歴史及び教育は只この方面に於てのみ發達する。今日ヒリツピン島の土着民は舞踏及び音樂に於て大なる發達をなし、米國人にも劣らぬほどであるといふ話であるが、これ彼れ等の熱帶文學的自然が歐米の包括的文化に接しても只この方面の文化をしか理解すること能はざる印であると思ふ。この島が西班牙に占領せられて以來、今日米領となるに至るまで島民は随分長年月の間に渡つて諸種の文明生活及びその教育的刺戟を受けて居る筈であるから、彼れ等は諸種の方面に渡つて包括的文化を發達しさうなものである。然るに事實は只舞踏や音樂をのみしか理解し發達せぬのは、これ彼れ等の生活の自然及び永き過去に於ける生活の風習が自然彼れ等をして此處に止まらしめたものと思はれる。原始的能力は異ならぬでも忍耐強く叡智的に連續使用すると、熱情的に一時使用するとはその發達に大なる差異を生ずるが、一般に南洋地方の自然的經濟では、土人は只熱情的にその生活及び自然を歌ふ樂天的文學の極く幼稚なるものに兒童の如く陶醉すること餘りに長年月であつたから、今日では吾々文明人の文化的生活の連續的努力及びその目的の如きものは彼れ等の性質中には最早發見しがたくなつて終つて居る。今日では歴史は最早彼れ等には見がたきところとなつて終つたといつてよい。

吾々はかゝる點について考へる毎に、自然が人類の歴史發展上に有するところの影響の大なるを考へ、人類能力の使用がその文化發展に影響すること大なるを思はざるを得ないのであるが、温帯の農業生活はこの點から見るときは餘程便利なる關係に立つて居る。この典型の生活では、人類は叡智的に労働を繼續すればその結果は驚くべきほど豊富であるけれども、然らざるときは貧弱なる結果をしか得られぬ。随つて自然人類はその生活に勤勉であつて、叡智的にその生活労働を繼續する。諸種の穀物の栽培によつて養成せられるところの農業民族の思想と労働、知識及び道德はその内容が熱帯地方の遊惰なる民族に比較するときは、非常に豊富且つ高尚であつて、著しく文化的能力に於て進歩して居る。土地の開墾者がその慾望を満足するために使用せねばならぬところの能力は只その體力のみではなく、知識の發達及びその指導に待つところが最も大である。彼れ等の接するところの自然及び土地は彼れ等にその産物を徒らに與る、ことなく、常に彼れ等の熱心なる勤勉に酬ゆるだけの産物を與る。随つて彼れ等は收穫を得べき助けとなるところのものであれば、大小に拘らずこれに注意せねばならぬ。個人の好悪や熱情の如何に關せず一定の計畫でその職業を繼續し、季節及び天候と絶えず奮闘せねばならぬ上に、忍耐して穀物の自然に成熟するを待たねばならぬ必要がある。一口にいふならば一般に自然の過程に従ひつゝ、その

自然の與へるよりも遙かに多量の收穫を得ねばならぬが、これ等の事情は一として彼れ等に自然的秩序の恒久的法則を研究してこれを生活に適用すべきを教へぬものはなく、勤勉と忍耐とが如何に人類を幸福にするかを體驗せしめぬものはない。農業民に於ては最も精神能力の貧弱なるものといへども、なほその事業の成功を保障するために、自然の研究及びその研究に基く連續的體系的労働の必要なるを知らぬものはない。一時的刺戟によつて熱情的に突發するところの衝動的な生活は生活の安全及びその成功を永久的に保障する所以でないことを自覺せぬものはない。歴史の叡智的連續的發達及びこれを生ずるに必要な努力と方法といふものは人類生活の進化史上では農業生活に於て初めて人々の發見したるところである。

人類が他の動物と異なつて先祖の跡を踏んで往くために歴史の發達するといふことは、この農業生活に於て始めて適切に見得べきことである。既に述べた如く人類はこの生活に於て初めて叡智的に労働すべきことを悟つて來る。随つてその生活労働を體系的に組み立てるのがこの農業生活の特徴である。一時の氣まぐれに働くといふことは、この生活の禁物であつて、この生活に於ては必然的に叡智的連續的でなければならぬ。随つてこの生活に於ては必然的に一定の住處に永久的生活を營む。吾々が永久的態度を以て自然に對して連續的に活動し、自然を以て生活労働の

記念として自己の睿智的労働の反映と考へるのは、この農業の永久的生活に於て初めて可能なるところである。住處の眞價値は定住生活によらざれば理解し難きところである。随つて狩獵民や牧畜民がこれを輕視するのは無理もないところである。彼れ等は自然を以て生活労働の記念と見るよりも、寧ろ狡猾なる態度を以てその自然から生活の恩恵を盜取せんとするの態度を有して居る。随つて彼れ等は一定の住處を選択するよりも、自然の變化を追ひつゝ、生活の利益及び享樂を貪らんとする。彼れ等の生活する場所は、人間の知識を以て自然を開拓すべき永久的努力の中心とならぬ。文明が彼れ等の住宅の周圍に發達せぬのは無理もないことである。

人類が廣大なる自然の原野中に於て歴史を作るには、先づ住處を決定して其處から自然を觀察し、労働の暇の時に當つて一切の外的影響を離れて一家の團樂生活の樂みを味ひ、又は外界世界を征服すべき機械的手段を準備し、その産物を完全に生産すべき基礎を作らねばならぬが、遊牧民の生活もなほこの點から見るときは幾多の不便をもつて居る。彼れ等は只その遊牧の中間に於て天幕内に靜かなる生活を有するのみであつて、この外は絶えずその住處を移動するため生活に荒らされるが、その靜かなる中間の生活に於ても一時の間に合せに過ぎぬから、勿論住處は只雨露を凌ぐ程度にしか發達せぬ。文明的知識の應用に待つやうな大發達はない。所謂假小屋に一

時落ち付くのみである。随つてその住處を中心として文明的生活労働を積み重ねるといふことはない。假小屋の騒々しき生活は自然を開拓するとか、改良工夫するとかいふ希望を起さぬ。これに比較するときは農民の定住生活はその思想及び労働に安全なる保護を與ふるに足るべき特殊の利益を有して居る。彼れ等の定住家屋内に於ては幼兒もその生存及び發達の保護を得るのみでなく、なほその中には先祖の労働の記念物が充滿して居る。彼れ等を教育し成人の労働を助けて歴史の進歩をせしむるに莫大な力を有して居る。人類の生活に於て最も愉快を感じるのは、現在の進歩せる生活を以て只個人の努力によるのみでなく、先祖の文明生活に對する努力の恩恵によつて子孫が現在生活の幸福を得て居るとする感情であるが、彼れ等はこの感情によつて大なる生活の幸福を得て居ると共に、その幸福なる生活の中に於て唯一の教育的發展を得て居る。歴史の連續的發展に基く生活の幸福及教育の進歩が人類の社會的生活の興味を中心となつたのはこの時代である。

三、家及び故郷の歴史的意味

諸、以上述べたるところによつて人類の歴史が農業の定住生活時代に至つて初めて發達するに

至つたことが略ぼ明瞭であると思ふが、歴史發展の事情は既にかくの如くであるから、人類の歴史の初めの階段に於ては自然家及び故郷を重んずる思想が發達し、歴史の最初の形式は勢地方的郷土史の形式をとる。本節ではこの點から家及び故郷の歴史の意味を考へたいと思ふが、先づ前節で述べた古代生活に於ける家及び家族生活の歴史の價值から簡單に考へて見よう。農業以前の生活形式では定住でないから家もなく家族生活もない。狩獵民の簡單なる生活では男女の交際にも進んだ道徳的意識をもたらすことが困難である。この生活では女子が恒久的に男子の事業を分擔することが不可能である。また分擔したところで元來女子の精神的性質が異なつて居るから、狩獵の荒々しき生活ではその特殊性格の發展に對する凡ての適當なる機會を失はねばならぬ。勿論狩獵生活ではその内容が貧弱であつて情緒的價值あるものが非常に少いから、この生活では女子が男子化するのみである。頑固なる男子は本來繊細なるべき女子の性格中に於て、實際教育の包括的發達を助くべき補足的援助を發見することが能はぬ。この形式の生活に於ては全く男女の家庭的交際に於て道徳的進歩を發見することが出來ぬ。またこの生活形式では財産を蓄積することがないから、男女が共同的に勞働して家庭生活の財源を積み重ねることもない。全くその時々の一時的熱情的行動のみである。その他凡ての家族的關係に於てもこの生活形式では男女が生活

の進歩せる共同目的を意識することが甚だ鈍く、随つて彼れ等の家庭では凡ての點に於て教育的發達を見られぬ。

動物生活に於ても兩親が犠牲的愛を以てその幼兒を保護するが、吾々文明人と異なつてその幼兒が兩親の保護を必要とせざるに至るときは、忽ち彼れ等はその愛を忘れて終ふ。自然的狀態に於ける人類もこれと異なるところがなく、兩親はその幼兒に對して犠牲的愛を有するけれども、一度その兒童が身體の成熟時代に達する場合に於ては、兩親の犠牲的愛は忽ち冷却して終ふ。北米合衆國の山中に棲へる土人は、親子の永久的に袂別するを以て少しも苦痛とせぬといふ話である。斯かる生活事情は到底男女間に於ける進歩せる家庭生活、親子間に於ける教育的關係の發達を促すものではない。随つて自然狩獵民の生活は幼稚なる家庭生活に止まつて歴史的教育的發達といふ如きものは殆ど見られぬ。只僅少の傳統的生活様式によつて僅かに野蠻的熱情的生活に拘束を與へてゐるのみである。随つてその中には恒久的拘束力を有せる共同的興味の精神的交際といふやうなものがない。家庭が道徳や教育問題の中心とならぬのは無理もないところである。これに比較するときは牧畜生活に於ては餘程その面目を新らたにするものがある。この生活に於ては女子の位置は餘程道徳的に解放せられて自由を得て居る。この生活では既に或る形式では永續

的住處を有して居るから、男女が共同的にその家庭生活のことを配慮するやうになる上に、個人は光榮ある事變及び行動によつて不可分的にその先祖の有名なるものと結合して来る。この形式の生活に於て初めて簡單ではあるが内的結合を有せる精神的社會及び財産觀念の發達することは既に述べたが、實にこゝに初めて人類はその社會生活に於て、人間として歴史的に發達すべき端緒を得たのである。

併しこの歴史發展の社會的事實は牧畜生活よりも農業の永久的家庭生活に至つて初めて完全なる意義に於て認められることは勿論である。この生活では男女が相互間に犠牲的に家庭のことを配慮するのみでなく、勞働の分業が男女間に於て著しく發達するから相互間に補足的教育的影響及び援助を發見することが出来る。社會及び經濟の觀念が十分に發達して居るから、男女共勞働の道德的意義を十分に理解し、人々は只生活の享樂を得んとするためでなく、その道德的意義を完くせんがために勞働し、永久的住處によつて世代的にその勞働の結果を堆積して行く。家及び故郷が生活勞働の記念となるのは全くこの生活態度に於てあつて、この生活形式に於ては既に述べたる如く農業の産業革命によつて人々は人口の繁殖に對する食物の自然的制限を除くから、人口はその豊富なる經濟の下に俄かに増加し、人々は内的に理解せる親密なる精神的結合によつ

て秩序ある共同生活を營む。一體社會は人口が相當の密度に達せねば發達するものでない。人口が非常に稀薄であつて、處々に小なる家庭が散在するのみでは社會は發達せぬが、農業生活によつて人類は食物による人口増加の制限を除き、その豊富なる生産によつて自然淘汰による人口の分配及び制限に對する法則に巧く適應するから、人口が俄かに増加して社會の急速なる發達を將來する。人口の増加が如何に社會の發達に貢獻するところが多いか、余は一例を以てこれを示して見よう。英國に於てウキリアム・コンクエストの時代には約百五十萬であつたが、十六世紀末エリザベス女王の時代には約四百萬に達し、一九一一年の人口調査によるときは一躍三千五百萬に増加して居る。試にこれを英國に於けるこれと同時代の國勢の膨張、歴史の發達に比較するとき、吾々は社會の發達が人口の増加に伴ふこと最も大なるものあるを發見する。優種學から見て詳細に實證するときは、人口の増加といふことは一口に歡ぶべきことではない。劣等なる品質の階級に於て人口が増加し、教育ある階級に於て減少するといふやうなことは吾々の最も憂ふべきことには違ひないが、大體から見ると殊に歴史の初歩の發展階段にある國民に於て人口の増加するといふことは、その國民の生活力の増加を示すに最もよき標準であつて、吾々はこれによつて初めて住民がその土地の人口増加に對する自然的制限を破つて歴史を作つて居るのを知ることが出

来る。

かゝる點から見るときは農業生活に於て土地の人口の急激に増加したといふことは、吾々が牧畜生活と農業生活を比較し、その社會生活に於ける發達を攻究する場合に於ては最も注意すべき問題であつて、恐らくその發達變化といふものは今日この農業又は手工業生活の時代から大資本主義の機械的生産時代に移つた場合の變化にも比ぶべきものであらう。今日の機械的生産に於て人々は俄かに生活經濟の大なる進歩をなし社會幸福を増加して居るが、農業生活に於て吾々の祖先が發見したところの生活の幸福もまたその社會的意味に於てはこれに劣らなかつたであらう。彼れ等が遊牧生活の貧弱なる經濟から農業による豊富なる生産を發見し、生活の安全と幸福とを得たことは今日吾々の想像するところよりも遙かに大なるものであつて當時の社會の人々は先を争うて狩獵や遊牧生活から農業生活に移つたのである。同時に彼れ等はこの生活に於て既にも述べた如く只自己の勞働に報ゆる生活の幸福のみでなく、先祖から貽せる勞働の結果による生活の幸福の更らに大なるものを發見した、かくて彼れ等の間に於て先祖の歴史的事業の堆積せる家を尊崇し、その傳説を中心とせる故郷の觀念が次第に強く人々の腦裡に印象せられるに至つた。彼れ等の家は先祖の生活勞働の記念として子孫に強き印象を與へ、或る家又は氏族の連續的

系譜の子孫であるとする感情は深く人々の腦裡に印象してして生活及び教育を支配する。吾々はこの時代の歴史を見るときは、よくこの事情を明瞭にすることが出来る。戰爭物語などを見るときは如何に人々がこれを尊重して居るかよく判る。疾風迅雷の如き迅速なる活動を要する戰場に臨んで敵も味方も鳴を鎮めて兩將軍がその先祖の名を名乗るのを聞いて居る有様は、今日吾々から見るときは全く異様の感がないが、彼れ等から見るときは斯くその先祖を名乗るといふことは戰爭を眞面目なる道徳的意味のものとなし、正々堂々とその勝敗を争ふになければならなかつたのである。彼れ等は單純なる虛榮心から先祖を名乗つたのではなく、先祖を追憶してその連續的系譜の子孫とし、その血族の最後の代表者として生死を屠する戰場に於て歴史を飾らんとする道徳的希望に基いたのである。彼れ等は只この希望の中に於てのみ勇士としての靈感を養ひ得たのである。今日古き系譜を有せるものが日常生活に於てその家紋を尊重するのはこの遺風であるが、この時代に於ては人々の生活が眞面目となり、事件が重大となればなるほどその祖先崇拜の念が高潮に達し、先祖の名に於て一切を裁斷せんとする覺悟を生ずる。

我が國の歴史を見てもこの覺悟によつて一身の名譽を全くし、社會の秩序を維持せること多大なるは人の知るところである。武士が終りを完くして芳名を千載を垂れたのはこの靈感によつた

ものといつてよいのであるが、彼れ等はこれによつて堅くその先祖と結合したのみでなく、同一血族のものは又堅く内的に結合して一社會を作つた。つまり先祖が同じであるといふので時間的にも空間的にも結合して一社會を作つたのであるが、一體この宗教的信仰による人の結合は人類社會の特徴である。歴史前の太古の人類もこれによりて既に或る社會的結合をもつて居つた。彼れ等は大自然や野獸の群中に於て自己の生活の安全を維持するためには狩獵生活を必要としたが、彼れ等はこの生活に於て凡ての動物を自己の敵としてこれを退治したのではなく、その中或る動物を以て、偶然の経験や一種の迷信から自己の生存を保護するものであるとなし、人間の技術では全く不可能なるところの方法を以て先祖を救ふたのみでなく、現に自己及びその子孫を救ふものであるといふやうに信じ、かくて彼れ等は或る種類の動物又は植物を以てその氏族の保護神であるといふやうに信じ、同じ信仰の下に人々が堅く内的に結合して堅固なる社會を作り共同的に團結して生活して居つたのである。併しその中に次第に知識が進歩してその生活を反省するに至るときは、人々はかゝる信仰によつて社會的に結合し共同的に生活するよりも、人々自身が進んで活動しその力によつて生活する方が良心の満足を得られること多いから、進歩するに随つてかゝるトーテムの信仰を離れて直接先祖の歴史的事業及びその人格を崇拜するやうになる。保護

神を信するよりも先祖の靈その物を崇拜せんとする現實的意識が強くなる。大なる活動によつて歴史の進歩を將來し、子孫の繁榮を招いた先祖の事業に注目し、その偉大なる人格の靈を崇拜するやうになり、その靈魂が子孫の幸福及び繁榮を保護するのであるとする信仰が勝つて来る。宗教が空想的から實際的となり、トーテムの崇拜に代はるに祖先崇拜を以てするが、この祖先崇拜は以上述べたる如くであるから、自然農業の定住生活時代に至つて長足の進歩をする。而してこの宗教が盛んとなるときは自然同一の先祖を有せるものは今もいつた如く内的に堅く結合して所謂同族社會なるものを作り、その社會に共通なる先祖の神話を産み出して來ると共に、歴史が發達するに随つてこれ等の社會間に諸種の關係を生じ、その中で最も勢力あり名譽ある血族に統一せられて、凡ての氏族がこの勢力氏族の神話を以て共同の神話となし、これに永久的從屬の形式を以て歴史を作つて來る。かくて原始的歴史時代に發見した家及び故郷が民族的國家的の家及び故郷となるのであるが、こゝに至るときは氏族史的統一の地方史が民族史的統一の國家史に發展し、人々の祖先崇拜の念も全く民族的國民的となる。我が國の歴史を見てもこの事實はよく判るが、我が國の歴史でこの事實を見たのは比較的上代のことである。我が國の歴史に見ゆる天孫降臨の神話にはアメノコヤネの命やフトダマの命などが隨從して居るのが見えるが、更らに溯つて

はオホナムチの命がこの國土を日の神に奉つた神話がある。これ等の神話は諸種の豪族が高千穂族に統一せられたるを示すのみでなく、その統一が神話化せられて我が國の歴史を作つた高千穂族の長たる太神が日神として日本の國主として仰がるに至つたことを示すものである。

勿論この神話は後世に出來たものである、記紀の編纂された時代までに出來た神話である。建國の初め以來我が日神の子孫の勢力が伸張して廣く國民の上に加はるに隨つて次第に史實を詩化して出來上つた神話である。隨つて原始的史實を美化したものであるが、この神話によつて只國民の口碑の上にのみ傳はつて居つたものが立派なる歴史として記紀に記載せられ國民の前に提示せられたから、國家の起原、王朝の尊嚴が一時にその光輝を發し、その神話の中にある日神の子孫は益々國史の上に光榮ある地位と勢力とを占めるに至つた。

この神話に於て日神に服從したものと及びこれから出たものが血族的統一の系譜を以て國家の歴史を作ると共に、この神話の編纂されるまでに直接間接この神の子孫と姻戚關係を結ぶに至つたものが擧げてこの歴史を作るに参加したから、全國民がこの神の流れから出た一民族として國家の歴史を作つてゐるといふ新事實が國史の上に現はれて廣く社會の人心を支配するに至つた。かくて歴史の發展するに隨つて我が國では次第に皇室は全國民の宗家であつて、國家はこの全國民

の故郷であるといふやうに考へられるに至り、我が國の社會組織を一變して終つた。國史上の事實としてこのことが現はれたのは既にも述べた記紀の編纂される前からのことであるが、以來吾々の國民生活に於ては原始時代の家及び故郷に對する觀念は我が國の歴史では皇室及び國家に對する尊崇の觀念とかはり、吾々國民の祖先崇拜は皇祖に對する崇拜となり、自己の先祖の名に於てすることは結局國君の名に於てすることとなり、國民は宗教的靈感を以て國家を愛し、皇室に忠節を致すやうになつて來たのである。

國民の歴史的事情によつては一度かゝる統一的國家史に達して全國民に祖と仰がるべき人物を得たる後、間もなく政治的革命によつてその宗家を國民の上に失ひ、國家の歴史の哲學的本源があつても、これを現在の社會生活に於て代表するに足るべき宗家なく、國家の社會組織上に於て大なる現實的權威を缺くに至つたものがすくなくない。これは最もその國の歴史上に於て遺憾とするところであるが、我が國に於ては幸に皇統連綿としてこの宗家がある。現在の天皇は日の神の世嗣として國家の歴史の本源を代表する現し神である、國民の歴史的發展の本源の力であつて、現在の社會生活の中心の力となつて居る。吾々は歴史の本源を神的人格的に考ふれば又この本源の歴史の現實的社會組織として天皇を中心にもち、國民の資格を凡てのこの本源の歴史の統

一的社會に求めるに至つて居るのである。これに關する歴史の哲學的見解は後に第四章及び五章に至つて歴史を哲學的に考察する際に改めて述べる。

人はこれを以て歴史の想像化であるといふかも知れぬが、國民はその歴史的發展の過程に於て相當の文化に達し、歴史の意味を理解するときは過去の史實に新らしき意味を發見する。この事實は歴史の認識について考察するときは一層明瞭となつて來るから、後にまた説明するところがあるが、吾々の個人的生活に於ても一生の努力によりて大なる成功を得て異彩ある歴史を作つたものには、過去の少年時代の小事件すら非常に意味あるものとなることは往々見るところであるから、一國の歴史の起原が國民の歴史發展と共に神聖にせられ神話を生ずるといふことは敢て怪しむに足らぬところがある。佛教に於ても吾々は藝術家の型像に對して所謂開眼といふことを遣る。これは人間の藝術的作品に對して宗教的魄を入れる儀式であつて、人々はこれによつて人爲的作品に宗教的意味を與へて信仰の對象とするのであるが、吾々は其歴史的事實に對しても仍且これと同様に宗教的意味を與へ、歴史の神聖を保障する。正に吾々自身の歴史を過去に投財したものである。併しこのために過去の歴史が吾々に對して特に道德的宗教的生活上強き制裁を有するに至ること如何ばかりであらう。吾々の日常生活の意味がこのために進歩すること實に驚くば

かりである。神話は詩に於ては型像と見るかも知れぬが、歴史に於ては最も嚴肅なる事實である。家及び故郷ならびに先祖といふやうなものは、人類が昔猿人から進化して來た跡を考へるときは大なる價值のないものである。併しその野蠻中に於ても、少しづつ、でも文明を發展し家を作り故郷の意味を發見するに至るについては、或る理想をもたねばならぬはずであつて、後世歴史が進歩するに隨つて古代史に溯つて大した價值のない歴史を神聖にするのは、これ吾々自身が現在この理想を認識する點に於いて進歩するからである。つまり古代に於て歴史を作つて居つたが人々の認識するところとならなかつた理想を認識してこれを後から體驗したものが神話である。隨つて神話は古代史にない新らしき形態を整へて來ると共に、想像的ではあるがその中には歴史の認識及びその體驗に於て後世の強き道德的態度がは入つて居る筈である。人は神話といつてこれを嘲り全く歴史の科學的眞理に合せぬと嗤ふかも知れぬが、この神話のない國民こそ現在歴史をもたぬ國民である。少くとも現在歴史の進歩をもたぬ國民である。

四、家族生活の變遷

さて余は前節に於て家及び故郷の歴史上に於ける意味の變遷について述べたが、この變遷に就い

て吾々の家族的生活の意味が如何なる變遷を経て居るであらうか。これについて研究することは歴史の一般的理解を得る上に於ても最も必要なることであるから、余は本節に於てこれについて研究してみようと思ふ。

既に述べたる如く人類は家及び故郷の意味を發展するに至つたとき初めて歴史を見るに至つた。従つて人類の歴史ではこの家及び故郷といふものが最も重んぜられ、血統とその血統のものに傳はれる先祖の事業を記念する土地とが最も社會生活に於て尊重せられた。我が國の歴史に於て國家の統一前まで諸地方に氏の長者があつて、その土地で地方史を作つて居つたことは斷はるまでもなく最も明白なる史實である。國家の統一は史實としては實は比較的遅いものであるが、この地方史的史實は我が國では諸種の形式を以て後世の歴史に影響し、つい最近迄も何某の末孫であつて何國の守であるといふことが歴史において最も大なる勢力をもてる時代が続いて居つたことは人々の知るところである。この時代に於ては一般に大家族制度であつて所謂一族郎黨といふときは隠然一國家の勢力を構へ、その一族を代表する家長といふものは絶対の權力を有し、一族に對して所謂生殺與奪の權力を有して居つた。隨つてこの時代に於ては一般に支族の地位殊に女子の社會上に於ける地位といふものは非常に低いものであつて、政治史から見るときは幾多

の英雄が出で、燦爛たる歴史を作つて居るに拘らず、一度社會の内面に立ち入つて家族生活を見るときは、驚くべき程男子の我が儘が女子を苦めて居るのを發見することが出来る。一體男子が權力を有するのは古代の歴史の特徴であるが、農業の定住時代に於ては生活の安全を保護するために自然強大なる腕力を有せる男子はその社會的生活に於ても大なる權力を掌握する。原始時代に於ては男子の強大なる腕力は女子の安全のために必要とするところであるから、自然男子は女子の必要に應じてこれを保護すると同時に、その女子から支配權を與へられる。繊弱なる兒童に對してもこれと同様であつて、父親は絶対的にこれを支配する。これが所謂父系家族制度時代に於ける特徴である。原始的野蠻生活に於ては人類は母親を知るのみであつたが、これを中心として群をなし所謂水草を追つて遊牧生活を營める母系家族の時代に比較するときは、農業勞働を生活の基本として兒童の養護を家庭の興味とせる父系家族は確かに人類の歴史に於ては大なる進化であるに違ひなく、既にもいつた如くこの時人類は初めて本來的意味の歴史を作るに至つた。社會は男子の勞働を尊びこれを中心とせる制度及び道德を生ずるに至つたが、一般的特徴として女子は男子によつて保護せられたる家庭内に於て男子の生活の一部分を扶けて往々に止まつて居つたから、女子の社會的地位は男子に比して非常に低く、絶対的に男子に服従せざるを得なかつた。婦

人は只男子の家を維持する爲に働き、家の権力は全く男子に吸収せられて女子は只その私有物たるに過ぎなかつた。我が國に於ても妻は例へば衣服の如くに古くなつたらこれを取り替へるといふやうな里諺なり思想なりが社會に行はれて居つた時代があつた。否、社會の一部分に於ては今日もなほこの思想をもつて居るが、かゝる家庭生活に於ては正當なる妻の外に蓄妾が行はれ、所謂一夫多妻制度の家庭となる。併しこれは道德的良心の直接命令ではなく、時勢につけ込んだ男子の我がまゝなる慾求である。随つてこの制度の社會に於ては男子の野獸的我がまゝと女子の社會的壓迫による屈從的墮落とを來たし、多婦中に於ける一夫の位置が獨斷的に高きために家族間に於て道德的均衡を失ひ、女子の遺傳的墮落は一般にこれを以てその社會的運命として諦めるやうになる。子供に對する關係もこれと同様であつて、吾々が自分で作つた物品を自分で勝手に支配し使用するやうに、父親はその子供を自由にする。勿論父親はその子女に對して生殺與奪の權力を有し、これを以て恰も所有物件に對すると同様に考へ、何等の遠慮もなく勝手氣まゝに支配する。男子の成長せるものに對してすらも父親のこの權力に動搖あるを欲せぬから、恰も暴虐なる君主が凡てを自由に放任しながら、自己の威嚴を犯せる行爲は如何に些細なる行爲であつてもこれを嚴罰に處すると同様に、父權を頑固に主張する。ローマ法の父權はかくの如くして發生し

たのである。ローマ法では國家の高官にある紳士でも一族の長たる家長なれば自由にこれを生殺することが出来るやうになつて居るが、一般にこの時代の家族制度に於ては、男子ですらも家長でないものは獨立の立場を得ぬから、その社會的交際によつて精神的意味のある教育的發達を來たすことは甚だ困難である。彼れ等は人格の獨立に基く生活の新見解に進むことなく、只社會的運命として過去の歴史的產物たる獨斷的階級の家族的生活に甘んずるのみである。

勿論この時代に於ては社會は一般に世襲的專制的であつて、政治に於いてはつよき封建制度が行はれて居る。一家内においては家長がその絶對的權力によつて全體の秩序を自己の意志で維持するが如く、社會に於てはまた君主が絶對的權力を以てその秩序を自己の意志で維持した。自己の權力を維持する點に於て欲するがまゝに社會秩序を作るといふのみであつて、その他では凡て放任であるから、國家や社會に統治作用があつても、そのために教育が進歩し、歴史が發展するといふやうなことは殆どない。何時までも同じ程度の生活に止まるのみである。

歴史の事情によつてはかゝる状態の生活が永く續くことがあり、又反對に短き間にこれを通過して終ふことがある。歐洲人では比較的早くから歴史のかゝる時代を通過して新文明の時代に入つて居るが、我が國に於てはつひ最近までこれを續続した。實は我が國に於ても既に述べたる

ところの歴史の進化によつて、地方的時代の家及び故郷から發達して國家史的の家及び故郷となり、前時代に解して居つた家が民族的宗家となり故郷が國家となれる時代に於ては、國民は一樣に神話の中にある日の神の流れを汲むものとしてその本來的價值と獨立とを承認せられたのである。随つて我が國の歴史の本質上に於ては吾々同胞國民は既に記紀の編纂せられた時代から自由獨立を得て居つたものといつてよい。しかし歴史哲學から要求さるべきかゝる國史及び國民生活上の眞理は實際生活の歴史上に於ては容易に社會に實現されるものではなく、國民は日の神の子孫としてそれ〴〵獨立を有し日の神が國民の本源としてこれを統一する我が國史上の事實は俗世的政治に於ては先づ貴族的王朝史の形式を以て實現せられ、日の神の世嗣が現し神として我が國を統治する政府を組織するに、我が國の斯の歴史的發展の根本的精神を代表する才能を以てせずして、姓氏録にある有力なる貴族を以てしたから、やがてその政治は國民の實際生活と没交渉のものとなり、遂に幕府の出現を餘義なくして國民は武力的統一の政治の下に立つに至つた。随つて吾々の先祖が歴史の意味上に得たところの本來的獨立自由の精神は一時は却つて退歩するやうな状態となつたのである。

かくて國民は久しく武斷的專制政治の下にその獨立を奪はれ、政府は多少國民の發達と幸福とを念とせぬではないけれども、自己の專制的政治を維持してその權力の神聖を少しでも傷けぬ範圍内に於てのみこれが發達を許されたのである。足利氏の末にあたつて我が國では再び國民の獨立的啓發運動が起つた。即ち眞宗の蓮如の一般的國民の啓發運動これである。從來我が國の佛教は貴族的であるが、眞宗は最も平民的な態度である。開祖から八代目にあたる蓮如は一般國民の啓發に努め、その獨立的發展に貢献するところ最も多かつた。かくて我が國の歴史上に於て貴族的王朝政治の下に於ても、政府の特權的政治の下に於ても徹底すること能はなかつた國民の本來的獨立はこの時漸く徹底するに至り、我が國はこゝに初めてその歴史の示すべき本來的生活の下に國民の獨立自由を實現すべき時代に臨んだのであつたが、家康が出現して變態的ではあるが以前に数十倍する強力なる政府を作つたから、今や漸く實現せんとした國民の獨立はまた奪はれて終つて、所謂士農工商といふやうな專制的社會制度の下に一般國民は再び士族の奴隸となつたのである。この專制政治がなくなつて國民が一樣に天皇の前に自由を得たのは明治維新後のことであつて、吾々はこの維新の新政治によつて初めて我が國の歴史の本源を汲む國民として獨立自由を承認された。即ち國家の政治の根本的原則として凡ての國民にその自由を承認せられるに至つたのである。

我が國の歴史が如何にこの國民の自由によつて發展したか明治維新以後の歴史を知るもの、等しくこれを承認するところである。維新前の政府の専制政治に於ては直接國家の問題に干與するものは士族のみであつて、他の階級のものには只この士族の生活を維持する機械に過ぎなかつた。多數の農民は所謂土百姓として何藩の何兵衛と呼ばれ全く土地に附屬して居た奴隸に過ぎなかつた。所謂農奴であつたのである。只俗世的權威を超越せる醫者と僧侶とのみその社會的階級の如何に拘らず自由に進達を許されたるにとゞまつた。随つて徳川時代に於ては多くの英才は醫者と僧侶とになつたが、大體から見るときはこの時代の社會組織は全く獨斷的封建的であつて、一人の將軍がその専制的權力を維持するために、社會全體が全く固定的宿命を與へられたるに満足する外なかつた。人道から見ても、不合理なる制度も、歴史の事情によつては容易に改正せられるものではなく、將軍が絶対の權力を有し随つて大名や士族がそれ／＼また社會制度の上に無限の權力を有せるときに於ては、何等の疑問もなく正當なる制度たることを社會的に承認せられる。否、或る場合には更らに溯つて社會的に歓迎せられることすらある。即ち國民が長年月間の専制政治の下に屈從に甘んずる意氣地なしになるときはこれを歓迎する。しかしその中でも志あるものはかゝる専制政治を以て快とせず、殊に國家の本來的歴史と矛盾せるかゝる専制的政治を欣ば

ず、歴史の與へる國民の本來的自由を考へることに、これを倒してその本來要求するところの自由政治を施かねばならぬ、日本國民としてその歴史の本源に溯り天皇の統治の下に獨立自由の國民とならねばならぬといふ希望は胸中に燃えて居つた。これが明治維新となつたのである。吾々はこの新政治によつて國民として本來有すべき自由を得たが、この自由運動には歐洲の自由民權思想の影響が最も大なる働きをなして居る。随つて吾々の本來的歴史に於て有すべきところの國民の獨立自由は國家の政治上に於ける獨立自由となつて現はれ、吾々國民は今日では憲法によつて生命及び財産の自由を保障されたるものとして、社會的生活に於ては經濟的自由及び人格の自由を中心にしてその組織を一變した。今までは吾々は百姓の子である故に土地に附屬せる物件として土地と共に賣買せられ、社會の有力階級の生活を維持するために機械として土地を耕すといふやうなことはない。天賦の才能を恵まれたるものはその才能を自由に使用するを得るだけの自由の社會を要求するが、社會も亦この個人の自由を承認し、その獨立的發達に社會自身の發達及び繁榮を求め、今日は正にこの自由時代である。

今日は文明の第一特徴として社會に於ける個人の人格の自由を承認し、凡ての人々をしてその人格の獨立と能力の自由使用とを得しむるのみでなく、なほその人格の獨立を確保し能力を自由

に練磨し發揮せしむるために社會に幾多の教育機關を設け、人々をして自由にこれに入つて修業せしめる時代である。今日多數の學校が國家の手で經營せられ國民がそれ／＼その志望するところの學校に入つて手腕を磨き人物を練つて居るのを見るときは、何人も容易に今日は如何なる時勢であるか、これを推察するを得るであらうと思ふ。我が國でも五十幾個の専門學校があるが、これに各種の中等程度の實業學校を加へ、普通中學から大學までを數へるときは國家は國民の自由發達を期待するために如何ほどの經費と努力とを拂つて居るかこれを想像するに餘りある。否、今日では只多數の學校を經營し、國民をしてそれ／＼その志望の學校に入つて修業せしむるのみでなく、なほ進んで學校内に於て自由の教育を許し、百人集れば百人自由にそれ／＼自己の志望するところに向つて進み得るだけの自由教育を承認せんとするまでになつて居る。吾々はこれを明治維新以前に於ける寺子屋教育と比較し、その精神に於ける根本的差異と規模に於ける比較にならぬ大發展とを考へるときは、今日の國家及び國民の隆昌の決して偶然ならざるを知ることが出来、國家及び國民の興亡盛衰はその歴史的發展の本來的自由を承認し、これを合理的に發展せしむるときにのみ得られるべき所以を悟ることが出来る。

只斯かる本來的自由を得たる場合に於てのみ國民生活の凡ての方法に於て歴史の本源的精神が具體的に實現せられ、所謂普天の下率土の濱に至るまでみな是れ國家の歴史の本來的發展の具體的成果を結ぶ國民たるを得る。國民がその歴史の本源的精神に立つて自由の歴史を作る限り如何なる片田舎に於て人に知られない貧しき家業について居るものであつても、その生活は國家の本來的歴史を發揮せる生活であつて、立派なる國民の資格をもつて居る。

彼れ等はその特殊の地位によつて國家の歴史を作るといふよりも、本來國家の歴史が彼れ等に特殊の歴史を作らしめて居るのであつて、彼れ等の生活こそは本來的に國家その物の生活の個性的發であるといへる。彼れ等はその生活に於て全國民と本源的に結合し、この小なる家も國民の家の意味をもち、狭き故郷も國家の意味あるものとなつて居る。小さき先祖の名に於てなすところの事業が哲學的には既に國家の名に於てする永久の大事業となつて居る。國家及び國民の統一的發展といふことは只この場合に於てのみ考へられるのである。

斯る歴史の新時代に於ける家族的な生活に於ては勿論族父的家長制度時代の男子の専制はない。家族及び國民の本來的資格を定めるものは、只この歴史に對する人格的努力のみである。今やこの努力によつて國民の品位を高めるを以て國家及び社會の使命とするから、以前の如く男子の女子に對する社會的我が儘は許されぬ。随つて女子が以前に比して著しくその社會上の地位を高め

て来る。曾てローマ時代に於ては法律は家長の権利を承認する點に於てその大なる組織的能力を發揮したが、今や法律は男子に對して女子を解放する點に於てその合理的組織を徹底することを努める。かゝる自由時代に於ける家族的な生活が古代と異なるものあるは想像するにいと易きところであつて、今や財産に於ても婚姻に於ても全く女子は自由である。併しかゝる新時代の要求も社會の因習を一掃することは容易ではなく、殊に最近まで男子の專制になれた我が國に於てはこの自由の要求は國民生活の諸種の點に於て没却せられる。複雑なる社會に於てはこの點に於ける進歩はまち／＼であつて、中には少しも現代のこの自由關係に基く生活を理解すること能はぬために依然として舊時代の理想に捕へられ、今日でもなほこの新家庭の意味が十分に徹底せず、舊時代の農業生活の定住時代に初めて發見した傳統的家族生活を固持して居るものが随分多い。この點に於て我が國の今日は全く過渡時代であつて、歐米先進國に比較するとなほ非常に遅れて居る。我が國では明治維持の宏謨によつて、吾々は今日新家庭を作るべき時代にありながら、なほ實際生活に於ては國民の多數のものは封建時代の家長制度の家族生活の考へをもつて居る。吾々の家族制度では上に家長即ち戸主を戴き、その下に家人が從屬して一家を作るのであるが、これに遅れた思想の家族生活が加はり、その結果が今日でも動もすれば一家が上下に於て祖父母から孫曾

孫の三四代に渡るものが珍しくない。またその一家族内に於て二夫婦も三夫婦もあるといふ有様であり、その下たはまたそれ／＼その子女が居るといふ状態であるから、家族の数は可なり多數である。我が國ではつい最近までこの族父的家長の大家族制度を有せる地方はなほ残つて居る。丹波の或る地方とか飛彈の或る地方などに往くときは今もなほこの時代の大家族制度が残り、一族の長たる宗家の家長は只その一家のみでなく全部落の一族に對して非常に大なる権力と尊敬とを享受して居つた跡が残つて居る。交通が非常に不便であつて文明の影響の容易に達せぬ地方に於ては維新後もなほ永く舊制度の家族生活を維持することが出来たものと思はれる。併し今日では最早それも叶はぬで只形骸ばかり昔の文明を偲ぶ材料となつて残つて居るのみとなつて居ることとは、特に吾々の注意を惹く。

人類が農業の産業革命によつて適者生存の價値を得たときに約六倍の人口増加を見たが、この六倍の人口増加といふのは實は太古代に於て既に見たところである。随つて自然に開墾し得べき便利の土地では人口は古代から飽和に近い状態にあつたのであつて、人類は古代から随分山間僻地にも生活の餘裕のあるところには滲入して居る。飛彈の白川村の如き即ちこれであるが、かゝる村でも人口は既に飽和状態である。随つて生活資源が一般に缺乏して居る、従來の原始的農業

では最早それ以上住民を許さぬまでになつて居るから、年々増加する人口を支へるためには成るだけ原始的共同的經濟によつて生活を維持せねばならぬために自然的必然的に大家族制となる。併し一度社會の政治的變遷によつてかゝる大家族を統一すべき家長の特殊の權力を承認せぬやうになつた上に、社會は凡て自由經濟組織となり、人々の勞働能力を著しく増進して適者生存の價値を進歩せしめたから、春陽に氷雪の釋けるが如くに大家族制がこはれて小家族制となり、同時に男女の婚姻に於ても又以前の如く家長や所謂尊族の許可を得ねばならぬといふ制限がなくなり大體夫婦の共諾を以て成立する大勢に向つて來た。かくて今日我が國では自由經濟が社會組織を一變して社會に於ける經濟上の封建的特權を認めぬに至つたと共に、家庭に於ける婦人の地位を高め従來の奴隸的境遇から解放すべき思想及び運動が社會的に根強くその頭を擡げて居る。

今日は我が國では全く舊時代の家長の專制的獨斷的暴力を葬つて婦人の獨立を救ひ、舊時代の大家族制度から新時代の自由の個別的小家族制度の家庭を作るべき時代である。隨つて第一家庭の特徴として従來夫に對して全く奴隸的從屬的關係にあつた妻が獨立自由の立場に立ち、夫婦は互に獨立の人格を以て一家を組織してその經濟の獨立と子女の教育とを念とせねばならぬ。勿論この考へを徹底し人格の獨立を徹底するときは、我が國の將來に於ても所謂戸主なき家族の自由

といふことを承認せねばならぬやうになり、隨つて今日の個別的小家族制すらもこれを棄てねばならぬ時期の來るべきことは、本來歴史の進歩に照らして何等の疑ひもなきところである。この點から若し家族制度の存廢に關して理想を問はれるならば余は斷然これが廢止を唱へるに躊躇せぬ。吾々はこれを承認せずして歴史を考へるを得ぬのみでなく、實は現在の歴史的階段に於ける家族制度も、これを承認せずしては大した意味あるものと考へることが出來ぬ。現在に於ては吾々は家族制度を探り、戸主を認めながら家族の獨立を承認する點に於て諸種の家族生活の特徴を有し、國家の歴史に貢獻して居るが、これは實は既に道徳的にはこの戸主なき家族の自由を歴史の理想として進みつゝあるのである。曾て吾々の先祖が太古の原始的歴史時代に於て家長の絕對權力を承認して、家族を以て物件視した時代から同じく家長の絕對的權力を承認しながらも家族を以て單純なる物件と見ず、これに多少の人格を承認するに至つたのもこの家族の自由の理想を有したからである、又更らに進んで家族の人格の獨立を完全に承認し、家長が只親族的關係に於て特殊の權利と名譽とを有するに至つたのも同じくこの理想のあるためである。我が國の今日の家族關係は大體に於てこの時代にあるものと見ねばならぬが、人類の歴史に於て人格の承認がこゝに至らしめたとして見れば、これから更らに進んで道徳上の戸主はあつても法律上の戸主なき家

族の自由、凡ての家族の平等的關係に立つ自由を承認すべき時代が来る、今日の個別的小家族制度がすたれて個人主義の社會が発生すべきは何等の疑ひもなきところである。この意味に於て余は我が國の家族制度も早晚崩潰して個人主義の家庭生活の現はるべきことを斷言して憚らぬ。現在の家族制度を以て何時までもこれを維持すべきものゝ如くに考へるのは全く歴史の事實と理想との區別を知らぬものゝ議論である。併しそれかといつて余は今日直ちにこの家族制度を廢止して個人主義の家族を作るべきを主張するものではない。吾々はなほこの家族制度の生活に於て歴史の發展上なすべき幾多の事業を有して居る。社會組織に於ても國民の思想訓練に於ても、吾々はなほ今日の歴史的階段に於て家族制度の方面からなすべき幾多の事業を有して居る。この事業の完成が吾々に於ては同時にこの制度から新制度に移るべき自然的階級でなければならぬ。今日家族制度の存廢に關して社會に幾多の議論があり過激なる論者の中には今日直ちにこれを廢止すべしと高唱するものがあるが、これは又歴史進歩の順序を知らぬものである。吾々は今日この小家族制度の下に於て十分國民を進歩的に教育し、國民に歴史の本源について徹底的人格的理解を得しめ、國民がそれ〴〵個人的獨立を得その人格的自由の立場に立つときに益々堅固なる結合によつて本源的歴史を現實的生活の中に發揮し得べきを知り、政治に於ても道德に於ても今日よ

りも遙かに進歩したる形式に於て家及び故郷、國家及び宗家の意味を理解し、益々純粹なる形式によつてこれを日常生活の間に具體的に實現するに至つたとき、一口にいふならば吾々自身が今日よりも進歩せる意味に於て歴史の本源的立場に立ちて國民と堅く結合し、吾々自身が獨立に國家を代表し得る道德的歴史的人格となるに至つたとき新家庭生活、戸主なき家族の個人的自由生活が實現せられねばならぬ。随つて實際歴史生活の進歩的階段に立つものとしては、吾々は今日この戸主制度の家族生活を以て成るべくこれを道德的進歩的に解し、家族の結婚や財産に關する問題は成るべく個人の自由を承認し、個人は一家の平和幸福なる發達を圖るために戸主に相談してその許可を得るやうにすべきものであつて、法律的文句を陳べるべきものではない。

吾々は現在の家族制度を成るだけ進歩的道德的に解しつゝ、現在の國民生活を立て、國民的教育的進歩によつて個人に國民的性格が確立し今日よりも道德的にも法律的にも一層よく國家の本源及び歴史の本質を理解するに至るに随つて、次第に家族制度の今日から個人主義の新家庭生活に進むべきものである。この點から現在の我が家族生活を見るときは吾々は既に述べたる如くであるから我が國の今日としては恐らく婦人の獨立を承認しその人格の自由を尊重することが最も必要であらう。英國人は我が國民に比較するときは既に長足の進歩を有し、政治上に於てすらも既

に自由となり婦人參政權を迄得て居る、随つて女子の社會的位置は凡ての點に於て進歩して居る最近物故した英國のシユライネル女史は、これまで男子は餓死か職業かを問題とし女子は餓死か寄生蟲かを問題としたが今日は女子は最早餓死か寄生蟲かを問題とすべき時代ではなく、男子と同様に餓死か職業かを問題とすべき時代である。女子も男子の經濟に寄生して奴隸的に生活すべき時代ではなく、獨立の職業をもつものとして經濟の獨立を得ねばならぬ時代であるといふことを社會的に高唱した。これに對して女史の議論をもつて女子の天職たる母性を無視をする僻論であるといふ非難を向けるものがあつたが、女史はこれに對して母性を無視するのではない。母性の本領を全くするために先づ母親としての經濟的獨立が必要であると酬いた。これは近代生活に於ける女子の氣力を示した語として吾々の最も歡迎するところである。吾々は何も女子に對して男子と同じ職業につけとか収入をもてとかいふものではないが、家庭の生活を整理すべき任にあたる女子には、男子が外に出て職業につくと同様にその家政を整理すべき獨立の能力と人格とを要する。また場合によつては男子と同様女子も社會的に適當なる職業につくことを要す。女子は本來女子としての天分から進歩せる社會の一半の負擔を負ひ男子と相並んで女子として自由にその能力を發揮せねばならぬ。随つて家庭内に於ても社會に於ても、女子が男子と對等の人格的及

び經濟的獨立を有すべきことは當然過ぎた當然であつて、恐らく今日の我が國の社會生活の向上にこの女子の獨立の人格から出る無限の愛と能力とほど緊切なる必要を感じるものはないであらう。ピスタロッチは家庭をもつて凡ての教育の根本となし凡ての教育を以てこの自然的延長となすべきものであるといふことを考へて居るが、かゝる家庭生活及び教育は婦人の人格が獨立となり、一家がその人格及び手腕によつて整理せられると共に、その精神が乳房を通じて子供に傳はるときに得られることであらう。この家庭から社會に人道の罪なき百合の白き花をも咲かせ得ることであらう。

余はかゝる點から見て今日我が國の婦人が一般に獨立思想を養成し來りつゝあることを最も欣ぶものであつて、恐らく我が國の今日の社會の歴史は婦人の自覺に基く高尚なる母性愛と新時代を洞察する見識とによつて進められることが最も多いであらう。一家の經濟を最も有効に處理するだけの見識と手腕ならびにその天分を十分に發揮するだけの人格に待つものが最も多いであらう。既に述べたる如く吾々の同胞國民としての結合は國家の歴史の本源を理解する道德的人格によつて得られるのであるが、かくのごとき人格は獨立の人格ある婦人が具體的に家庭の生活を處理する中に養成せられ、人格ある婦人が獨立にその人格及び能力を發揮し得る家庭内に於てのみ

得られるところである。

ところが實際に於て家庭及び婦人を仔細に點檢するときは、吾々はなほこの點について懸念に堪へぬものがないではない。婦人が一般に自覺して來たことは既に述べたが、この自覺もよく見るときは一般的啓蒙的自覺であつて、人格の自由なるべきことは知つたものゝ、さてその自由の人格によつて日常生活の間に起こるべき諸般の問題を如何に處すべきかといふ點になるときはなほ具體的方針の立たぬ場合が多いらしい。随つて今日の我が國では婦人が獨立の人格をもつ自由者でなければならぬといふことは、なほ一般的抽象的理想であつて、具體的道德命令となつて居らぬ憾みがある。これは吾々の最も遺憾とするところであつて、吾々はなほこの點に於て幾多の修養を積むべき急務をもつて居るものといはねばならぬ。併し省みればかくの如きは只婦人の側に於てのみではない。國家の堂々たる法律に於てなほ然りである。我が國では憲法に於て凡ての國民の自由が承認せられ人格の獨立が承認されて居る。憲法の前には男子も女子も同様の資格である。併しこの憲法の精神を具體的に實行すべき各般の法律に於ては必らずしも女子は男子と同様にその人格の自由を承認されて居らぬ。國家の政治に參與すべき公共問題は姑く別として、女子自身の人格の個人的獨立を男子と同様に承認すべき筈の法律、即ち民法中の親族法や婚姻法に於

ても女子は男子と同様の地位及び獨立の人格を承認されて居らぬ。事實に於て男女の合意になつた結婚をも法律の形式主義即ち婚姻は届出によつて成立するといふ條項のあるために、法律上の形式を踏んで届出のない限り實際立派なる妻たるに拘らずこれを内縁の妻といふやうなものとなし、その子を庶子とか私生子とかいふものとなさねばならぬことすらある。歐米では教會で結婚式をあけると共に婚姻の効果を生ずるが、我が國の民法では役場に設けてある戸籍簿の上に入籍の手續きをとらぬ限り、事實上數年間同棲して居つても法律上では夫婦と認められぬ。随つて若し數年の後に破鏡の苦痛を見るやうな不幸のあつた場合に、女は妻として正當なる主張をなすことが出来ない。さりとして貞操蹂躪の訴訟を起こしても最初合意の上で同棲したのであるから、女子の勝訴となることは六ヶしい。どうしても女子の敗訴となり、全く女子は法律の不備のために社會的に大なる苦痛を受けて居るのである。大正四年大審院立法がこの法律の不備を補ふ目的で結納をとり交はし、結婚式をあけ事實上同棲せるものに結婚の豫約を認めるといふ判決を下したことがある。この判決によつて女子は餘程救はれ、破鏡によつて謂ゆるキズ物となつたときに、その精神的身體的苦痛に對する慰籍料を請求すべき訴訟を起こし得るやうになつた。しかしそれでもなほこの婚姻法に於て女子が著しく不利の地位にあることは争ひがたきところである。財産

上の關係に於ても女子は男子よりも著しく不利の地位に立つて居る。吾々の先祖が長き歴史の年代を通じて男子の暴威を振うて來た餘焰は今日もなほ法律の上に残つて居る。尤もかくの如き民法上の不備は獨り我が國のみでない。個人の自由を尊重すること最も大なる佛國の民法に於てすらこの種の不備不徹底があるのであつて、吾々は獨りこれを我が國民の法律上に於ける缺點とのみ見るに足らぬ。殆ど凡ての文明先進國に於ても今日なほその例を見るのであるが、兎に角我が國に於てはこの點に於て殊に甚だしきものがある。吾々はこの點に於て國民として最も努力するところがなければならぬ。法律に於て不備の點があるといふことは、つまりその方面に於ける國民の生活に於て理想が缺けて居るといふことを示すものであるから、吾々はこの方面に於て最も大なる努力を積まねばならぬが、これと共に吾々はその新らしき法律を生活の各場合に於て活かして往くべき進歩的生活をなすことが一層必要である。吾々が國民としてこの方面に於ける法律を制定すべき精神を理解し、これを吾々自身の生活の各場合の事件に具體的に活かして往くことが必要である。法律は只この個人の具體的努力の中に於てのみ現實的に國民生活の凡ての場合に於て生きて來るのである。吾々はこれ等の不徹底な法律を順次國民生活の現在及び近き將來の觀察に基いて改正せねばならぬが、この改正に先つて吾々自身がこの現在の法律を進歩的・道德的に

解釋し、これに新意義を與へることが差し當り必要であり、隨て婦人の社會的地位を向上すべき教育が最も必要である。吾々はこの教育の進歩と共に溯つて法律の改正をも行はねばならぬが、恐らく今日吾々の國民生活から見るときは女子の社會的地位を向上し、その自由を承認するだけの社會制度、法律及び教育方於を講ずることが必要であつて、歴史の本來的發展に基く社會の進歩及び國民の本來的結合はこれによつて實現せられるところが甚だ多いことであらう。今日我が國に於て婦人の向上を考へずして社會の改良を期したり國民の教育を進歩せんとすることは最も大なる矛盾であつて、これでは教育上所謂良妻賢母といふやうなことを唱へたり、夫唱婦從といふやうなことを論じたりするといふことは、事實に於て全く女子を以て奴隸的屈從に甘んずべき動物となさんとするに等しきものである。これでは歴史の本來的發達とか國家の統一的繁榮とかいふことを考へても、全く一場の夢となる外ないであらう。國民の教育といふやうなことは矛盾ある社會制度の下に於ては行はるべきものではないのである。

五、社會の道德的結合

偕、余は前節に於て家族生活の變遷について述べ、昔は女子は男子に奴隸的に附屬して居つた

が、今日は獨立自由の地位を得べき時代である。凡てが自由關係に基いて道徳的に家庭を作るべき時代である點について述べたるのみでなく、猶ほ議論の進むに従つて將來この家族生活をすらし棄て、全然個人の自由關係に基いた家庭生活を作るに至るべき時機の到來すべきものであると論じた。ところが一步轉じて考察するときは、我が國でも近來一般に社會が個別的家族制度となれるために家及び故郷の意味が次第に失はれて人々の國家觀念が薄らいで來た傾向があるのみでなく、更らに進んで所謂進歩せる人といはれるものであつて、個人的自由に家庭生活、戸主すらない自由の個人主義生活をなせるもの、間には動もすれば社會や國家の秩序を輕蔑したり破壊したりするものあるを見る。こゝに於てか人々はこの新家族制度の將來に對して大なる疑問をもつ譯である。余はかゝる疑問の所以なきことは既に一度論述したところであるが、併しこれは國民及び歴史を考察する上に於て最も重大なる問題であるから、本節で改めてこれが解答を試みる共に、一層深く歴史の一般的性質を示さうと思ふ。

勿論今日の如く社會の人口が増加して個人の生活經濟が困難となり、また昔の如く先祖の家で幸福なる生活を營むこと能はず、生活の安全なる保障を得るために故郷をすて、四方に分散せねばならぬ時代に於ては、勢家及び故郷の歴史的意思に大なる變化を生じ、人々はまた血統とか傳

説とかに注意せぬ。今日は多くの家庭では先祖といつても兩親若しくは祖父母位のことしか知らぬ。それ以上の血統については知るものがすくない。随つて昔の如く家若しくはその傳説が社會組織に重きをなすこと能はぬ。今日の社會は職業の自由がある上に交通の便利があるから、少しく才能をもつてゐるが從來の土地では思ふやうに生活方針の立たぬものは、便利なる新職業を求めて他郷に出て行く。随つて從來の意味に於ける家とか故郷とかいふものがなくなり、同時にまた血統も從來の如く社會的に尊重せられず、只管手腕と人格とを尊重する。由緒ある血統をもつものでも華族の如くそれが直接生活の資力となり社會から特別の待遇を受けるのでない限りは、今日は誰人も餘りこれに注意せぬ。故郷を離れて他國に出づると共にこれを忘れて終ふやうになる。随つて我が國の今日などでは自然社會的結合が緩くなり、所謂肉親の溫味のある社會が見られなくなつた代りに、全く他人行儀の冷き社會を見るに至つた點がないでもない。かゝる點から自然今日の自由經濟制度や個別的家族制度の價値を疑ふものゝ生ずるといふことは一應無理なきこと、いはねばならぬ。併しこれは一を見て他を見ざる觀察である。勿論近代生活ではかゝる缺點があるに違ひないが、これは寧ろ我が國などの今日の社界が過渡時代であつて、過去の制度をすてたけれども新制度の意味を十分に理解すること能はざるものがあるから暴露するところの缺

點に過ぎぬのである。吾々は近代生活に於けるかゝる事實を観察するよりも、寧ろ進んで近代生活では自然的血族的關係による結合はなくなつたけれども、その代りに生活の各場合に於て起るべき事件を道徳的に解決して、以前には曾て見ることも能はなかつたところの深き人格的感情を發表し、この感情の満足の下に堅き社會的結合を作つて居ることを觀察せねばならぬ。實に近代人の生活興味は複雑なる社會關係を律すべき精確なる規則を作つて、その中に織細なる道徳的感情を發表し、これによつて合理的社會生活の堅き内的結合を作るにある。

勿論吾々人類は過去の歴史に於ては同一血族であるといふ點から強く社會的に結合したことは事實である。小なる範圍に於て共同的先祖の知られて居る氏族に於ては同じ血族であるといふ感情が強く、諸種の社會的生活問題に反響をもつて居つた。併しこの感情は氏族が結合して民族となり、社會の多數の人々が相集つて交際するに隨つて次第にその強さを減じたものである。この感情の強いのは同胞の數が非常に少數である場合に限るのであつて、多數となるときは次第に弱くなつて来る。一體人間の心情といふものは無數の事物を同一の活動感情を以て包括することが出来るものでない。隨つて人間は少數の家族生活に於ては温かき血族的感情を以て堅く結合して居るが、次第に繁殖して多數の同胞となるときは、凡ての人々に以前と同様の温き感情を分つこ

とが出来ぬ。吾々人間の社會生活に於てはこの幸福なる心情の強さはこれを廣く社會の多數のものに適用するに隨つてその力を減少せざるを得ぬ。このやうな次第で一般に人類がその族父的生活から出發して無限の繁殖力を以てその數を増加し、只本質の似て居るといふのみであつて、形態も精神的能力も異なる無數の民族となるときは自然その生活感情を異にし、存在の價値を評價する點に於て變動を生ぜざるを得なくなるから、同一民族中に於ても分離の傾向が強くなる。血族上の同胞であつても地球の表面に於て遠く隔れる地方に住居せるときは、共同的生活の努力をなさんとする希望をすら抱かぬが、接近したる場合にこれと異つて相互に親密なる結合をなすかといへば必ずしも然りとは限らぬ。國民の發展過程中に於て利害の異なる階級などを生ずるときは、同一血族の近親であることが明瞭に判つて居るときであつても、互に憎惡の念を以て自己の利益を主張して相争ふことが随分多い。古來同一血族の國民間に鬭争の絶えなかつたことは誰人もよく知れるところであるが、殊に血族的關係の明瞭なる近親の間柄であつてすら激しき鬭争の起こつたことは随分多い。一個の波が池中に生ずるときはまたその次ぎの波が生ずる如く、殺伐なる地上生活に於ては同一血族の親族間に於てすらも次ぎから次ぎへと鬭争を事として止まぬ例は随分多い。されば先祖が同一であつて血族的に同胞であるといふことは設合歴史に明瞭なる

證明がある場合に於ても、國民の現實的生活の堅き結合を支配するほど大なる勢力を有せるものではない。

勿論同胞の血族的結合が人類の歴史上に於ける社會的結合を強くせぬではない。併しこれは吾吾がその社會生活に於て共同的運命に對して道德的に努力する場合に限るのである。人はその結合の結果を見て、結合するにしなければならぬ眞の力、結合を生ずる主觀的要素に對して注意せぬから、常に究竟の眞理を逸する。吾々はこの場合に於ても最も注意してこの眞理を捕へねばならぬが、結合の紐帶、吾々をして同胞なる感情を抱かしむるものは共同的運命の認識信仰である。一體同胞といふものは元來その共同的團體に與へられて居るところの同一の精神的性質、共同的生活の同一なる運命の認識信仰を同じくするものをいふに外ならぬ。随つて形態からいふときは全くことなつて居つても、精神的性質及び歴史の信仰が同一であれば立派に同胞といふ感情を抱くことが出来る。故に歴史を見ても十字軍の如きものを編成して諸國民が一致團結して遠征に従事したることあれば、また反對に同一國民であつてもその共同的運命の認識信仰に曇りを生じたる場合には分裂して異國民も嘗ならぬ鬭争をことゝしたる例は随分多い。フィヒテは獨逸國民に告げたる演説に於て、如何なる處に住まつて居つても構はぬ、獨逸國の獨立を念とし、これによつて

活動するものは眞の獨逸國民である、同胞であるといふことを高唱して居るが、實にこの語の通りであつて、吾々は何處に居つても同一の精神生活によつて國家の歴史的発展の精神による國民の本來的生活をするならば、その點に於て立派に同胞たることが出来るのである。見よ最近の世界戦争に於て、獨佛の社會主義者が平素それ／＼國內で大紛争を巻き起こして居つたにも拘らず、國家の興廢を眼前に控へたる大戦争にあつて彼れ等が國民の歴史的運命を認識した刹那に平素の主張をすて、祖國の獨立のために闘つた例があるのは吾々のなほ記憶に新らたなところではないか。

若し同胞國民のかゝる高尚なる歴史的信仰による結合をすて、血族的結合を以つて本來であるとするならば、吾々の今日の生活は如何になるのであらうか。先祖が同じ、あれば子孫は堅く結合するといふが、吾々多くの國民は今日誇り得べき先祖をもつて居らぬ。多くの同胞は既にも一言した如く父母を知るのみであつて祖父母を知つて居るものはすくない。況んや曾祖父母といふやうなものに至つては全く名をも知らぬのが國民の大多數である。随つて吾々は多くの國民についていふならば家もなければ先祖もない。只日本人であることを知つて居るのみである。随つて國民や同胞の結合は漠然として極めて不完全なるものといはねばならぬ。併し誰人も吾々日本國

民であつて同胞としての結合がかゝる不完全なるものであるといふに甘んずるものではなく、若し誰かかゝることを口にするならば、言下にこれを否定して同胞の堅き結合を主張するであらう。是れ吾々は血族的關係によつて時間的空間的に結合せる以上に、なほその根柢に同胞として同一の精神生活による堅き結合を有せるからである。吾々の共同的先祖が天照太神であり、日の神であるといふことも只血族的關係から見てもこの神が吾々の共同的先祖であるといふばかりでなく、それよりも道德的意味から見ても共同的先祖であり歴史の共同的根源であるべきことは既に述べたが、吾々は一切の先祖と道德的に本來の意味に於て結合すれば又現在の同胞とも本來の意味に於て結合して居る。吾々同胞の結合は本來道德的である。勿論この道德的結合は今日の吾々のみでない。古代の先祖に於ても矢張同様に見たところである。親類よりも近隣といふことが人類社會には昔からあるが、これは近隣のものがお互に助け合ふからといふのみでなく、その助け合ふ日常の行動の間に道德的感情を發表し、一般的世間的關係では見ることの出来ない織細なる方法で人格的に結合し、少くとも彼れ等の生活では社會的交際が最も人格的生活の意味をもつてゐるため、彼れ等は互にその社會生活に於て同胞たるの感情を有することが出来るからである。

今日吾々文明人では進歩せる文明的利器の交通的整理によりて遠方のものとも自由に思想の交

換をなし、道德的感情の織細なる發表をして居る。込み入つた諸種の社會的團結において最も進歩せる織細なる方法で、更に人格的に交際しつゝ、その道德的感情の満足を求めて居る。吾々の社會生活では諸種の込み入つた規則がある。國家の法律を初めとして大小幾多の社會的秩序があるが、これ等の秩序はみな吾々の人格的結合の織細なる道德的感情の發表として大なる社會的意味をもつて居る。吾々文明人の社會ならびにその交際は全くこの感情によつて成立して居るといつてよい。人も知る如く吾々文明人の社會生活では巧妙なる態度の中に圓曲なる方法を以て相手の人格に對する尊敬の感情を十分發表すると共に、自己の人格の高尙なる發表によつて相手に好感を興へることを努める。吾々はこの感情が存在し互に人格尊敬の念を有する限り、社會的交際の手續は成るべく簡單なるものを選び、次第に多忙なるべき近代生活に於ける事務の進行を助ける。人格觀念の未だ十分に發達せぬ未開人に於ては諸種の形式的儀式によつて社會的交際を飾る必要があるから、彼れ等の社會的生活上には諸種の冗長なる形式的儀式及び裝飾がある。併し吾々文明人に於ては最早かゝるものはない。吾々の文明生活に於ては出生とか死亡とかいふ人生の大なる區切りをなすものに對しては社會的に儀式を設けてその中に人格感情の發表を求め、文明人に於ては大なる生活事件を意味する儀式に於ては、その形式を尊びこれを莊重にする。子貢が告

朔の餽羊を去らんことを乞ひたるに、孔子これに教へて賜やその羊を愛す、我はその禮を愛すといふたのが乃ち文明人の大なる儀式に對する感情を最もよく表明したるものであつて、彼れ等はその國民の社會生活に於ては重大なる儀式を簡略にするといふことはない。併し日常生活に於ては人格尊敬の感情に變化なき限り、教育ある文明的紳士間に於ては或る交際形式を他の交際形式に變更することは差支ない。形式的虚禮をすて、自由の道德的感情に信頼するのが彼れ等の交際の特徴である。併し野蠻人に禮式を省くときは元來彼れ等は他人の人格を尊敬するを知らぬから何等の制裁もなく凡有種類の無作法を敢てして憚らぬ。故に野蠻人間に於ては形式的であつても嚴重なる禮式の存在することが必要であるが、一般に文明が進來して人々が人格を重んずる道德的意識を生ずるに隨つて次第に自由の道德的感情の發表を尊重するに至るから、古代の傳統的禮式はそのまゝの形式で後世に傳はることなく、時代を経過する中に人類の社會的交際は次第に外形をすて、内的精神を尊重するやうになり、全く人格本位となる。かゝる點から見るときは、『中庸』に「君子之道簡而文」というて居ることは吾々の最も注意すべきところであつて、吾々はこの一語の中に文明的紳士の人格的生活及びその社會的交際を最もよく表明せるものあるを見る。彼れ等は虚禮を重んずるがために日常生活の大切な業務の進行を害するといふやうなことをせ

ぬ。着々としてその進行を圖るが、その社會的交際の態度に自由人格の直接的發表以外の不必要なる分子は少しもなく、凡てが必要なる道德的發表として言ふばかりなく莊重であり端麗である。

文明の自覺がこゝまで達せず、人々が道德的人格の自由よりも外的形式を重んずる時代に於ては、その社會生活に於て互に人格尊重の觀念をもたぬ、たゞ外形に捕へられるのであるから、人は自然虚禮に走るが、文明の自覺が進歩せる時代に於てはかゝることはなく、人々はその複雑なる社會生活の關係を微妙なる道德的感情によつて發表する。彼れ等は凡ての場合に利己心から起こるところの紛糾を避け、繊細なる社會的關係によつて人格的生活の積極的満足を求め、最も精密なる點に至るまで神聖な犯すべからざる規範を作つて狡猾や利己主義のために人間のなさねばならぬ義務を完成すべき場合を害されざるを保障するやうになる。人間の生活行動に對して得手勝手に選擇すべき範圍が次第に少くなり、人格の直接的命令が凡ての場合に於て吾々の社會生活を支配するやうになる。古代では單純素朴といふやうなことはあつたが、その裏面には何の遠慮もなき熱情の暴發、個人の慾望による社會秩序の破壊があつた。近代生活でも絶對的にこれがなくなつたのではないが古代に比較するときは人格の發達によつて社會に繊細なる道德的秩序

の抑制力が強くなつたから、かゝる熱情的非道德的なる暴發や破壊が非常に少くなつて居ることは疑ひなき事實である。

社會の文明は青年の血氣盛んなる自然力によつて増進せられることが甚だ多い。現に吾々の審美的判断では結果の如何に拘らず無限の熱情の英雄的に暴發せるものを欣ぶこと多く、超自然的魔力の破天荒の活動を欣ぶことが多い。吾々は未知の新事物、性格の顯然として發動せる行動、又は獨創的事業を見ればその受けるところの感化は非常に大であつて、そのために現に自己の有せるところの文明生活の整合的秩序を破壊したり、社會のそれを蹂躪したりすることすら珍しくない。熱情的に社會秩序を破壊する行動はかくて文明人に於てさへも見られるところである。併し大體から觀察するときは人類社會に於ける文明生活の眞價は斯くの如き熱情的狂亂にあるのではなく、健全なる社會秩序の整合的發達にある。従つて人類は昔から社會秩序の眞面目なる建設ならびに個人の忠實なる服従を尊重し、社會生活に於ては道德的義務の遂行を以て最も重要なものとして、その遵奉者に最も大なる尊敬を捧けて居る。人類の社會生活に於ける一切の關係及びその幸福なる發達は一にかゝつて人々の道德的人格の自覺にあるといつてよい。

社會に道德的法則を立てることも人格の力であるが、この社會によつて立てられたる法則を認

識して人々が自己の生活を規正し、凡ての場合に於て具體的にこれを實現することも亦人格の力である。人格があるために人々は社會的に堅く內的に結合して共同生活の道德的生活をなすと共に、又その主張を特殊の生活に於て具體的に實現する。社會の凡ての問題は結局自ら法則を立てて自らこれを守る道德的人格の信用にまつものといつてよい。孔子は論語の中に大車軌なく小車軌なく人信なくんば立たずといつてあるが、吾々文明人では人々が互にその社會生活に於て人格を重んじ、或る利益のために人格の道德的命令を破つてその價値を没却するといふことをせぬ人格の信用に待つところが最も多い。吾々はその社會生活に於て如何なるものを失ふも人格の名譽にかへられぬとするが、野蠻人に於てはかゝることは見られぬ。彼れ等は生活の便利のために虚偽をなすといふことは常であつて、道德に信用がないから自然人質を取るといふやうなことをなさねばならぬ。文明人では一言の意志發表を以て足れりとする。文明人では或る目的のために一時的に虚偽を犯すといふことも好むところではないのであつて、彼れ等は常に個人として自己の道德的體系の整合を破ることを欲せず、社會生活に於て道德の實在を信じその永久繁榮のために努力する。道德が永久に實在して人類の生活幸福を保障することは彼れ等の信仰である。彼れ等は設令社會的見解に於て反對の意見をもち世界に對して戰爭を布告することがあつても、社會秩序

の道徳的關係を破り虚偽を犯すを敢てすること能はぬ。意識的に或る大なる虚偽をなさんとする場合に於ては、人類はこれと聯絡して無數の小なる虚偽を犯すのが常である。この虚偽は文明社會に於ても一切階級を通じて凡有形式を以て遍在して居るが、實は虚偽といふよりも内的生活が訓練せられて居らぬために道徳的生活に整合統一を缺く結果、自然社會生活に於て發生するところの缺點である。随つてこの小虚偽も文明の程度の低い社會に至るに随つて益々多く見るところの缺點である。彼れ等は他人の隙をねらつて利益を奪掠せんとして居る。随つて虚偽は避くべからざるところである。

野蠻人は何事をも不確定不決定の動搖状態に放棄せんとする傾向を有して居る。彼れ等はその一度發表したるところの言行に對して社會的責任を負ふべきことを解すること能はず、常に事變の變化中に於て利益を窃取せんとするの奪掠的精神を抱き、所謂人を見れば盜賊と思へといふ如き態度を以て、社會の道徳的秩序の混亂中に於て狡猾なる態度を以て利益を狙うて居る。彼れ等の態度は一般に不信用であるが、實は彼れ等は獨りその生活態度のみでなく自然の過程その物をすら不信用、不確定であると思惟して居る。氣分が全く説明すべからざる理由によつて突然變化するのは、これ野蠻人をして友愛の虚偽なるを疑はしめ警戒の念を緩むこと能はざらしむる重要

なる原因である。その時その時の瞬間的熱情によつて行動するのが動物であつて、この瞬間的熱情を調節するに叡智的反省を以てするのが人間である。随つて吾々人間では本來理性的動機を以て行動すべきものであるが、野蠻人はまだかゝる發達せる理性的動機をもたぬから、彼れ等は凡ての行動をその時の熱情によつて遂行する。随つて恰も天候の變化する如くに彼れ等の生活行動には信するべからざるものがある。彼れ等は設令一時或る思想や行動に對して熱狂的に奔走することがあつても、その熱狂の後には纏て神經の疲勞を來たすから、間もなくその熱狂的態度は何處へか消え失せて怠惰を生じ、幾日でも仕事をせずに暮らして終ふ。彼れ等は或る遊戯には一時熱狂的に興奮するが、あとは全く怠惰の弛緩に流れ随つて遊ぶ外には仕事といふことを知らぬ。働くことをせずして食つて往かうとするから、自然その社會生活に於て虚偽といふことが免れがたきこととなり、所謂怠け者の嘘つきといふことがその社會生活の一般の特徴となる。彼れ等の意識は一般に不健全なる想像に支配せられ觀念聯想は不確實であるから、社會に一定の秩序なく個人の交際に於て何の信用もない、これでは社會に共同的事業及び進歩のないのは當然である。尤も彼れ等野蠻人と雖も一切の意味に於て信用を解せぬではない。現に今日吾々文明社會の間に於て見るところの博徒の如きものも彼れ等は社會一般に對しては凡有虚偽を以て怠惰と利益と

を奪掠せんとして居るに拘らず、彼れ等自身の間に於ては一種の道德を守り信用ある交際をして居る。「スリ」の仲間にも仍且同様であつて、彼れ等は世人に對しては何等の信用もないに拘らず同類仲間にも於ては一種の信用を以て交際して居ることは世人の知るところである。彼れ等に於てもその社會生活に於ては一種の道德的秩序を有し、これに背くといふことは人間の體面を傷ける人道的反逆であるものと感じて居る。人類がかゝる矛盾に富める道德から一般にその社會生活の凡ての場合を包括するに足るべき道德を發見し、これを以て社會生活の大綱とするに至るまでには永き進化の年月を要した。人類はその社會生活に於て怠惰者の虚偽を排斥して互に道德的信用によつて行動し、動搖定まることなき虚偽の生活中に於て道德的義務を貫徹するの有益なるを發見したのは、幾多の虚偽の生活から起こる社會的不幸に遭遇した結果結局人類生活の幸福は互にその社會的交際に於て信用を重んじつゝ、その道德的秩序及び一般的業務の統一的發達を圖る外なきことを適切に體驗した後のことである。随つて人類は進歩するに随つて社會に種々の法律的及び道德的秩序を作り、その力によつて個人の怠惰から起こるところの社會的不幸を防止するやうになる。社會に或る法律や制度の缺乏せるために個人に利己的我が儘の振舞を許し、怠惰者の虚偽によつて一般の平和及び幸福を攪亂せしむるやうなことは、人類の堪へがたきところであ

る。随つて人類は進歩するに随つて次第にその共同的社會生活の反省に基く秩序を作り一般的制裁を作るやうになる。併しこの秩序といつてもその効果については結局社會に於ける人々の信用に待つ外なく、社會がこの秩序を作るに至つた目的を承認して個人がそれ／＼自己の立場で具體的にこれを實行する人格の信用にまつ外ない。

人は社會秩序は法律の力によつて守られて居ると考へるけれども、若しこの法律を以て假りにその條文の規定するところを所謂三文代言的に解するに止まるものとするならば、吾々の社會生活に於て起こるところの種々雑多の事件は如何に精密なる條文の法律を以てしても到底これを規正し得るものではなく、その中には必ず法律の力によつて指導すること能はざるところの幾多の事件を發見するから、結局社會に法律はあつてもその統一的政治に對して大した効果のないものとなつて終はねばならぬが、吾々は法律に對してかゝる消極的見解をとらず積極的同情的に法律の意味をとり、これによつて吾々自身の日常生活の間に於て起こるところの事件に臨み、具體的にこれを適用するからその法律なるものは吾々の社會生活に於て只一個の抽象的文章とならず社會の實際生活に於て意味ある秩序となるを得るのである。法律は全く吾々自身の徳義心、吾々自身が社會に法律なるもの、存在すべき精神を汲んで心からこれを日常生活の間に發見すべき凡

ての事件に適用するだけの道徳心の信用にその生命をもつて居る。今より十年許前ガリシアに於てローマの古法學者の墳墓を發掘した際に、その墓碑に法律は信義の範圍内に於てこれを解せよといふ碑銘のあつたのを發見したが、これは寔に古法學者としての碑銘にふさはしい名句であるといはねばならぬ。

法律の進歩は吾々の社會生活ではまつたくこの德義心の信用に待つ外ない。すでも述べたる如く法律を以て只三文代言的に解し、只消極的にその拘束力を破らぬを以て足れりとするならば、法律は吾々の日常生活に於て何等の具體的な生命をもたぬが、吾々はこれよりも進んでこれを日常生活の具體的事實の上に進歩的に適應するから、吾々の日常の生活は常に新らしき意味をもつた法律の新生活となることが出来る。徴兵及び納稅義務の法律は吾々の國民生活では最も重要な法律であるが、これ等の法律は只適齡になつたから検査を受けて入營するとか、納稅命令が來たからこれに服従するとかいふ點に生命があるのではなく、衛生を守つて身體の發育を期しつゝ徴兵を待つとか、勤勉によつて納稅の義務を完全に果たすべきを期すとかいふやうに自己の生活行動を律する中に眞の生命を有するのである。この道徳的自己立法の中に法律は各事件毎に新らしき進歩を生じ、吾々自身が自由立法者として社會の中心となり、吾々はこれによつて凡ての

社會の人々と現在堅く實際生活の上に於て具體的に結合することが出来るのは勿論、實は過去に溯つて凡ての先祖とも結合することが出来れば、又將來の歴史を作る點に於て未來の人々とも結合することが出来る。人は社會の結合とかその統一的政治について色々に考へるけれども、かゝる問題は人類自身の道徳的立場を除いて考へらるべきものではなく、自己の行爲の種類及び性質を自己の人格の中に發見し、自ら自己の法則を立て、自らこれを實行するといふ人格の自律、*die Freiheit der Selbstverwaltung* といふことを離れて考へられるものではない。法律は結局 *Quaeritur in Potentia moralis* である。凡ての社會秩序、凡ての生活問題は結局吾々自身の人格、實踐理性の自由とその生命と進歩とをもつて居るのであつて、吾々の社會生活に於ける愉快の最も大なるものは社會それ自身が道徳の自律によつて織細なる秩序を有せること、ならびに吾々自身が又その自律によつて、この道徳的秩序をそれごとくその個人的生活の各場合に活かして往くことである、君子は慎獨といふことがあるが、それごとく自己の個人的生活に於て具體的に活きた道徳的生活をもつといふことが吾々の社會生活の最も大なる愉快であり、又社會的交際の最も堅き結合の紐である。道徳の自律、自己立法の外に人間の社會はない。

先祖の事業が後世に生命をもつのもこの道徳的自由の自己立法によるものである。子孫から見

るときは先祖の家および故郷はその事業の積み重ねられたる記念であり、活きたる歴史である。しかし子孫の實際生活に於てその記念が最も大なる意味をもつには、只その歴史が立派であるとか記念が多いとかいふためではなく、現在子孫のこれに對する道徳的努力によつて先祖の記念が子孫の生活中に於て一層意味あるものとして具體的に活きた新らしき生命あるものとなるからである。謂はゞ後からの體驗で前の歴史を活かすからである。恐らく楠正行の生涯に於て最も幸福であつた點は、父正成の大忠節の記念ではなからう。現在正行自身の行動によつて、父正成の大忠節の歴史を自己の生活中に活きた記念となした點にあらうと思ふ。孤忠よく南朝の天子を助けて奮闘した忠節の中に父正成の大忠節が子としての正行の生活の中に活きて愈々大なる教訓となつたのである。かゝる點から見るときは、高等小學讀本卷一第四課に『故郷』と題して、『故郷の慕はしきは祖先墳墓の地にして我が幼時嬉戯せし處なればなり。祖先幾代此處に生活し永く此處に眠れると思へば、思無き山河も自ら情あり。我が嬉戯せし幼時の樂しき記憶をおもひ起せば、木石亦知友の感なくんばあらず。況んや父母妻子兄弟姉妹親族故舊の我を待つあるに於てをや。』とあるが、これは聊か物足らぬ説明である。墳墓のあるといふことは先祖の歴史の最後の記念があるといふことであり、幾多の記念がその中に秘められてあるといふことであるが、吾々は

たゞこれを先祖の遺した記念であると見るのみでは、大なる意味を發見すること能はぬ。これに對する吾々自身の道徳的努力によつて先祖の記念が現在吾々自身の生活中に活きて、先祖の發見することの出来なかつた意味をすら現在發見して來る。先祖の歴史が現在益々新らしき方法で活きて來るといふ點に於て、先祖の記念が吾々に最も大なる意味をもち、墳墓が心から慕はしくなるのである。先祖の記念がないならば吾々は生活幸福の大半を失はねばならぬが、吾々の實際生活からいふときは、この記念よりも、これに對する吾々自身の道徳的努力によつて、吾々自身がその記念を現在自己の生活中に具體的に活きた生命のあるものとする方が重要である。この努力のある場合にのみ吾々はその先祖と堅く内的に結合し先祖は吾々の生活中に新らしく具體的に働いて來る。吾々の幼少時代に於ける無邪氣なる遊戯が慕はしいのもこのためである。現に人生に對する努力によつてその意義を解し、只自己自身の生活のみでなく、社會の人々の生活に大なる幸福を與へて彼れ等からその祝福を受けつゝあるものから見るときは、少年時代の無邪氣なる遊戯も人生の貴重なる追憶であり記念である。新らしき意味を生ずる。如何に先祖の記念が立派であつても現在人生に對して道徳的努力をなさぬならば、その記念は大した意味をもてるものではない。歴史が何だ、先祖の記念が何だ、人生が何だといふやうな自暴自棄の生活をなすならば、先祖の

記念傳説などは何の價値あるものでもない。只吾々が現在その生活に對して高尚なる道德的見解を抱き、人生に對して努力する場合に於てのみ先祖の記念が新らしき生命を以て活き吾々に對して無限の教訓と刺戟とを與へる。吾々のこの態度の中に先祖は吾々と内的に結合すれば又現在社會の人々とも内的に堅く結合するを得る。故郷も慕はしければ、又故郷に於ける親族故舊も慕はしいのである。余はかゝる點から見てこの讀本の『故郷』に關する説明には人生としての態度の甚だ不徹底なるものあるを思ひ、遺憾に堪へぬ。勿論錦を衣て故郷に歸るは人情であるが、この錦衣故郷に歸るまでの男子の奮戦努力及びこれによる人生の新らしき見解が故郷に歸つたとき、凡ての記念を以前に勝る意味あるものとなし、舊山河がその面目を一新して我を迎ふべきを述べる必要があるでないか。余は之を述べて人々の故郷に對する態度、先祖の記念に對する子孫の態度を明らかにすべきでないかと思ふ。歴史哲學に於ける記念とか故郷とかの意味は少年には説明し難いが、この意味を背景にもつ故郷の説明によつて少年のこれに對すべき態度を十分明瞭にして置くべきでないかと思ふ。只この讀本にあるやうに故郷の慕はしきは人情であるが、これは女々しき感情であるから、これに愛着することなく、勇奮一番他郷に出でて奮闘せよといふのは、折角題に掲げた故郷の意味はなくなり、國家といふやうなことも自然棄たれて終はねばならぬでないか。

儲、議論はやゝ岐路に走つたかも知らぬが、要之、吾々は現在生活に於ける道德的努力に於てのみ先祖と堅く結合してこれと一體となるを得れば、又現在凡ての同胞國民と結合して一體の社會を作り、それ／＼歴史の本源を特殊の形式に於て實現せる人格として互に他人の人格を無限に尊重すると共に、又これと聯帶的社會的關係に立ち互に共同的社會生活に於て缺ぐべからざる要素をなすものとして本來的意味で堅く結合する。社會の結合及び發達は全く道德的個性によるのである。血族的關係によるのではない。

血族的關係とか經濟的事情が同じであるといふことは、只この本來的意味に於ける道德的個性の社會的結合を強める外的原因にしか過ぎぬ。いな、なほ一步進んでいふならばこの道德的個性が社會を作るために血族的關係を結んだのである。吾々は結婚して男女が一體の家族となるから社會が來出、歴史が見られるのではなく、元來社會を作り歴史を發展するために結婚するのである。社會があるから道德的個性が見られるのではなく、道德的個性があるから社會が見られるのである。これ等の議論は後に歴史の本質について考察する際になほ改めて詳細に論ずる。

六、歴史と教育

備、余は以上初めから述べたところによつて歴史の發達について極くその大様を述べたから、こゝに以上述べたるところを一と纏めにして歴史と教育の關係について考へ、以て序論を終へようと思ふ。

「大體から見るときは人類の歴史は先祖の跡を踏むために發展して居る。人類は發生の初めにあつて既に述べたる如く動物と同じく最も野蠻なる生活をなして居つたものであるが、只その中でも動物と異つて先祖の跡を踏んで行くために、動物の自然的本能生活以上に次第に文化的歴史を發展するに至つたのである。随つて人類の歴史は先祖の事業を繼承する形式を以て發展して居る。吾々は初めて人類が農業の定住生活をなすに至つた時代を見るときは、如何にこの歴史の繼承といふことが社會の重要な問題となつて居るが、これを推察するに難くない。

支那の尙書を見ても判るやうに、政治に於ても教育に於ても凡て先祖の事業を承継いでこれを發展することが最も重要な方針となつて居る。社會生活の道德もこの繼承の形式で發展して居る。所謂アダプテーションといふことに社會生活の大體の標準を求めたのはこのためである。

一體吾々は現在の生活に於て先祖の歴史的發展の文化を得て居る點に於て非常に幸福を受けて居る。若しこの文化が傳つて居らぬならば、人類は世代ごとに自然的本能を出發點として新らしき生活をなさねばならぬ。動物と同じやうに永久に自然的本能的生活の反復をなさねばならぬが、事實かゝる不幸を見ずして、吾々人類では先祖の歴史的的努力の結果が現在に傳はつて居るから、吾々は現在生活の大なる幸福を受けるを得る。動物の世界から遠ざかつて新らしき世代のものが人間らしき人間の生活をなし得るのは全くこの歴史的文化的賜である。吾々の現在の生活は全く過去の賜である。

曾て印度駐屯の英國憲兵がガンヂス河畔に於て三匹の狼の兒が水を飲み山から降りて來たのに出遭つたことがあつた。彼れ等は試みにこの狼の兒を捕へたるに驚くべし、その中二匹は狼の兒であつたが、他の一匹は疑ふところもなく人間の兒であつたといふ話である。併しこの兒は他の狼の兒と同様に匍匐するのみであつて、歩行することも言語を使用することも出來ぬ。理解力は犬と大差なかつた。彼れ等がこれら捕へんとしたときは搔きみしつたり噛みついたりするのみであつて、凡ての行動は動物に異ならなかつたといふことである。この兒は恐らく人間の兒が産まれると間もなくその親の手を離れて狼に捕へられたが、幸にその所謂育兒衝動によつて助け

られ、飼育するところとなつたものであらうと思ふ。命だけは助かつたが人類の社會に生活せなかつたからその文化の影響を受けること能はず、その結果何等の生活發展をもなすこと能はず、全く動物生活に等しき自然的本能の簡單なる満足を得るに過ぎなかつたものと思はれる。

吾々は自然的に道徳的生活をなすべき萌芽を有して居るけれども、これを發達せしむべき社會的機會なく、その活動の客觀的標準がないならば、實際吾々がその社會生活に於て期待するが如き發達をなし、吾々の共同的社會生活に於て人々の期待するが如き重要な働きを示すものではない。吾々は凡て原始的生活の單純なる第一階段からその生活を初めるの外ない。吾々がその生活に於て有する所の精神的殊に道徳的發達の大部分は全く社會生活に於ける繼次的發達によつて得たるところの文化に適應するから得られるのである。この適應的生活の中に於てのみ吾々の道徳的生活の自然的萌芽は發達せる形式の特殊的熟練を發見し實際生活に於て大なる働きを表はして來る。吾々は自然的に道徳的生活の萌芽を有つて居るといふけれども、これを社會生活によつて得るところの道徳的訓練に比較するときは、只斷片的の不完全なる道徳的要素たるに過ぎぬ。

この事實は今日國家又は文明社會の進歩せる生活形式の諸制度習慣を見れば明瞭である。人は或は國家又は文明社會の生活といふときは、色々の規約があつて個人の自然的自由の生活を拘束

することが多いから嫌ふものがある。しかしこれは誤れるも亦甚だしきものであつて、吾々は進んでその文明的形式の社會生活に入り、その規範によればこそ自然的衝動が道徳的に發達すべき唯一の途を得られるのである。勿論今日の社會は道徳的理想を得たるものでないから、冷靜に觀察するときは幾多の缺點を發見せぬではない。個人の純粹なる良心の要求からいふときは必らずその間に不満足なる點があるに違ひない。併し如何に不満足があつても、個人がその社會を離れるときは決して道徳的良心の満足を得られるものではなく、社會中に生活すればこそ不満足であつても兎も角もその自然的道徳的衝動に發達の唯一の機會を發見するを得られ、不満足といふことが却つてその奮勵努力をなすべき道徳的刺戟となることすらあるのである。未だ文明生活の理想的境域に達せざる野蠻民族の單純なる生活も、これを文明生活の不具的發達に比較するときは勝るところが全くないとはいへぬ。文明生活の複雑にしてその社會生活に於て幾多の詐欺あり、道徳的良心の満足を得がたきものあるに比較するときは、野蠻民族の單純なる中にも何處かに慕ふべきところがないではない。

文明生活の弊害に懲りつゝあるものから見るときは、野蠻民族の自然的生活の單純なるを愛するものゝあるといふことは無理ならぬことである。併し文明生活の公平なる觀察によるときは、

野蠻民族の自然的生活の無邪氣の周圍には幾多の罪惡の潜伏して居るのを發見するに困難せぬ。彼れ等の生活は一般に不安定、不健全であつて、名狀すべからざるほど亂雜である。その中には何等の統一もなく整合もない。彼れ等は熱情的にその時その時に於て自然的生活の満足を求め、その生活の中には特殊の道德的感情と非人道的罪惡及び驚くべき悖徳が雜然として相並んで存在して居ること、到底吾々の文明生活に於て見るところの虚偽の比ではない。勿論今日の文明生活も理想を得たものではないから、その中には數多の缺點がある、自然の美が多く文明生活の缺點の犠牲とせられて居る。随つて吾々は今日の文明生活に對して人道上悲慘なる出來ごとを見ぬではないから、學者中に於てすら時に自然的生活の單純なるを追慕するものがないではない。併しこれは全く文明生活の恩恵中に生活しながら、これに伴ふ弊害のみに着眼して、少しもその恩恵愉快を理解すること能はざるものゝなすところの議論に過ぎぬのであつて、公平なる觀察を尊ぶべき學者のなすところの議論ではない。

一體人間は大なる矛盾であるけれども、文明生活の大利益を忘却して自然生活の小利益に戀々たる態度をもつて居る。その結果自然文明生活によらねば得られざるところの大なる幸福を忘れてこの生活に對する貢獻的精神を失ひ、大企業であつても明らかに成功を保障し難き場合に於て

は、その複雑煩鎖なるを厭うてこれを逃れ、意氣地なくも無意義の小企業を歡んでこれに趨るとき輕薄なる態度をとるやうなことをする。多くの人類は自ら選んで小成功を求めてこれに安んじて居る有様であつて自ら進んで今日の文明生活の無數の衝突矛盾中に於て公平なる道德的信仰努力を以て文明生活の眞價を發揮するところの敢然たる勇氣を示さぬ。輕薄なる態度を以て一時的満足を求め、目前の理想を追ふに急であるが、纏て又これに飽きて他に移る有様である。

氣候の變化を調節し、困難なる勞働を生活の範圍中より退治する位の企業は初歩の人類生活に於ても見るところであつて、如何に小成功に甘んずるところの人類と雖も、この種類の勞働をなさぬものはない。併し彼れ等は進んで大艱難を排除して眞の人類生活の文明的幸福のために獻身努力する底の勇ましき覺悟を示さねば、又困難なる道德問題の文明的解決をなして居らぬ。只氣質や外界自然の偶然的事情によつて簡單平易なる道德問題を解決して居るのみであつて、時としては極端なる非人道的野蠻的行爲を敢てして憚るところなく、全く溫順親切なる人道の本來に反對せる行動をなして快哉を叫ぶことすら珍しくない。野蠻は單に原始人のみではなく、今日の文明人と雖もその生活の裏面を見るときは、或る種の野蠻はなほ甚だ多いのである。文明の組織的社會生活の勢力の下に於てすら、なほ非道德的氣質衝動によつて得手勝手の行動をなすものが相

次いで現はれて来る。我が國などに於ても詐欺に關する犯罪が最近増加して居る事實があるが、一般に人類は道德的見識がいまだ確定したとはいへぬ、案外に淺薄であつて、理想を實現すべき精確なる見識を有たぬために極端なる利己主義の野蠻的生活態度を發揮して憚らぬものが各瞬間に現はれて来る。随つて彼れ等の社會生活に於ては嚴格なる道德的規範のあることが必要である。吾々の先祖が永き間の文化的努力によつて吾々に遺して往つた科學や哲學、道德や宗教藝術のあることが必要である。

吾々はかゝる文化價值、就中道德價值に適應してその影響を受けるから原始的野蠻人たるを免れ、先祖から歴史的に發展して來た文化の階段に於て幸福なる生活を營むを得るのである。自然的衝動が價值ある生活をなすべき規準を發見し、自然のまゝでは得ること能はざるところの生活をなすを得られる。人は反省せぬときは歴史の大なる恩恵を知らぬで居ることはあるが、事實に於て吾々の社會生活上に有する所のものは凡て歴史の與へるところである。吾々は全く歴史の作るところであるといつてよい。吾々の思想感情及び意志であつて一も歴史から與へられざるものはない。吾々の呼んで社會となすもの及びその中に有するところの凡てのものはみな歴史の與へるところである。吾々は科學的に社會生活事實を研究するときはこの事實を承認するに餘りに多

數の事實を發見する。社會は全く歴史によつて作られたるものであつて、吾々は社會生活をする故に凡て先祖の歴史的に發展した文化的生活の幸福を得られる。吾々の生活幸福は全くその社會の歴史によつて與へられるものである。かゝる點から見るときはベツツもいつて居るやうに吾々が進歩せる社會に生まれて來たといふことは非常の幸福であつて、吾々はその社會生活に於て進歩せる文化の刺戟及び保護を受けるから、自然原始的野蠻生活の侵入を受けざるだけの生活をなすを得る。かゝる事情から個人の文明生活に於ける社會の共同的道德の標準に對する尊敬は文明社會に於ては非常に強きものとなり、その内容に對する尊敬は自明の眞理として社會一般の精神を支配するに足るものとなつて居る、個人がこの社會的規範に背くといふことは道德的叛逆であり神に對する悖戾であるとする感ぜられる。社會の教育的影響は非常に強い。

併しまた一步轉じて考へるときは、それだけ社會の歴史的影響が個人の指導を誤り易い點もこの中に潜んで居る。個人の求むるところのものは既に他人の採用せるところのものである、適應するところのものは既に他人の服従し來れるところのものである。個人は或は有言の警告により又は無言の警告によつてその社會の道德法に服従すべきものたるを要求せられるが、凡てその要求は自明の要求であつて、これが違反は如何なる形式でなされても精神の不安のために罰せら

れ、個人として悔恨に堪へざるところである。随つてそれだけ個人は社會のために誤られ、その偏見のために失敗することが多い。一體社會の道德的習俗はその中に生活せる人々の生活利益と深き關係をもつて居るから、その社會内に於ては他の道德的真理が最も明瞭なる形式で提供せられるに拘らず、殆ど不可解ともいふべき方法で猛烈にこれに反對する。こゝに社會の教育が吾々の正當なる進歩を害する原因がある。傳統的教育、國民性、習慣及び職業並びに時代精神によつて感受するところの道德的偏見は頑固であるから、その影響の下に於て人類は多數の不必要なる活動及び最も價值なき儀式を以て反對に最も神聖なる儀式であり。人間の義務であるかの如くに思惟し、他の時代または國民の文化を以て非人道的野蠻主義であるかの如くに非難し、自己の義務であると想像するところの行爲に反對するものを以て全く道德に對する冒瀆であるかの如くに考へる。この點は吾々の最も注意せねばならぬところであつて、吾々は常に公平なる觀察を以てかゝる暴虐なる歴史の影響から自己を救はねばならぬ。社會生活に於ては吾々にその教育を成立せしむる道德的義務及び本務の念が最も強いと共に、又偏見に陥り易いから、吾々の教育が本來人間の教育として完全なるものであるや否やといふことを考へるときは、當然歴史的發展の文明が完全なるものであるか、社會の習俗がそれ自身で完全なるものであるか否かといふことを考へ

ねばならぬ。これが吾々の社會教育には何時でも叡智的啓蒙の態度を伴はねばならぬ所以である。この啓蒙教育があつて初めて吾々は歴史の影響を受けながらその歴史の缺點から逃れて一層價值ある生活に發達することが出来る。かゝる點から見るときはカントが道德教育を以て何時でも習俗の叡智的啓蒙から初めねばならぬといふ意見を有つて居つたといふことは、吾々の最も注意すべきところである。吾々は叡智的に啓蒙するから歴史的生活の道德的満足が只過去の歴史事實に適應する生活によりて得られるところの満足よりも價值あるものとなることが出来る。吾々は道德の認識に於て次第に價值ある生活を發見し、凡ての場合に於て凡ての人々の承認すべき道德的生活に近づき得る。

所謂道德的價值一般といふものに接近し得られるが、恐らくこの一般的啓蒙運動に於て極端にまで理想を唱道したのは、近世に於ける佛蘭西のルーソーであらう。氏はこの啓蒙運動に於てあまり極端に走り叡智の承認し得べき理想的文化のみ認めて一切の過去の歴史的文化を排斥して終つた。恐らく氏の出でたる時代の如く啓蒙的思想が盛んであつて社會改造の必要を感ずること切なる時代に於ては、歴史的文明生活の弊害は特に著しく眼につくところとなるから、その文明から解放して人爲的細工のない大自然に歸るといふことは人々の最も希望するところであり、

これを以て生活の本來的意味を發見し得る唯一の途であると想像せられたかも知れぬ。中世紀を通じて人類は永き世紀の間人爲的文明と教育とに苛められ、而も何等の得るところもなかつた過去を省みるときは、先づ個人を過去の文明の歴史から解放する必要を感ずると共に、歴史に對する嫌惡の情は一切を驅つて熱情的に發言せしめ、遂に凡ての歴史を去れよ、文明を棄てよといはしめた。併しこれは所詮所謂舊來の陋習を去れといふ啓蒙時代の警句に外ならぬ。それ以上の意味はない。吾々は文字通りに凡ての文明を去り歴史を棄てるときは結局何等の教育も見られぬことになり、ルソーの所謂眞の社會、眞の文明なるものも遠くの未來問題となつて終つて、現在は全く原始的野蠻に終る外ないものとなる。ルソーがエミールの手にした唯一の本は人も知る如くロビンソン・クルソーであるが、氏がこれを持たせた理由はこれ彼れがこれによつて野蠻人と文明人との調和を得、野蠻を最もよく理想的文明に導き得る純眞なる方法であると想像したからである。

吾々が過去の歴史を省みるときは既に述べたる如き缺點がある。過去の歴史は人類として有すべき完全なる歴史ではない。幾多の缺點をもつて居る上に、一體この不完全なる歴史が兒童の教育となるには更らにその間に教育者の解釋を経ねばならぬ。かくて達眼を以て歴史の教育を見る

ときは、その間に名狀すべからざる誤謬と危険とが加はり、人をして正視するに忍びざらしむるものすらある、かゝる點から殊に啓蒙思想の強き時代に産まれて自ら一世の啓蒙的教育家を以て任じたルソーが過去の歴史を誹り、その教育上に於ける危険を極言して、人類が一切これを棄てたるときに初めて眞の教育を見らるべき可能が発見せられると公言したといふことは敢て怪しむに足らぬところである。この精神があつて初めて教育が可能なのであつて、理に今日吾々が教案によつて兒童や生徒を教育するが、この教案中には吾々自身の歴史に對する理想がは入つて居らねばならぬ等である。一體吾々は只簡單に歴史の流れの中に入り、その影響を受けて一人前の人間となるといふけれども、只單純にその流れの中に入るのではなく、兩親や教育者の精神的労働の結果を通じて入るのである。随つて歴史の教育的影響といふものはこの教育者の努力に待つところが甚だ多いのであつて、教育者の修養如何といふことが歴史の教育的影響に最も大なる變化を與へ、來るべき新時代を意外のものにして終ふことがある。かゝる點から見るときは歴史の教育的影響については教育者の歴史に對する理解及び努力が最も大なる關係を有するものと見ねばならぬのであつて、只この努力及び理解のある場合の教育によつてのみ吾々は社會に罪なき白き百合の花の人間を作ること、又現代を以て國民の歴史的發展上最も意味ある時代となし文化

の發達に大なる貢獻をなすことも出来るのである。過去の事實をそのままに傳へるのが教育ではなく、この事實の中にある理想を傳へ、理想によりて事實を新らしく活かして新規の歴史となすのが教育である。」

「併しその歴史の理想は商店の看板の如く何人も走り讀みの出来るやうに店頭に掲げられて居るものではなく、複雑なる生活事實の中にこれを読み出して往かねばならぬから、自然人々によつてその見解を異にし易いが、吾々は人類や國民の教育にあつては是非共明晰なる認識によつて得たるところの歴史の理想をもち、これによつて既成文化を只過去の事實として傳へるのみでなく、傳へられたる生徒の生活の中に新規の歴史とならねばならぬ。したがつて教育の成案中には何時でもこの理想がその指導原理となつて働き、言はず語らず全體の教授材料の排列の骨子を作つて居らねばならぬ。」この點に於て啓蒙的想像に天才の妙を得て居つたルーソーが凡ての過去の既成文化を排して理想的な新文化を考へ、暗にロビンソンを以てこれに擬したといふことは、こと柄その物としては別に怪しむべきことではなく、吾々の双手をあけてこれに賛成せねばならぬことである。只今日吾々から見て歴史の公平なる批判による時ルーソーの採用したロビンソンが果して理想的な文化發展の歴史となつて居るか否か、随つて又これを唯一の友として手にもたせら

れたエミールが果して人類の教育的發展の過程から見て正當なる理想的發展の歴史を作つて居るか否かといふことが問題となるのみである。恐らくこの點についてはロビンソンにはなほ多く作者デフォアのユートピアとして改正を要すべきものがあるであらうと思ふが、それは暫らく別としてルーソーがエミールにこのロビンソンをもたせたといふ教育上の計畫その物については吾々の少しも疑ふべきものではなく、全然これを承認せねばならぬところである。ルーソーは過激なる啓蒙家であつて多くの筆禍を買つて居る。過去の既成文化を誹るときなどに於ては、凡て人類の教育から歴史を一掃せよといふやうなことを強く論じ、随つて氏は世間からは人類の教育に歴史の影響を認めざる極端な個人主義のもの、如くに解せられて居る現にアダムスなどもその著『教育説の進化』中に於てかく論駁して居るが、これはルーソーの眞意を知るものではない。ルーソーは眞の歴史の影響を認めたから既成文化の影響をとらなかつたのである。吾々はこの點に於ては十分氏の思想に對してその眞意を謬らざるだけの注意を拂ひ、氏が歴史の教育にあつて何處までもその理想を高調した精神を汲まねばならぬ。

只吾々の氏と意見を異にする點は即ちかくして認めた歴史の理想が如何に實際教育上に働くべきかといふところにある。氏は歴史の理想を認めてこれに向つて走るために現實の社會をすてた

けれども、實際歴史の理想はかく一般的抽象的なものではない。歴史は既に述べた簡單なる序論でも判つて居るやうに道德的個性の創造にその生命を有するものであるから、本來かく啓蒙的破壊的態度に出るべきものでない。成るほど歴史の認識によるときは一般的妥當的價值を肯定せざるを得ず。所謂價值の普遍的體系を肯定せざるを得ぬから、自然理想と現實とはかけ離れて全くの二元論とならざるを得ぬ。随つてこの點から見るときは獨りルソーのみでなく、一般に近世紀の初めに出でた啓蒙學者が現實的社會を罵つてこれを超越して一般的價值の理想的新社會に歸着することを目的としたといふことは無理ないところであつて、このために近代が個人の價值を知るに至つたことは吾々の最も幸福とするところである。併しこの個人の啓蒙的價值、歴史の一般的理想が只一般的抽象的價值として終るべきものではなく、本來人間は歴史のこの一般的理想によつて現在の生活を改造すべきものである。過去の歴史によつて與へられた特殊の文化事情、各個人がそれ／＼その立場に於て有するところの特殊の生活事情の中にこれを實現すべきであるといふ道德的命令を有すべき筈である。歴史哲學上の理想は純粹なるものであればあるほど、現在の生活を如何にして價值あるものたらしむべきかといふことにその注意が向つて來ねばならぬ筈であり、現實生活の事實中に於て具體的にこれを實現すべき努力となつて來ねばならぬ筈であ

る。前に述べた過去の歴史が現在に生き、現在吾々自身の努力によつて過去の歴史が如何様にもその意味を高尚にするといふことはこゝで承認せられる事實である。「現在吾々はその生活の具體的事實の中に歴史の理想一般を實現すべきであるといふ努力の中に過去の歴史は生きて來る。随つて歴史及び文化の教育は、その理想を認識したとき現在とあまりに驅け離れて居るからといつて現在をすて、理想に走つて終ふ態度をとるべきではなく、純粹なる理想を得れば得るほど益々熱心なる態度を以て現實的生活事實を價值あるものとなすべき具體的力を得ねばならぬ筈である。歴史の理想は吾々に一般的啓蒙的態度を與へるといふよりも、現實的に具體的當爲の態度を與へるべき筈である。この點に於て吾々の歴史及びその教育に對する意見はルソーの一般的啓蒙的態度と大なる差異を有し、吾々は歴史の理想を以てその一般なる點に於て同時に現在の特殊事實の生活を以て歴史的價值のあるものとなすべきことを命ずるものであるとする。否、なほ一歩進んでいふならば、この理想が自己を實現するために吾々に自然生活の中に於て特殊の家を建て衣服を作り、個性の生活過程を作らしめるのであるとする。この事實は後に第四章に至つて歴史の本質について述べる際に十分説明するが、實は吾々が道德的個性をもつ點に於て、その社會的價值からいふときは吾々の意慾及び行動は凡て共同的社會生活の缺くべからざる中心的要素と

なり、吾々は社會聯帶中に於て唯一無二の地位を有することが出来る。こゝに氏の考への根本的誤謬がある。随つて吾々の教育意見の相違もこゝから生ずる。社會は氏の想像したと反對に全くこの歴史的個性によつて作られるところである。ルーソーは思ふやうにエミールを教育してこれを結婚させたとき社會に送り出したが、氏がロビンソンをすら文化の一例であるとして只管理想的文化の一般に憧れて啓蒙的に教育したエミールは、實は一般的抽象的人間價値であつたかも知らぬが、實際生きた生活をもつ具體的人間ではなかつた。實は單純なる概念であつて、社會中に生活せる人間ではなかつたのである。この點に於ける意見の相違は本書に於ける歴史と教育との關係の考察に於て吾々の意見と一般に啓蒙學者の意見とを著しく相隔れるものたらしめる分岐點となるが、國家問題に關して余は更らに又現代に於ける重なる歴史哲學者の意見と余の卑見との異なるものあるを覺える。これ等の問題は本論に入つて順次説明する。

本論

第一章 經濟と歴史

一 自然と經濟價値

諸、余は以上人類の歴史的發展の過程について極くその大様を述べ、ならびにこの歴史に對する吾々の教育的態度は如何なるものであるべきかその大體を示した。以上述べたところで本文の極く大様の輪廓を示したから、余は是れから進んで順次具體的に歴史について論ずると共にその教育との關係を述べようと思ふ。

諸、人類の歴史的發展の過程について見るときは、既に述べたる如く人類はこの地球上に發生してから後なほ永い間動物と同じやうに野蠻生活を營んで居つたが、その後漸く農業のことを覺えるに至つて初めて動物以上に適者生存の價値を得て地方的に歴史を作るに至つた。併しこの時代はまだ土地の自然に支配せられること多く、進んでこれを支配するといふやうなことは殆どな

かつた。一體人類は原始時代になるほど自然に支配せられ易き傾向を以て居る。自然の經濟が餘りに過酷であつて、如何に勞働するも僅少なる生活手段をすら得るに困難なる土地に於ては、住民の生活興味の中心が社會に向ふことが困難であるから歴史は大なる發展をせぬ。年中殆ど太陽を見ぬところの寒冷なる北極地方の結氷地帯に於ては、その住民は家屋を作る便利をすらもたぬ。彼れ等は只その生活維持に缺くべからざる需要を満足するには是れ日も足らざる有様であつて、生活の美や充實を求めるなどは想像もつかざるところである。

意地悪き自然の僅少なる生産にしか接すること能はざる彼れ等に於ては、生活保存のための勞働が非常に困難であり、且つその分量に於て過大である。グリーンランドの住民の生活は海豹なくんば如何に慘憺たるものであらうか、想像するさへ恐ろしきほどである。姿も變はるばかりに海豹と馴鹿との毛皮につままれて彼れ等は漸くその生活を維持して居る。自然の必要のために他のもの、模倣すること能はざるところの巧妙なる熟練を以て彼れ等は海豹を追うて北極洋を航行するが、晝夜太陽を見ぬところの北極の永き冬中、常に獸油を點じて生活して居る慘めさといふものは到底温帯地方に生活するもの、想像すること能はざるところである。彼れ等がその生活の困苦の中に於て想像せるところの幸福なる將來の生活は、寒き海中に多數の鳥や魚や海豹などが

群をなして遊泳して居るのを眺めることであるが、彼れ等は只短き夏の間にて僅かにこの希望の一端が實現せられるのを見るのみである、かゝる慘めなる生活の恐ろしき光景といふものは世界の北極地方に於ては一般に見るところであるが、勿論かゝる荒涼たる土地に於ては生活の進歩に必要な條件を作るなどは到底想像されぬことであつて、只僅少の限られる經濟を以て生活を維持し得るのみである。生活とか教育とかの發達といふやうなことは全く考へられぬ。既に文明の發達せる國民であつても一度何かの機會に彼れ等の生活仲間に入るときは、只僅かにその既得の文明を維持し得るに過ぎざる有様となる。大なる面積の土地から得られるところの僅少の生活維持手段は、政治の組織的生活の初步に必要な社會を作ることすら許されぬ。凡ての住民が同一の職業につかねばならぬ上に、交通が困難であるから一切の外國文明に接すること能はぬ。曉天の星の如く寥々として此處彼處に散在せる僅少の家屋は到底勞働の分業を促す程度の文明に進歩すること能はぬ。又社會的形式の生活や正義の觀念の發達に必要なところの動機の發達を促すべき機會を作ることが出来ぬ。苛酷なる自然の下に於て身體生活が極端に困窮に逼られるから、住民はその人種的氣質の美點や諸種の精神的才能を伸暢せしむるに由もない。生活の唯一の享樂とするところの最も粗末なる感覺的享樂をすら彼れ等は得ること能はぬ状態である。これで

は歴史とか教育とかの發達なるものは全く考へられるに由もない。

人類の發達はその生活の環象たる自然に支配せられることが多いが、殊に原始的人類に於ては最も多くこれに支配せられるから、不幸にして人類がその原始的生活の初めに於て相當の自然的經濟の餘裕をもたぬならば、彼れ等は文明的生活の頭を擡ぐべき機會を發見すること能はぬ。何時までも原始的生活の野蠻に止まらざるを得ぬ。のみならず間斷なく困難なる自然的經濟と奮闘して僅かに生活の維持をのみしか得られぬ結果、彼れ等は文明的生活の衝動をば最も消極的方法で満足するのみである。彼れ等がその苛酷なる自然から壓迫せられるために苦しんで居る貧弱なる生活状態といふものは眞に同情の涙を催させるに足るものである。北極の土人に比較するとき、北米合衆國のロッキー山中に住まへる土人などは遙かに恵まれたる自然の中に生活して居るが、それでも廣大なる獵區に僅少の人々が生活して辛うじてその生命を維持し得るの不幸なる土地であるから到底文明の進歩を見ることが出来ぬ。

苛酷なる自然は彼れ等をしてその生活を維持するに困憊せしむるのみである。彼れ等は生活を維持するために困難なる狩獵をなす外には、勞働のなき安樂を以て生活の唯一の樂みとする。こゝでは生活興味の中心が歴史とか社會とかに向ふ筈がないから、凡ての方面に於て文明が進歩せ

ぬ。住民は哀むべきほど幼稚なる生活見解を抱くのみである、曾て彼れ等の或る酋長は白色人を見て次ぎのやうなことをいうたと云ふ話がある。「一體君等は何物をも考へずまた爲さぬところの幸福を知つて居るか。この幸福は睡眠に次いで一切の事物中で最も魔力あるものである。君等は何故に立派なる衣服を着けたり、うまき物を食べたり、また多くの財産を子孫に残したりすることを考へるのか。君等は自分の死んだ後には太陽も輝かず河水も流れず、天から露も落ちなくなると考へるのか。泉が岩間から断え間なく湧き出るが如く水や露も永久に涸れるものではない。吾々の命は安全である。君等は或る畑を耕すと直ぐ次ぎの畑に行つて又耕し、それでも猶ほ且つ日が足らぬ有様であるらしい。吾々は君等が月の光で耕して居るのを見たことが屢々ある。君等の生活を吾々の生活に較べたら何如であらう。君等は丸で盲目で全く生活の樂みを知らぬでないか。吾々は最も樂しく現在を暮らして居るよ。過去などは消え行く煙の如きものである。未來などは何處にあるか。如何にして現在を樂しく暮らすかといふのが上策でないか。明日までは違ひものである。」と、何といふ愚な話であらう。廣い區域に動物がすくなく、人々は只その生活の自然的維持のために全力を盡くして終日狩獵に奔走せねばならぬ土地では、餘りに奔命に疲れるから努力せずして生活することが唯一の慰安となり、自然かゝる愚な處世哲學の思想を生ずる。吾

々の如く文明的社會に住んで勞働を重んじ、これによつて生活條件を立派に作つて往くことを主眼とせるものから見るときは幼稚極まる人生觀であるけれども、自然の如何によつてはかゝる人生觀をも生ずることがある。人類は非常に永い間困苦勉勵しても思はしきほどの結果を得られぬときは、只勞働の奔命に疲れるのみであるから、終には凡ての勞働のない生活を以て最も愉快なる生活であるとするやうになる。印度に於て無慾の生活を奨勵したのも、人々が無闇に慾求の満足を求めて得られず、只奔命につかれたのに歸因することが多いのを省みるときは、思半に過ぎるものがあるであらう。

ロッキー山中の如き鬱蒼たる森林の晝なほ暗き土地で、水も十分になく寒冷が酷く襲つて來る處では、歴史の文明的進歩は非常に困難である。穀物が生ぜず只僅かに玉蜀黍が生ずるのみでは、土地が永久的に文明を産む力がない。文明世界の二度芋や家畜が輸入せられて居らぬ上に、土産の野生動物は容易に馴養せられぬ。農業の收穫が殆どなく、狩獵が重なる生業となつて居る土地では、只文明の原始状態が保存せられるのみである。彼れ等の自然は凡ての方面に於て文明に不適當である。只狩獵のみでその他には殆ど生活維持の手段がないから、最も狩獵の收穫の多い場處でさへも、一平方哩に僅々數人の住民があるばかりであつて、それすら生活の維持手段を發見

するに困難する有様である。これでは人口は勿論社會の文明發達に必要な密度に達せぬ。彼れ等の口碑には驚くべき飢饉の恐るべき苦痛を描いたものがあるが、實際彼れ等の收穫では平年に於てすらも家族全體の生活を維持することが困難である。彼れ等は常に生活維持のために奮闘せねばならぬ必要上から、自然日常生活の一般的事業を擧げてこれを婦人に委託して居るが、婦人は又その貨物の貧弱なるために婦人らしき裝飾をなすべき資力もなく、また修養をなすべき機会もない上に、動もすれば男子の助けとして共に狩獵に出掛ける。これでは婦人や家庭の發達を見ぬのが當然である。彼れ等は最も苛酷に自然のために虐待せられ、その狩獵生活では最も單純なる生活を維持するにも最も大なる勞働をなさねばならぬから、生活は常に荒き勞働の苦痛を以て満たされて居る。随つて彼れ等はその野蠻なる原始的生活の型を脱すること能はざるのみでなく、その野營生活から遠ざかつて文明生活に進むべき唯一の途である勞働を嫌つて、勞働なき怠惰の生活を貪らんとする。彼れ等は多くの場合に於てネグロ人種よりも一層極端に文明に反對するといふ話であるが、自然は必然的に彼れ等をして斯くならしめて居るのである。

人口が稀薄で金屬を利用するだけの知識がないから、製造業の發達などは皆目これを見ることが出来ぬ。事物の結合については全く兒童らしき方法しか知らぬから、切石を木材の端に結合す

るにも獸皮や木の纖維で縛る有様である。彼れ等はその身邊を飾るけれども、全く單純なる趣味からするに過ぎぬ。彼れ等がその勢力を費すを吝まぬところのものは、只僅少の武器裝飾品及び最も必要なる器具のみである。彼れ等は一般に勞働によつて生活の必需品を豊富に作るころの勞働の苦痛よりも、缺乏を忍ぶところの忍耐に長じて居る。極端なる飢餓に逼られざる限りは、怠惰に目を送るといふことは彼れ等には既にも一言したるやうになければならぬ生活の愉快である。

急流を溯つて泳がんとするものは水底に沈まぬことや押し流されぬことに全力を注ぐのみであつて、前進することなどは思ひもよらぬところであるが、彼れ等の自然に於ける生活もこの通りであつて、進歩することなどは思ひも寄らぬ。たゞその生活を維持するのが力一杯である。獵場に臨んで獲物を追ふ場合には、血も涸れんばかりの激甚なる勞働を続けねばならぬが、この緊張せる勞働の後には怠惰なる弛緩が来る。怠惰は彼れ等には唯一の生活の享樂である。彼れ等の自然的經濟及びこれに伴ふ生活方法は文明の進歩には苦き敵であつて、彼れ等は怠惰と野蠻陰險と獐猛の外に知るところがない。これでは昔から彼れ等に歴史及びその進歩のないのは無理もないことである。

かゝる例から見るときは、我が地球上の生活に於てはその自然的經濟の冷酷なる運命に支配せらるゝものゝ生活の不幸こそ實に大なるものであるといはねばならぬ。併しまたその反對に餘りに豊富なる經濟も人類の文明進歩に害がある。我が地球上に於ては自然的經濟の餘りに豊富なるために住民の發達せぬ例は非常に多い。南洋の土人の生活の如く自然的產物が豊富であつて、何等の勞働をなさずとも安樂にその日を送り得るものこそ、所謂後顧の憂がないから、早くから文明が發達せねばならぬ筈であると想像されぬではない。併し事實はこれと反對に却つて文明が發達せぬ。何時も所謂三月の氣分で躍つたり歌つたりしながら遊んで居る。彼れ等は北極の土人の如く自然的經濟に苦しめられて居るのではなく、遊んで居つても天然の倉庫があるから生活に苦しむことがない上に、氣候が熱帯で暑いから衣服や家屋の心配もないために、一生躍つたり歌つたり又は快活に話したりして暮らし、老人までも常に満足の好機嫌で舞踏の中にその日を送つて居る。吾々文明人の生活から見るとき、彼れ等は恰も小兒が自然の園に遊べる如きものである。彼れ等は北極の住民から見るときは、全く永久極樂の國土に遊居して居るやうなものである。

併し少しく立ち入つて觀察するときは、彼れ等のかゝる生活といふものは決して他から想像するやうに平和安樂なるものではない。氣候が暑くて凡ての生物が早熟であるやうに彼れ等の生活

も亦早熟であつて、熱情を恣にし、社會の裡面には嫉妬と暗黒とで想像するにも堪へ難き心の惑亂がある。熱情的に走るのみで道德的抑制を知らざる生活は、決して幸福なる人生の内の平和をもたらずものではなく、怨恨と怠惰と鬭争と弛緩の苦痛があるのみである。かくて彼れ等は何時までも單純なる原始的野蠻生活を反覆するのみである。社會的進化の連續的發達などは夢にも見られぬ。随つて彼れ等にはその個人的才能を發達せしめ、明瞭なる輪廓の個性を描くといふやうなことは到底想像されぬところである。個人はその種族の一員であるといふ外に大なる特徴を有たぬ。全體の生活は動物の群の生活を距ること遠からざるものであつて、彼れ等は文明人が一般にその歴史以前に於て過ごして來た永き原始的野蠻生活をそのまゝの形式で今日もなほ繼續して居る。今日吾々の文明人から見るときは彼れ等は全く吾々と異なつて本來文明能力を有せざるものであるかの如くに見ゆる。併しこれは彼れ等が本來文明能力を有たぬのではなく、その生活方法が長き間に彼れ等の高尚なる能力の萌芽を抑壓して最下等なる能力の熱情的満足のみを發達せしむるにいたつた、めである。吾々文明人でも三世代を通じて教育せぬときは全く野蠻民になつて終ふといふ話であるが、彼れ等も三四世代間を通じて文明社會に生活せしめ吾々と同じ教育を與へるならば、見かへるばかりの文明的人種になるであらうと思ふ。吾々文明人と雖も歴史以前

の永き時代といふものは全く彼れ等の今日と異なるところがなかつたのであるから、彼れ等とても全く凡ての意味で進歩を否定せられたる譯ではないが、兎に角彼れ等のなすがまゝの今日では彼れ等の社會には道德も藝術も科學もない。單純な生活を無邪氣に送ることすらも出来ぬ。極端なる感覺主義の熱情的生活に没頭し、何等の抑制もなき野獸の如き野蠻卑劣狡猾を得手勝手に行つて居る。彼れ等の生活では一切の優美なる人間味を失ひ、全く信用と友情とを棄て、互に敵意と狡猾とを藏しながら僅かにその表面の交際をつくらうて往くのみである。

これではその社會生活に歴史を作るべき叡智の興味の起らぬのは當然である。生活が餘り貧弱であつて自然から苛酷に虐められて居るものに文明の發達せぬことは既に述べた。彼れ等の痛むべき生活努力もたゞ辛うじてその自然を維持するに止まるのみであつて、文明的發達などは得られぬ。文明の發達するのはアリスト・テレースもいうた如く生活に餘裕を有し、その餘裕を教育に使用すべきを考へる場合のみである。進歩的社會の問題は如何にして生活を維持すべき手段を得るかにあるのみではなく、相當立派に維持すべき手段を得たる上に、なほその餘裕の時間や資力を如何に使用すべきかにあらねばならぬ。人類は生活を維持する手段を得るために勞働せねばならぬが、勞働するときは相當の結果を生じ、生活に餘裕を生ずる場合でなければ文明が進歩す

るものでない、所謂衣食住足つて禮節を知るといふことは、遊惰では生活することが困難であるが、勞働さへすれば餘裕を以て生活を維持することが出来る國民についていふことである。自然の經濟が餘りに豊富であつて發奮努力の必要のない場合に於ては文明が發達せぬ。凡てが原始的單純野蠻に止まるのみであるが、又餘りに貧弱であつて努力してもその骨折りに酬ゆるに足るべき結果を得られぬときも歴史は發達せぬ。發達するのは只この兩極端の中間に於て勞働の必要はあるが、勞働すればその結果を生ずべき場合のみである、勞働によつて自然を生活に必要な事物を生ずべき畑となし得べき土地のみである。かゝる土地は我が地球上に於ては熱帯でもなく寒帯でもなく、溫帯地方であることは此處に斷はるまでもないところである。溫帯地方では熱帯地方の如く怠惰なる生活を容さぬ、勞働せぬときは住民はその生活を維持するを得ぬが、勞働するときは自然はその汗と油の記念として非常に著しき効果を生ずる。

土地を以て生活勞働の果實を結ぶべき畑であり、記念であることは、彼れ等の生活に於て人類の初めて發見せるところであつて、彼れ等はその勞働によつて容易に自然的生活に於て得られざるところの進歩的生活の文明的資料を得られるから、人類は食物供給は勿論のこと凡ての生活需要品の供給に對して叡智的に巧く適應し、最もよく適者生存の進化的價値を作ることが出来る。

來る。

この地方に於ては坐して自然の果實を待つよりも働いて穀物を收穫する方がその住民に幾層倍の幸福を與へるか判らぬ。生活勞働の貴重なることを發見し得るのは彼れ等であつて、彼れ等はその農業に當ては忍耐強く自然の法則に従つて勞働しつゝ收穫を待たねばならぬ。勤勉なる研究と忠實なる適應によつて自然のまゝでは得られぬところの豊富なる收穫を得ねばならぬ。勿論如何なる種類の收穫も自由であるのではなく、自然土地には收穫の種類に或る制限があるのみならずその生産にも亦限りがある。つまり生産の種類及び分量に於て限りある譯であつて、これを經濟學の原則にあてはめていふならば、ミルも考へたやうに土地の有限的分量とその生産物の有限性が實際生産増加の限界となる。随つてこの生産限界の法則に巧みに適應せぬときは、最も有利なる農業の生産が見られぬ譯である。併しこの法則の適用範圍といふものは非常に廣いから、勤勉なる國民に於ては農業による生産の發達といふことは非常に多い。農産物の種子改良勞働及び肥料ならびに機械使用の改良等によつて收穫の増加すること實に測りがたいものがある。最近に於けるこの最も著しき例は丁抹國民の農業である。同國は五十年程以前までは見るも氣の毒なる荒地であつたが、國民の最も勤勉なる勞働によつて立派にこれを開墾し、今日では面積一萬

五千方哩弱の小國でありながら、農業國としてその産物を世界の市場に送り、農産物輸出國として世界到る處に顧客をもつに至つて居る。

併し論じてこゝに至るときは余は再び前に述べたところを翻つて多少考慮をせねばならぬものあるを發見する。既に述べたる如く人類の文明は勞働せねば満足なる生活をなすことが出来ぬが、勞働するときはその勞働に應じて十分なる生活を與へる場合に於てのみ發達する。随つて人類の文明は我が地球上に於ては温帶地方に發して居るが、同じ温帶地方に於ても古代の原始時代に至るほど人類は自然に支配せられることが多いから、文明は勢自然の恩惠の多い地方即ち熱帶に近い温帶地方に發達して居る。これは我が地球上に於ける文明の發生地を見れば直に判るところの事實であるが、その中文明が進歩するに随つて、人類は次第に自然に支配せられるよりも進んで自然を支配するに足るべき力を得、自然の如何に拘らず、人類自身の文明的努力によつて生活を満足に維持せんとする傾向が勝つて來たから、人類の文明は次第に北方の寒冷なる地方に移動して來た。歐洲の文明は人間の勤勉によつて不便の自然を開拓した結果であることは既に述べたが、その中でもこの丁株國民の文明は又一層人の勤勉によつて不便なる自然を開拓した例である。果してマルサスのいつたやうに人口が幾何級數で増加する拘らず食物の收穫は算術級數で増加する

に止まるか否か數學的に正確なることは今遽かに決定しがたいものがあるが、兎に角人口の増加が食物の増加に勝ること大なるものあることだけは否定すべからざる事實である上に、最近文明の進歩につれて人々の慾望が急激に大發達をしたから、今日の文明人は益々大なる努力を以て新需要の満足を圖らねばならぬに至り、改良に加ふるに改良を以て農業の進歩を圖るに至つた。最近に於ける農産物の量ならびに質及び加工品を見るときは何人も一驚を喫するであらう。今日正に進歩せる科學の知識を利用して出来るだけの進歩を圖つて居る時代であるが、それでも人口の増加を慾望の増加に比較するときは生産物が如何に増加してもその比量を求めると遞減の状態にある。殊に我が國の如く最近文明が急激に發展したる上に人口も亦世界に無比の割合で増加して居る國に於ては、この比量の上に表はれて來る遞減といふのは實に著しきものであつて、明治維新まで農産物の豊富を以て誇りとして自ら豊葦原の瑞穂の國といつて居つたに拘らず、今日は國民の主要食料についてすら莫大なる不足を感じるに至り、毎年多量の外米を輸入して居る有様である。

これは我が國に於ける著しき一例であるが、兎に角これによつても窺はれるやうに、人口及び慾望の増加と食物の増加とは順潮の比例を以て進んで居らぬ。生産の増加には限度があるが需要

の増加にはその限度を知らぬといつてよい有様である。況んやこの食物以外の生活需要品の増加がこれに加はつて居るのであるから、今日の文明國民こそ眞に自然の生産と需要との間に大なる懸隔を生じつゝあるものといつてよい。かくて今日では農業の外に工業的生産が人々の最も苦心するところとなつて居る。農業によれば土地の表面が利用せられるみであるけれども、工業によるときは空中から海中地下までみなこれを利用することが出来る。随つて文明國民の産業がこの方面に注意し畢生の努力を此處へ注ぐに至つたことは想像するに難くない。今日では正に工業の力により自然の富が従來全く知らなかつた程度で開發せられ、會ては人類の生活に有害であるとして人々から呪はれて居つたものまでが反對にその生活になければならぬものとして歓迎せられるに至つた。試みに今日英國の産業史を見、マンチターの空中やロンドンの地下から海中まで如何に大なる規模で工業的生産が行はれ、鑛業的發掘がその手を擴げて居るかを知るときは、誰人も近代生活に於ける工業の偉大なる働きをなせることを理解し得るであらう。又同時に英國の繁盛の偶然ならざるを首肯し得るであらう。

詩文に名高きアルプス山脈も會ては寒き風を吹き下したり、交通を遮斷したり洪水を生じたりするものとして伊太利人から呪はれて居つたが、今日はそのアルプス山から流れ出る河水によつ

て幾多の水力電氣工業を起こし、このために北方伊太利が繁榮して居ることは人の知るところである。我が國の猪苗代湖水の水力電氣のごときもその一例とするに足るであらう。昔はこの湖水から水が平原に落ちて徒らに石を嚙んで居つたのに過ぎなかつたが、今日は水力發電氣の装置によつてこの水がどれだけの大仕事をなすに至つて居るか、東京全市の電氣事業を見ればよく判る。今の第一第二發電所のあるところは猪苗代湖から出る阿賀川の上流、日橋川の畔である。若松町の平原と湖面との落差を利用してこの湖を貯水地とする電氣事業である。第一第二發電所を合して電力七萬五千五百馬力、かの磐梯山麓から東京市まで百四十餘哩の輸送に成功し、途中の損失は約一割に過ぎぬ。これに使用して居る銅線は六條であつて外徑各約四分即ち小指大のものである。三條でも輸送は出来るが送電の安全確實を圖るため豫備を備へて六條にしてある。この七萬五千五百馬力といふ大動力が僅か小指大の銅線三條で六十里に垂んとする長距離を僅々一割位の損失で輸送し得られ、全東京市に電氣事業の言ふべからざる恩恵を與へて居るのを考へるときは、吾々は自然が文明の力によつて有益なる經濟に變はること殆ど想像に苦しむほどである。只湖面から落ちて石を嚙んで居つたに過ぎぬ水が、文明の力によつてどれだけの仕事をなすに至れるか、眞に想像以上のものがある。東京市内の電燈電車、電話電信、その他百般の電氣工業は皆そ

の動力をこれに仰いで居るのである。

統計を見ると我が國今日の工業界では水力電氣は天然水力の約三分の一しか利用せられて居らぬから、残る三分の二を悉く電氣工業に利用する日が来るなれば、恐らく我が國の工業界全體がその面目を一新し、自然の力で國家の大富源を無限永久に開拓せられるに至るであらうと思ふ。殊に一面から見るときは我が國などでは石炭が少量であつて、今日の使用量でも今後使用を持続し得る年限は約七十年といふ話であるから、この方面からいへても是非共自然水力を工業界に利用せねばならぬ必要がある。かりに若し吾々の凡ての工業が火力に動力を仰ぐものとするときは、前途忽ち暗黒とならざるを得ぬが、水力によるときはもと太陽熱の利用によるものであるから何處までも無限であり得る。併しこれ等の太陽熱の利用もなほ間接的消極的である。若しかりに科學の進歩の力をもつて積極的に太陽熱を利用し得るに至るならば、地球上に於ける燃料不足といふやうなことは更らに問題とするに足らぬであらう。因に今日地球上では約壹億〇五百萬馬力の火力から供給せられる動力と約壹千五百萬馬力の水力から供給せられる動力を以て諸般の機械的事業を進行せしめて居る。吾々は今日都合壹億二千萬馬力の動力を使つて居る譯であるが、この動力の需要は毎年約五分の割合で増加して居るから、これによると我が地球の地下に存在す

ところの石炭は今後約百二十年で使用し盡される計算になつて居る。ところがこの百二十年間使用の石炭の熱量を太陽熱に比較する時は備かに七日分の熱量に過ぎぬ比例であるから、太陽熱の莫大なことは略ほ想察せられると思ふ。この太陽熱が若し直接吾々の文明生活の諸般の機械事業に利用せられるならばその幸福といふものは實に莫大なるものであつて、遽かに豫想を許さぬものがあるであらう。我が地球上の自然は大なる力を以て運轉して居るが、この自然が太陽熱の發達せる利用によつて凡て文明的事業の經濟的價値に變はるならば、人類の繁榮及び幸福に名狀すべからざるものがあらう。人類の歴史は自然から社會に人々の生活興味の移つたときに初まり、換言すれば自然を人類生活の立場から文化價値に轉廻するときに歴史が初まつて居る。むかし人類の先祖が鋤や鋤を以て僅かの土地を耕してこれに一二の穀物を植ゑたときに歴史が初まつたが、この小なる規模の耕作が科學の力によつて地球全面に擴がり、地球の大自然が直接太陽熱の文明的利用によつて大規模で文化を作るに至つたときの歴史こそ眞に想像以上のものであらう。人間が自然の中心となるといふことはこの時初めていへることであらう。随つて文明人の歴史では工業が最も重要な關係をもつて居らねばならぬが、殊に我が國の如く自然的資源に乏しき國に於ては、國家の政策として特にこれを重要視せねばならぬ必要がある。

二、労働と歴史

諸、余は前節に於て人類の歴史は自然を經濟價値に變化する形式を以て行はれるものである點について述べたが、かく自然が經濟價値に轉廻するにはその間に労働がなければならぬ。随つて人類の歴史には労働が最も大なる關係を有し労働の發達と共に發達して居る。よつて余は本節に於てこの新問題について考察し、以て歴史の説明をこの方面から進めて往かうと思ふ。

諸、既に述べたる如く人類の文明は自然を以て労働の記念と見るときに發達したものである。随つて大體から見るときは人類の歴史は農業の定住生活時代から發達するに至つたものであつて、この農業生活をするためには人類はよくその自然に適應して生活能力を發達したこと幾倍なるかを知らぬ。ラノチエル氏は吾々の先祖は遊牧時代から農業時代に移つたとき一定の面積の土地で遊牧民に比較すると約六倍の農民を支へ得るに至つたといつて居るが、恐らくこれよりも多いであらうと思ふ。實に吾々の先祖が人口の増加によつて社會を作りその社會問題の中心に生活労働を置いて堅實に歴史を作るべき生活方針を立てたのは農業時代であつて、これより以前殊に狩獵時代の生活に於ては人類はまだ労働の價値を自覺せぬ、自然の與へるところのものを取つて生

活するを以て最も賢明なる生活方法であると考へて居つたに過ぎなかつた。所謂種を蒔かずして收穫せんとするのが一般に彼れ等の生活思想である。併しこの思想は人類から容易になくなるものではなく、吾々の先祖は自然の與ふる單純なる事物を以て生活し、自然の恩恵を賞讃することが不可能なるに至つたときも、なほ労働を重んずるよりも、他人が労働によつて得たところのものを掠奪するを以て賢明なる生活方針であると考へ、労働せねばならぬ場合でも諸種の方法によつてこれを避けて掠奪に走り、忍耐と節制とを以て正直に必要な物品を生産するよりも戦争によつて之れを奪掠するを以て最も賢明なる生活方法であるとした。この理想はこれまで永く人類の腦裡を支配し、容易に正當なる道徳心の發達を容さなかつた。されば自然人類の歴史に於ては自然のままの生活様式に續いて所謂英雄時代ともいふべき時代が現はれ、人類の生活様式が肉食獸の生活様式に似たる時代があつたのみでなく、この時代は實は人類の歴史に於ては永く續いたのである。今日でも人類はなほこの痕跡を全然脱却するに至らぬ。労働の道徳的精神に於てなほ不純なるものあるを免れぬ。確實なる労働の連續を嫌うて自己の生活維持を短時間の收穫に待つたり、一瞬間の労働にあるだけの力を傾注したり、誇り顔に鬭争を吹聴したりすることは、今日もよく人類に見るところである。熱情的に一時興奮して繪の如き英雄的生活をなすを欣び、平

和なる産業の連続的活動によつて道徳的平和の社會を作るよりも、畫の如き想像によつて詩の如き社會を作ることとを夢みることは今日の文明人に於てすら得意とするところである。獅子や鷲の如き猛獸や猛禽の有つやうな鬭争的競争心から起こるところの野心のために人類はその自然美を發達せしめなかつたことが多い。

希臘人は劍や劔を以て土地を耕す鋤や鋤と同じものとは考へず、ローマ人は口碑によるときは先祖を以て掠奪者であると考へて居つたのであるが、獨逸人の先祖に於ても劍を以て得たるものは勞働によつて得たるものよりも尊いとして居つた。歐洲の中世紀に強盜の横行したることは歴史上有名なる事實であつて、彼れ等は人間の精神は勞働するときは卑屈になるものと考へ、朝夕勞働に従事することは奴隸階級の仕事であると思像して居つた。今日吾々文明人の言へる如く、人間に堅固なる性格の發達を促がすものには只勞働あるのみであるといふことは、彼れ等の未だ想像せなかつた所である。

ホーマの詩の世界には貴族の優美なる幸福の基礎を作るものとして勞働的奴隸の暗黒なる階級が現はれて居る。勿論彼れ等の勞働に對する思想といふものは非常に幼稚なるものであつて、社會的生活の根本精神に於て勞働を以て劣等なるものゝ従事すべきものであるとなし、全く人間の

機械とも見るべき奴隸の従事すべきものであると考へ、これを以て本來地位ある自由市民のなすべきものでないとして居つた。文明時代の希臘に於ても勞働の觀念はなほ甚だ幼稚なるものであつて、黄金時代といはれた希臘に於ても勞働觀念には進歩を見なかつた。アリストテールが奴隸を以て正當なる社會制度であると考へて居つたことは有名なる話である。この哲學者の人生觀として、人間は生産の暇をもち、この暇の時間を人道の價値に負かざるやうに消費し享樂せねばならぬといふことから、彼れはこの暇の時間に第一人間を教育せねばならぬといふことを熱心に主張し、而して希臘人も亦進んで、この哲學者の意見を迎へ、彼れ等はその教育目的を達するために随分長時間の激烈なる訓練を辭せず熱心にこれに従事するを怠らなかつた。併しこの場合でもこの哲學者及び市民の勞働に關する思想は甚だ幼稚なものであつて、勞働は文明人の生活にはなければならぬものであると考へたに拘らず、なほこれを以て奴隸の服従すべきものである、自由市民の服従すべきものでないと考へた。自由市民の暇の時間といふものは彼れ等には奴隸の勞働によつて作らるべきものであつたのである。これが彼れ等の大なる缺點であつて、彼れ等には教育によりて知識を擴めたに拘らず、その知識は少しも實際生活の指導的力とならず、勞働をもたぬから彼れ等は社會を重んじたに拘らずその社會生活の聯帶責任を理解するに至らず、後に希臘

の滅亡を來たしたことは人の知るところである。

アリストートルは梭が獨りで運動するときに來たら奴隷が要らなくなるというて居ることは人の知るところである。この語によるときは哲學者でさへ理智的に働く機械として或る階級の人間を奴隷的に取り扱はんとした矛盾を有して居つたのである。一般市民ならば兎に角、人類や歴史の永久的眞理を考ふべき哲學者がかゝる矛盾の見解を抱いて居つたといふことは頗るをかききこであるが、これには當時の希臘市民の社會組織および人種的偏見が非常に手傳つて居つたらしい。歴史によるときは人も知れるがごとく希臘人は所謂ヘレニツク、ブライドの強かつた國民であつて、彼れ等は自己以外のものを以て自然によつて奴隷たるべきものであると見て居つた。勿論この奴隷の中には、希臘人から有益に使用せられるために教育せられたるものはすくなくなかつた。併しその教育は依然として奴隷としての教育であつた。彼れ等は只外國人の子孫であるといふために初めから奴隷たるべきものであると見られて居つたのであるが、その中に内亂が絶ゆる暇なく、随つて同胞でも戰敗者の市民は外國人と同様に奴隷として賣却せられたから、希臘人は結局同胞を以て奴隷とすることもあつた。人によつてスバルタは貴族政治であつたが、アゼンヌは民主政治であつたといふものがある。併し實は凡て貴族政治であつたのである。随つて奴隷

に對する考へは希臘市民には當然として承認された社會組織上の思想であつたのである。スバルタでは九千の自由市民に對して五倍の雜種民及び奴隷があつたが、アゼンヌでは約十萬の自由市民に對して一倍三割程の雜種民及び奴隷が居つたのだから、その割合から一方を貴族政治といひ、他方を民主政治といふたのであるが、實際は何れも貴族政治であつた。加之、想像的に自由なる彼れ等は凡ての場合に於てこれを幻影的に高調する傾向がある。尤も實際に於ては貴族としての希臘人は奴隷に對して殘酷と苦刑とを欣んだといふことはなかつたが、さりとして又優しき心根を以つて同情の涙を有つて使つたといふものでもない。古代に於て一般に見るところの貴族的態度を以て之れに臨んだが、勿論かゝる奴隷制度の場合に於ては、同じ階級の貴族内に於ては奴隷に對して一種の保守的利己的輿論が行はれるから、他の點に於て文化の進歩せるものあるに拘らず、奴隷に對する思想に於ては依然として不進歩の利己的保守主義を出でること能はず、前に述べた哲學者でさへこれに囚へられたのである。併しこの非反省的な利己的我まゝのために希臘文明に大なる暗影を投じ、纏て國運の頽廢を來たしたことは争ふべからざるところである。人々はその社會生活に於て自己の生活の享樂は他人の勞働によつて得られるべきものと考へるから、勞働を神聖視して自らこれに服従せんとするの念なく、全くこれを以て他の劣等階級の奉仕に求め、自

分等は放縱なる態度で怠惰な慾望の安逸なる満足を求めたから、その結果自然彼れ等は内部から道徳的に腐敗するに至つた。彼れ等の理想とする人道の高尙なる自由がその社會から全く跡を絶つに至つたのは全くこのためである。希臘人の社會は先づ貴族から破壊し歴史は彼れ等の手によつてその進歩を斷たれたのである。

希臘時代に次いで起つたローマ時代もこの奴隷の弊害を増加したのみである。ローマ帝國も仍且その奴隷に對する貴族の利己的思想から社會の破滅を來たしたというてよい。元來ローマ民族は戰爭好きの民族であつて、諸種の生産業の發達にはあまり留意するところがなかつた。勞働階級の國民は皆單調なる農業の固定的職業に執着するのみであつて、國家がその保護發達を計らず、何れかといへば農業などによる收穫よりも戰爭による掠奪を以て勇ましき行爲であり、且つ有利なる行動であるとしたから、農業は大なる發達をなさず、古き歴史の原始的型によつて勞働する百姓を見るのみであつた。併しそれでも最初の間は彼れ等は古き歴史の初めから傳つて居る農業に對して尊敬と嗜好とを失はず、忠實にこれに従事して居つたが、その中戰爭によつてその領地を廣めるに至つて、この習俗も漸次變化衰滅して來た。連續的戰爭によつて國家の領土が次第に外に向つて膨張し、國民が植民地の利益を味ふに至つて、彼れ等は次第に忠實なる勞働の農

業や製造工業によつて生活の需要品を造るよりも、武器によつて一度に多量の物品を掠奪するの有利なるを覺え、彼れ等は勤勉なる勞働によるよりも勇敢なる掠奪によつて生活し、世界の大部分を以て彼れ等の生活に必要な物品を貯藏せる倉庫であると考へた。随つて國民は次第に勞働に對する愛の念を喪失して貴族の外は一般に貧困にならざるを得なかつた。その上一體ローマでは植民地の征服毎に貴族が財政の膨張を圖り、奢侈品を掠奪輸入して國民の前で遠慮なく逸樂に耽つたから、自然奢侈淫靡の風が國民に感染し、一般國民はその日の生命をさへ繼ぎ得るならば凡ての勞働をすて、貧乏の中で無理算段をして享樂に耽るやうになつた。ローマが滅亡したのはこゝに原因するのである。

ローマに於て貴族が暴富を得て奢侈安逸に耽つたこと、一般國民が貴族のなすところに倣はんとして眞正の勞働を厭ひ貧困と安逸の風俗とに陥つたことはローマの衰亡を來たした所以であつて、後世史家の最も彼れ等のために遺憾とするところである。既にも述べたる如く一般ローマ人は政治的手腕のあつた國民であつて、彼れ等はその領土を擴大したけれども、これには侵略的戰爭よりも行政的手腕によりたるところが多い。随つて軍人よりも貴族政治家が幅を利かした上に、傭兵制度であつたから、自然植民地の擴大によつて得るところの利得を少數の貴族政治家に

分ち、その他のものは只日給として少量の給與を受けるに過ぎなかつた。貴族は自己の利得となるから苛酷なる收斂をも辭せず、出來得るだけ多く誅求してこれを自己の懐中に收め、廣大なる帝國から生ずるところの利益を襲斷した。随つて少數の貴族の暴富と多數國民の貧困とを來たし負傷して歸國したる癡兵もその身體を横へるに足るべき一クロットの土地すらも無き有様であつた。又勞働は貴族の奴隸で占領されて居つたから、健康で歸國したる兵士も賃銀勞働をなすべき口すらなかつた。かくして貴族と一般國民との貧富の懸隔は日一日と甚だしくなり、帝國の滅亡したるときには全ローマ帝國の富を極く少數の貴族が獨占して居つた。まつたくローマ帝國では一方に暴富を擁しながらもその富を一般國民の前で何の遠慮もなく享樂に使用する貴族と、他方に何の富もなくして貴族の生活を羨みつゝ只享樂をのみ漁り、勞働を嫌つて逸樂に耽らんとする自暴自棄の貧民とが對峙し、常に國家社會の平和攪亂の種を作つたのであつた。土地の再分配によつて失ひたる國民の經濟的平衡を恢復せんとしたけれども、既に勞働及び經濟に對する道徳的精神を失ひたる國民は食物を得れば觀劇の享樂に耽らんとするのみであつて、更らにこれを勞働の資本となすごときことがないやうになつた。民衆の食物と觀劇の要求は實にローマ帝國の絶えざる苦痛であつたのである。つまり遊びながら贅澤に暮らしたいといふのがローマ帝國一般の習

であつた。これではローマが滅亡したといふことには何の不思議もない。社會の健全なる發達とか、教育の進歩とかいふことは全く見るべからざるところであつたのである。

ローマ帝國に次いで起つた中世紀の社會は所謂人種の大移動の後に起つたものであるから、凡てその組織を一新したが、不幸にして勞働思想に於ては發達するところがなく、依然としてローマの英雄時代に變はるところがなかつた。随つて中世紀の新社會に於ては、法律的制度として存在せざるところの昔の奴隸制度はなくなつたが、事實の上に於ては依然としし奴隸に等しきものが社會に存在して居つた。人種の大移動はまた昔の英雄時代の冒險心を重んずるやうになり、社會に再び新規に武器をもつ階級を生じたから、自然勞働階級はこの武器を有つ階級の下に立つてこれを經濟的に維持し、彼れ等の社會的活動を自由ならしむべきために存在するものと考へられ、昔の奴隸と大差なき社會的地位に沈落した。この時代は武士の英雄時代であつた。けにこの新制度の社會に於ては凡ての點に於て勞働に對する新刺戟を與へることなく、社會の基礎は凡て勞働に關係なき浮調子のもとなつた。又政治的生活の陷落は地方的結合を緩くし、而してその間に頻々として起ころるところの連續的戰爭は到る處で眞面目なる計畫の大企業を妨害したから、社會の經濟狀態は古代にも笑はれるほどの貧弱なるものであつた。若し武器をとつたこの新

階級及びこれに隷屬せるものにのみ委して置いたならば、歐洲の中世史は最も貧弱なる時代として現代社會の大發達の準備をなすことが出来なかつたであらう。

併しこの間に於て歐洲の社會に於ては彼れ等以外に所謂都市の商業市民として労働企業に従事するものが勃興したから、歐洲の中世紀はかゝる哀むべき社會狀態を脱して後の歴史進歩の堅實なる基礎を作るを得た。すなはち中世紀の初め國民を刺戟したる人種の大移動が終ると間もなく商業的交通が新規に起り、新貨物の輸入によつて人々は生活の新需要を満足せんとして自然多くの人々が四方から集まつて集團生活をなし、これを中心として漸次四方の地方的産業が商業上永久的結合をなすに至つた。中世紀の都市はかくの如くして發達したのであるが、當時に於ては法律上の保護が今日の如く完全ではなく、遠隔せる國家の國際的交通が不完全であつたから、自然各都市は相互的關係を有せる産業に於てそれ〴〵獨立に密接なる結合を作るべき必要と努力とを生じたのみでなく、なほその結合の組合内に於ても同様の關係を結ぶの必要を生じた。かくて獨立自由の都市が發達すると共に人々はその都市生活に於て自己の最も有能とするところの職業によつて組合に貢献すべき必要上から、自然その職業によつて社會内に於ける自己の位置を規定するに至つた。これによつて彼れ等は一切の歴史的因習を破つて人間の労働及び經濟を根柢とす

る自由經濟の社會組織を作つたのであるが、一體吾々の社會生活に於ては、個人の職業といふものは單に個人だけの労働及び享樂の分量を規定するものではなく、なほこれによつて組合及び廣く人類社會全體の生活及び享樂の根源として權威ある構素とならねばならぬ。随つて個人は經濟的に社會連帶的でなければならぬ。個人が家庭に屬することは多言するまでもないが、これと同時に共同的社會の一員としてその安寧幸福のために必要なる業務に従事して、これが遂行を努めねばならぬ。個人はその職業によつて具體的に共同的社會内に於ける權利義務や風俗習慣に關與することが出来、社會より受ける恩恵と社會につくすところの貢獻との平衡を得られるのである。中世紀の都市はこの點に於て人々に生活の大なる訓練と利益とを與へ社會の堅實なる發展を生ずるを得た。組合は彼れ等の最も尊重するところであつて彼れ等はその連帶的社會組織及び訓練に於て乞食にでさへも社會的同胞としてその存在を認め、特殊の權利を與へるに至つた。所謂ギルドなるものは斯くの如くして中世紀の歐洲の北方に發達したのであつて、この組合の中に彼れ等は共存同業の社會的連帶の事實を確立し、その生活訓練を實際に積んで往つたのである。

以下少しくこの都市の影響による歴史の發達について考へて見よう。第一彼れ等の生活は地方に農業の發達を促した。農民が只自己の生産したものを自己で消費する所謂家族的經濟時代に於

ては農業は大して發達せぬ。只個人の生活を保持するに止まるのみである。併しその中でも極く小範圍の限られたる地方に於ては、或る家族に餘りあるものを以て他の家族の不足を補ひ、その代りに他の家族に餘りあるものを以て或る家族の不足を補ふといふことはあつた。所謂物々交換はあつたが、この交換が一定の地方的市場で行はれるに至つたことは人類の歴史では可なり進歩したときのことである。我が國に於ても地名に何々市といふのがあるのは即ちこの名残りを留めるものである。この物々交換の市場の發達したときは農業は地方的に可なりの發達を見た。この市場が發達して國家的となるときは、最早物々交換ではなく貨幣を以て購買する様になる。随つて大なる商人も發生すれば大市場も出來、大都市が發達するやうになるのが普通であるが、ここに至るときは社會經濟が長足の進歩をする。歐洲に於て十七世紀に經濟の長足の發達をしたのは都市のこの影響によるものであるが、彼れ等は只一國內の商業を以て甘んずることなく、南歐から亞弗利加の諸地方までその手を延ばして廣く世界的に商業を開いた。こゝに於て知識の交換からいつても産業の發達獎勵からいつても、乃至法律制度道德習慣からいつても凡て世界的となり、經濟も只國民的經濟ではなくて世界的となり、貨幣取引をすら超越して信用取引をなすほどまでに至つた。

かゝる商業貿易の發達は當然貨幣制度の發達によつて全國全世界の富を統一的に蓄積し使用し得るに至るから、都市及び國家の富が急速なる程度で發達した。その結果自然都市や國家の手を以て諸般の社會的事業の計畫を立て學問及び藝術その他一般に文化事業の大發達を來たした。又産業の世界的發達は地方的産業に於て奴隸的に貴族のために勞働せるもの、存在を必要とせなくなつた、めに奴隸を解放して自由國民となし社會生活に於ける階級を根本的に改良した。實に當時に於ける都市の活動の歴史に及ぼした影響をいふものは莫大なるものであつて、後日歐洲國民が世界に雄飛すべき大氣宇はこの時彼れ等によつて養成せられたのである。人々は凡て自由の國民として大なる規模を以て社會的に活動し、共同的社會生活に於ける社會聯帶の一員としてその社會の繁榮に對して特殊の義務と權利とを有ちつゝ活動すべきを知るに至つたのは、全くこの自由都市々民の教育の影響である。されば後にフイヒテが獨逸國民が危急存亡の秋に陥つた際彼れ等に告げたる演説中に於て當時の自由都市々民を追懷し、彼れ等の自由獨立の精神によつてナポレオンに打ち毀されたる獨逸を再び建設せんとして、左のやうにいつたほどである。

「吾々は中世紀の自由都市において今日獨逸國民をして感憤興起せしむ可き歴史を有して居る吾々はこの歴史を以て之れを聖書または俗語讀本の如く國民讀本となすは是れ即ち獨逸人の精

神を復興せしむ可き唯一手段であつて、又斯くの如くして吾々は始めて他日特筆大書す可き事業を爲すの日が来るであらう。併し斯くの如き歴史は單に事實事件を列擧するのみでは足らぬ。不可思議なる力を以て吾々を捕へ、知らず識らず吾々を彼れ等の當時に於ける生活中に導き、以て吾々自身をして自然に彼れ等と共に立ち、彼れ等と共に行動するに至らしむるものでなければならぬ。而も亦斯かる歴史を叙ぶるに當りては吾々は幾多の歴史小説家の爲すが如く少年小説によつてはならぬ。眞理により、眞理ある歴史の生命より其の證據として幾多の事實事件を發生せしむるものでなければならぬ。斯かる歴史の叙述は廣大なる知識及び未だ曾て見ざる所の研究の結果によつて得らる可きのみである。併し其の知識及び研究を叙述するに當りては吾々は著作家たるを要せぬ。如何なる獨逸人も容易に理解し得可き方法によりて其の豊富なる思想を叙ぶるを要するのみである。斯くの如き叙述は歴史的知識の外、尙ほ世人の知らざる幾多の哲學的知識を要するであらう。就中、忠實なる愛の情意を要するであらう。」

實にこの時代は範圍こそ狭いが獨逸國民のもつべき最も大膽なる行爲の若き夢であり、將來十分發展すべき國民の運命の豫言であつた。彼れ等がその組合の經濟的獨立活動と共に國民の公共的生活の繁榮、歴史の文化發展を來たし、久しき以前の歴史中に於て廢滅に歸せるところの國民

的法典、家族生活の美點をさへも復活し、産業の組合的精神の中に新訓練を重ねて來るべき新國民をまつた。吾々は彼れ等のこの歴史上に於ける貢獻を幾ら賞讃しても過賞にあたりといふことを知らぬ。歴史の内容を作るべき科學道德宗教および藝術は凡て彼れ等の手によつて發見せられたところである。近世に於ける科學の發見者が如何に獨立不羈の精神を以て起つたか、藝術家はどうであるか、宗教家はどうかであるか、一々教へるに違がないほどである。實に近世生活に於て人類に勞働の高尙なるを教へ、職業によつて初めて人類及び社會を具體的に理解すべきを教へて吾々にこれ等の問題に對する豊富なる内容の知識を與へたるのみでなく、なほこれと同時に眞に人格の獨立の尊ぶべく自由の貴ぶべきものたることを教へ、人類を實際生活の上に於て活かすと共に理想を與へ永久の光明を知らしめたるものは彼れ等である。科學の發見によつて新らしき勞働を發見してこれを大規模で解決すると共に、更らに又新らしき勞働を發見し、人間に無限の勞働を與へるべき端緒を開いた。人間は既に述べた如く自然進化史的存在ではなく、社會進化史的存在であつて、殊に文明人からいふときは自然を只自然のままに放任することは恥辱である、人格の獨立及び體面のためには是非共その自然を進歩せる經濟價値に改良せねばならぬ。荒廢に委せられたる自然、人生に利用されて居らぬ自然があればあるほど、大なる熱心を以てこれを開拓し、

人格の獨立及び體面を維持するに足るべき經濟を作らんとするのが文明人の特徴である。文明人では人も知る如く科學の力によつて古代の人々の想像することも出來ぬほど大なる力を以て自然を經濟的價値に轉換して居るが、併しその文明人に於ては既に轉換し得た經濟的價値よりも是れから轉換せねばならぬ經濟的價値の方が遙かに多く、文明人ほど是れからなさねばならぬ新勞働を多くもつて居る。歴史はこれからであるが、この端緒は全く彼れ等の作つたところであつて、彼れ等はその勞働によつて吾々人類に道德に於ても信仰に於ても自然にその志操を鍛練すべきを教へた。吾々は彼れ等の手によつて先祖の未だ曾て想像せなかつた生活の幸福の根源が自然の中に埋没して居ることを知り、科學の力によつてこれを無限に開拓すると共に、社會の組織を根本的に改良し、勞働の睿智的及び道德的價値創作の中に人類の生活の幸福及び歴史の無限進歩のあべき世界を知つた。彼れ等の世界歴史に與へた功績は實に偉大なるものである。

併し彼れ等のかゝる意味ある歴史の開拓も彼れ等の仲間に於て特殊の勢力を養ひたるものが專横の振舞をなし、自由市民の精神をすて獨斷專横の態度を以てその特殊勢力の維持に腐心するに至つて内部から腐敗し、組合の自由組織が内部から破壊されるに至つたのは是非もないことである。一體如何なる社會組織に於ても初めてこれを組織する時代に於ては大抵自由平等に出來、

その利害關係も公平に往き渡るものであるが、その中に社會の事情が異なるに隨つて最初の制度に據つて特に利益を享けるものと、反對に餘り利益を蒙らざるものを生ずるといふことは免れかたきところである。而してこの場合に於ては利益階級は人情の常としてその組織を利己的に擁護せんとし、勢力ある地位を利用して專横に走るといふことは人情としては止むを得ぬところであるが、賢明なる政治は常にかゝる相反せる社會的事情の下に最初の理想を益々明晰なる姿に於て公平に徹底して往かねばならぬ。併し不幸にして彼れ等はかゝる政治の徹底を期すべき熱心と道徳心とを缺いて居つたから、さしもの自由都市も内部から破壊され、都市の衰亡と共に勢力階級のものも亦衰亡したといふことは是非もないことであるといはねばならぬ。

併しそれだけこの自由都市の精神には愛惜の念を失はざるものがあつて、都市は倒れたけれどもその精神は一般社會に廣まり、市民が自由の連帶を破つて貴族の眞似をなし、享樂の獨占を追うてその精神の腐敗するのを覺らなかつた間に、これを見て居つた自由國民！自らその生活を維持するためには勞働せねばならぬ、而も共同的社會生活に於て連帶的責任を重んじ、社會の恩恵とこれに對する貢獻とを忘れないで勞働すべきを知つて居る國民によつて都市の自由生活を維持し、市民自らがその自由を毀した後に心から自由を愛する人々によつて廣くこれを歐洲の社會

に傳へ以て生きた歴史を作るに至つたことこそ眞に人類の幸福である。余は前に歐洲人はその初めに於ては他の文明民族よりも以上に自然の恵みを受けたのではなく、寧ろ彼れ等よりも遙かに不利益なる自然的經濟の下に勤勉と忍耐とを以て勞働して來た結果、今日の文明を築き上げたものである點について述べたが、この記述は主としてこの北方民族に該當するところの記述であつて、英國人獨逸人と蘭人丁株人みな是れその模範にあらざるはない。彼れ等はこの自由都市々民の衣鉢を承けて奮勵努力した國民であるが、就中英國民の産業發達史中には彼れ等のこの自由の精神、獨立自治の精神の最も躍如として活動して居るものがあるを覺えるから、次ぎに簡單に彼れ等の産業發達中に於けるこの自由精神の活躍について述べて見よう。

由來自由と奮闘の精神を忘れぬのは英國人である。彼れ等はこの精神によつてその荒涼たる北海孤島の原野を早く農業地に開墾したが、獨立自治の精神は何處までも國民の經濟的獨立を得る目的でなほ進んで一段高き見地に立つて商工業の大企圖の發達を促がした。曾て歐洲の天地に於ても最も荒れて居た土地を忍耐よく開墾し、農業國民としてその農産物が少量の輸出品中で兎も角も首位を占めるまでになつたが、更らに大商工業國民として世界の市場を占領するべき計畫を立てるに至つた。彼れ等は全く忍耐と勤勉とを以て遣つて來た中に、益々大覇氣を養つたのであ

る。文明進歩の第一階段として人類の歴史進歩の過程に於て踏まざるべからざるところの農業に熱心し眞面目に働いたから、自然その國土が農業國として穀物の栽培から見るときは天與の恩恵國ではなく、土地の自然に於ては勿論大陸諸國に劣つて居ることを痛切に感ずると共に、その獨立自治の精神は彼れ等をして直ちにその耕作地を大牧場となさしめ、更らに大商工業に向つて一大勇躍をなさしめたのである。以來彼れ等はその獨立自治の精神によつて着々としてその目的に向つて進み今日ロンドン市にあるローヤル・エツクスチェンジが世界の大市場たることは誰人もよく知るところである。こゝでは各國の商人は勿論のこと國王も大統領も相交つて自由に商業上の取り引きをして居る。この光景が英國が世界の商業國であるといふことを最も具體的に示して居ることは、一度足をこの取引場に運んだものゝ一目して知り得るところである。彼れ等がその商業國民たるの意氣は正にこの取引場の空氣が最もよく象徴して居る。余は前節に於て英京ロンドンの地下から海底へかけて石炭の大規模の開鑿があり、マンチエスターの市上は一面の工業の雲を以て掩はれて居ることを述べ、英國の隆盛はその偶然ならざるを知ると述べたが、このローヤル・エツクスチェンジのことゝを併せ考ふれば彼れ等の商工業國民として世界に雄飛せる所以を十分に知ることが出來よう。吾々は獨立自由によるかゝる國民の大繁榮と自己の生活維持をば

自己の労働に待つべきことを知らなかつた古代國民の衰亡とを併せ考へるときは、國民の興亡盛衰について眞に感憾に堪へぬものがある。

三、近代生活の困難

諸、余は前節に於て労働の經濟的價值について述べ、人類がこの價值を理解するに随つて次第に堅實なる方法を以て歴史の發展を見るに至る點について論じた。併し労働と歴史の關係を考察するにあつては吾々のなほ最も注意せねばならぬ次ぎの問題がある。即ち労働の種類及び富の分配問題これである。歴史の發展には労働はなければならぬものであるが、労働の種類によつては差し當り労働者に大なる不利を與へたり、富の分配が甘く往かぬために實際の労働者を困難の地位に陥らしめたりする、所謂近代生活の困難はこれから生じて居るのである。余は本節に於てこれ等の問題について考察したいと思ふが、先づ労働の種類及びその發展によつて人類の生活殊にその教育的發展に不利益なるものがある點から考察して往かうと思ふ。

さて既に述べた如く人類は歴史の初めに於て農業の産業革命を経て來た。吾々の先祖は農業を發見したために、それより以前の原始的時代に於ては全く想像も出來なかつたところの適者生存

の價值を得、生活の安全なる發達の保障を得たのであつた。併しこの原始的農業は最もよく自然力の影響に支配せられ土地に拘束せられて分業を行ふべき餘裕が少い。随つて技術の進歩が他の叡智的職業に比較するときは著しく遅れ、經濟もなほ全く家族經濟に止まつて居る。我が國は諸種の事情から變態的に産業の發達が遅れて居つたから、つひ最近徳川幕府の時代まで田舎の地方に往くときは、なほこの經濟時代の農業を見たが、この經濟の農業では家族の生産するものを家族内に於て消費し、只僅小の剩餘物を以て近隣の者同士が他の物品と交換するに過ぎぬ。随つて生産の大なる發達、知識の進歩といふことはこの農業に於ては見るべからざるところである。併しこの農業に於ても家族の消費するところのものは家族に於て生産せねばならぬところであるから、その副業として極く簡單なる家族的手工は既に早くから見たところであつたが、この手工業の方面から知識の進歩を促したること實は甚だ多いのである。勿論農業に於ても既に述べたる如く自然の法則を發見してこれをその耕作に適用する點に於て原始時代の人々の知識の發達を促さぬではなかつた。併し手工業の變化が著しく叡智的であつて繊細なる工夫を要するには及ばぬ。微妙なる人類の慾望及び趣好が昔から手工業の大なる發達を促して居ること最も大なるは、吾々が今日殘存せる古器物を見てもよく判る。古代に於ける知識の發達はこの方面の刺戟による

こと最も多い。社會の一般的趣好が未だ十分に發達せず、少數の家族の素朴なる要求を満足するに止まつて居る間は技術が幼稚であつて、その間に巧拙の差を認めるに至らぬから、家族中に於て誰人もこれに従事することが出来るけれども、人類の微妙なる慾望や繊細なる趣好は何時までも家庭や社會をかゝる幼稚なる状態に置くものではなく、發達せる技術の製作を要求するから、家庭に於ても自然分業を生じ、機織裁縫の如きものは女子のなすところとなり、その代りに器具の製造の如きものは男子の分擔するところとなるが、更らに發達してこの手工業が農家の副業の手を離れて社會的に専門的職業となるに至るときは、技術が進歩して、特殊の工業に特殊の技能を有せるものを要求するやうになるから、自然専門的技術の工業労働者が發生する。進歩せる社會の需要を満足するためには、その製作業に於て準備的教育を必要とするが、何人もこの教育を受け得るものでもなければ、又堪へ得るものでもない。只特殊の能力及び資本を有せるものゝみにこれに堪へ得る譯であるから、自然その職業者間に於て淘汰といふことが行はれ、これに勝利を得たるものゝみ所謂生存價値を得たるものとして、その製作業に従事し社會の需要の中心的勢力となる。随つて農業時代に於けるよりも社會的階段が發達する。

農業に於て經濟的には獨立の體面ある生活をなすべき資本を持たぬが、而も天性技能を有せる

ものは、その社會生活に於て新發展の運命を作らんために先を争うて手工業方面の労働者となる。かくて従來農業生活に於て發達の見込のなかつたところのものが、この新職業に於て生活の大なる必要を充たすに足るべき發達をなし、一般社會の農業と提携して益々社會經濟の發達を見るに至る。勿論この場合には既に物品を交換する中央市場が地方的に現はれ、その商業的刺戟が農業や工業の新發達を促がすに至つて居ることは忘るべからざるところである。即ち商業の發達によつて各地方から諸種の物品が融通せられて一市場で賣買せられるために、人々は最早自己の不適當とする生産に従事する必要なく、得意とするところの生産に従事しその發達を圖るのみで一切生活の需要が進歩せる程度で満足せられるから、社會の凡ての産業が専門的に發達する。かかる事情の下に商業は社會上重要な職業となつて來るのであるが、兎に角初めて農業から手工業が分化した時代に於ては一般に農業及び手工業は奴隸とか體僕とかいはれる階級のもものが獨立を得る唯一の方法であるから、人々はその社會的地位を向上せしめんために競うてこれに従事し、社會に一階級を作るに至つた。我が國の古代及び中世の歴史を見てもこの事實はよく判るが、更らに進んで手工業が機械工業となり、農業が大農組織となるあかつきには社會の組織は全く一變する。

手工業では一人で資本主、経営者、労働者、及び商人を兼ねて居る。その生活に於て餘裕を有せる物品に加工してこれをその地方の市場に持ち出し、自己の技術を賣つて獨立生活の經濟を得るのであつて、營利ではなく、只家庭の經濟的獨立を得るに止まつて居る。身分相應の生活をなすべき經濟上の獨立と社會上人格の自由とを得んとするのがその目的である。故にこの制度の手工業では經濟の大なる進歩といふことはまだ見られぬ。凡てが小規模である。科學的知識を手工業に適應するに於ても、その範圍は極めて狭いが、これが發達して大企業となるときは全くその面目を一新して來る。大企業に於ては労働者の家族經濟とは全く獨立に經營する。即ちこの企業では自由の賃銀制度であつて、労働者の家庭に於て消費するところの物品を工場で作るのでなく、廣く全國の市場に於ける取引によつて製造し、社會一般の需要によつてその産額を定める。故にこの種類の企業に於ては商業及び交通の發達といふことは企業の發達と共に必然的に起らねばならぬところであり、同時に又貨幣制度の普及といふことも長足の進歩を見るやうになる。歐洲に於て特にこの市場交易の發達したのは前節に述べた都市の發達した頃からであつて、都市の商業によつて甲地に於ては有り餘つて不用に近いものも乙地に持つて往かれるために非常に高價に賣れるやうになり、商人に儲けが多い上に、甲乙兩地共又利益を得ることが多く、つま

り凡ての社會が産業の獎勵と生活の向上とを得るから、やがて十七世紀頃から所謂重商主義の發達を見るに至り、社會一般に商業を中心として産業交通及び文化の發達を見るに至つた。歐洲の貨幣制度がこの時に一變したことは勿論であるが、我が國に於ても最近の大企業と共に維新以前の藩札や籠がすたれて貨幣の統一的制度及び交通機發の發達となり、商業が社會生活に於ける最も重要な事業となつたことは人の知る通りである。家庭の手工業と大企業の製造業とはその規模及び組織に於て全く異なり、この方は凡てが専門的であるから科學的研究がその企業の基礎となり、社會組織に於ては自然學校及び研究所といふものが重要な地位に立ち、その研究及び人物養成を中心とするやうになる。今日の社會が即ちこれであつて、今日では凡て學校及び研究所が社會の大企業の原動力を養成する場所となつて居る。

近代の生活では學校及び研究所が社會組織の理想であると共に、凡ての企業が科學的研究的であつて少しも無駄がない。凡てが合理的に企業せられ製造及びこれに伴ふ一切の企業過程に於て労働の分化と合成が完全となる。随つてその製造費が手工業に比較するときは非常に安價である上に均整であつて實用に適するから、廣く市場に行き渡り、大なる勢力を以てこれを占領するやうになる。随てまたその間に大商人が起こるやうになる。このために近代になつて社會組織が一變

し人々の生活状態の急激に變化したこと吾々の到底想像も及ばざるほどである。廣大なる社會的機械作用によつて如何に生産及び分配が大規模で行はれて居るか、殆ど想像以上のものがある。工場も市場も發達せる交通手段によつて幾重にも結合し、社會全體は全く需要供給の一大循環系統となつて居る。人間は機械を作りその機械によつて發達するといふが、近代に於ける吾々の生活ほどこの事情を實際に於て大規模で明瞭にしたものはなく、社會組織を根本的に改革したものはない。

一體人類は身體の構造上自然的に機械を使用し、これによつて生活の能率を發揮するやうに出來て居る。既に一言したやうに元來人類が他の動物に勝つて進歩して來た所以は、第一その身體構造が他の動物に勝りその直立歩行するために手の使用が自由であるといふこと、頭腦が長足の發達をなしたといふことに由る。人類の手が動物の手と異なつて運動が自由である上に、機械を使用するに堪へるだけの構造を有して居ることは人の知る通りであるが、これは直接直立歩行する結果として生じた恩恵である。なほ直立する結果として生じた大なる恩恵は頭蓋骨の發達である。匍匐する動物であるときはその頸は足と直角に前方に突き出るから、重量のために頭が餘り大となることが出來ぬけれども、直立するときは垂直に上方に延びるから、比較的到大なる

重量の頭を平氣で支持することが出来る。随つて人類の頭は動物の頭に比較して見るときは非常に大きく、大脳は長足の發達をなし、人類の知識は動物に比較するときは長足の進歩をして居る。人類は動物の有すること能はざるところの科學を有し、又その科學の科學として哲學を有して居る。動物の知識と人類の知識とは決して比較になるものではない。全く範疇を異にせる大知識である。今日吾々が大機械を發明し使用するといふことは、この大知識の働きによつてその自然的恩恵を幾百千萬倍、否、幾億萬倍にも發達せしめたものである。古代の人類も既に簡單なる器具を使用して居つたが、近代生活の機械となるときは自然の大なるエネルギーを活動的體系として自由に運轉して居るから、その力の大きなること器具の幾億萬倍であるか全く測り難きものがある。人の體力は約二十分の一馬力であるから、自然のまゝでは知れたものであるが、機械を使用し殊に大機械を使用するためにその體力は測り知るべからざる程大なる力の體系となつて働くことが出來、殆ど自然の無限の力を以て働くことが出来る。一人の運轉手が機械の運動を調節するために大機械が運轉して居るのを見ればこの事實はよく判ると思ふが、實にこの大機械の使用ほど人類の體力を擴大し、その生産能力を増進するものはない。

現代生産の大量生産は全くこの大機械の生産力によるものであるが、この機械的生產に於ては

大量の上に正確である。凡ての製品が齊うて居る。機械の製造工業に於ては吾々人間の手のもつて居る無数の官能は分業的に分離せられ、各官能は特にそのために作られたる機械によつて營まれるから、自然その力の強大なること及び仕事の迅速且つ均整的に多量なる點に於て長足の進歩をする。この點に於て今日の機械労働がその能率を高めて居ること全く想像以上である。古代に於ては全くかゝる利益はなかつた。人々は只小規模の器具を使用するのみであつた。併しこの器具の使用だけでも人間の生活能力を増進したこと實に驚くべきものがあるが、如何にも小規模である上にその運動及び活動の源泉となるところの力は依然として人間の手の力であるから、要するに器具では人間の手の力を助ける程度のものに過ぎぬ。随つて器具使用のために人類の得るところの活動能力といふものは知れて居つたが、現代に於て大規模の機械が發明せられ而もその動力として自然の力が使用せられるから、この機械は無限の力で間斷なく運動する。その結果近代の機械工業に於て生産能力を増進し、物品の市價を低廉にしたこと全く想像以上である。

加之、一體この大量生産の機械では、只或る仕事に對してのみ働いて居る機械を結合してこれを大なる新機械の一部分となることが出來、單獨の機械では偶然的に有害なる結果を生ずるものまでも他の機械との結合的活動によつてこれを有益なる結果の活動に轉換することが出来る。單

獨機械では無益有害なる副産物として廢棄して居つたものでも、新機械の結合によつて之れを有益なる生産物に仕變へるといふやうな例はよく見るところである。コールタール工業を見ればこの事實はよく判る。曾ては石炭をむし焼きにしてコールクスを取つた残は棄て、居つたが、今日進歩せる工業ではその残滓からコールタールを製造し、又その残滓から石炭酸もとれば香水も取り、最後の残滓から有益なるケレオソートを製造する有様である。進歩せる工業の體系的組織では一つも無益として棄てるべきものがない。随つてそれだけこの體系的製造工業は有益であるから、現代では日を追うて機械的企業が大規模の體系となり大量の上にも大量生産となつて居る。

加之、今日に於ては一企業の機械活動がかく結合的體系となる上に社會全體の交通機關の發達によつて各種の産業が社會的に堅く結合せられ、所謂社會的機械作用によつて一聯合體系を作らんとする傾向が次第に著しくなつて居る。現代の企業界に於ては只或る種類の企業内に於てのみ體系的ではなく、社會全體に於て廣く體系的である。社會の企業といふ企業、産業といふ産業は凡て結合せられて一活動體系となり、全く *social Machinery* となつて居る。随つて現代に於ける商業及び交通の發達といふものは實に驚くべきものであつて、今日では獨り國家内に於てのみでなく、國際的に商業及び交通が發達して世界的に生活の需要及び供給を圓滿にして居る。ロン

ドンのローヤル・エックステンチが英國の殷盛を語るに足るべき大市場であることは既に述べたが、實にこの世界的樞軸作用に於て交通及び商業貿易の一大體系の活動を作つて居る中に於て、有爲なる國民の機先を制する大商業がこの世界的活動の中心となり世界中に於ける凡ての金融及び資本の中心勢力となつて居る。戦後の世界に於てはこのロンドンの外に米國のニューヨークが大中心的勢力となつて居ることは人の知るところであるが、今日では世界の有爲なる商業家はこの體系中に入り出してその活動要素となり、少くとも或る取引に於ては自己を中心としてこの全活動體系を自由に運轉せしめて居る。自己の或る資本を中心として世界の全資本を運轉せしめて居るのであるが、勿論かゝる世界的商業及び交通貿易の奥には曾て見ることの出来なかつた大工業がある。英國のロンドンの商業取引の奥にマンチスターの工業があるやうに、各地方に於ける商業取引の後方に世界的の工業があつて、曾ては棄てゝ省みなかつた物品からでさへも文明生活に最も必要なる物品を作るといつたやうな經濟的方法で大量生産の製造をやり、自然を幾百千倍の經濟價值に變へて居る。而して今日の社會組織では既に述べたる如くこの大量生産の工業の策源地として學校及び研究所を設け、その訓練及び研究の進歩によつて凡てを科學的合理的に進歩せしめんとして居る。この意味に於て今日吾々學校及び研究所に關係するもの、責任は極

めて重大なるものであつて、吾々の研究及び訓練の進歩が一々世界經濟に影響する實狀にある。意味ある研究であれば製圖に於ける一線の引き様、試験管に於ける一寸した反應の變化も世界の經濟に大變動を起こし、人類の生活に無限の新らしき幸福を與へるに足るものである。余はこの點に於て學生諸君の深く自重してその研鑽を重ねられんことを希望して止まぬ。

さて以上述べたるところによつて略ぼ今日の世界的商業及び工業の發達を窺知することが出来ると思ふが、實にこの世界的商業及び工業の發達によつて人類がその生活の需要及び供給に於て大なる満足を得て居ること想像以上である。併しそれだけ又他方から顧みる時はこの社會經濟の大發展に伴つて不幸の種を蒔かぬでもない。以下少くこれについて考へて往かうと思惟する。

外ではない、この大規模の産業に伴ふ極端なる資本主義の發達はれである。既に述べたる如く現代の産業は凡て大規模の機械的企業であつて、規模を大にすればするほど有利である。隨つて現代の産業はどうしても大資本の運轉に待たねばならぬ。工業に於ても手工業時代に於ては資本といふほどの資本は要らぬ。農業によつて得るところのものに只個人的に人工を加へて手工品とするのみであつたが、機械的産業に於ては全く一躍して大資本の運轉に待たねばならぬやうになつた。機械の購入、工場の設置、職工の雇入、原料の仕入及び製造貨物の市場への輸送、これ等

の事業は凡て大資本を要するのみでなく、なほその大資本を合して事業を體系的に大にすればするほど有利であるから、凡て現代の機械的企業はいやが上にも大資本主義の經營となる。而して社會も國家も亦この外その富強を致すべき途がないから、現代生活では機會あることに資本保護の法律制度が廣く社會に行はれるやうになる。こゝに近代の大量生産の機械工業が社會に莫大なる利益を與へると共に、その足下から又資本家の横暴及び労働者の苦痛を生ずべき病弊が現はれて來る。

勿論機械的企業では労働が必要であつて、昔の奴隸的階級に比較するときは労働の地位が近代では著しく向上した。併しこの奴隸經濟から自由經濟となり、機械的企業の大規模の産業時代に際して直接必要を感じられたるものは労働力ではなく、資本であつたから、新社會に於ては労働者に比較して資本家は非常に有利の地位に立ち、殆どその全企業の利益を獨占するに至つた。只或る工場や市場のみでなく、社會全體の企業組織が資本家の手によつて運轉せられ、その結果今日では資本家はますます大なる資本家となり、社會的機械作用を通じて全社會、全國民の資本がその手に集中せられるの觀を呈するに至つた。今日では大資本家は坐して天下の富を集め、その富は又富を産むから所謂幾何級數を以て富を増加して居る有様である。如何に贅澤なる生活をし

ても生活に費す銀はさう無限であるとはいへぬから、利益を以てその生活費用を支辨して餘裕ある資本家は次第に富を蓄積するやうになり、社會に於ける貧富の懸隔が益々著しくなる。

併し只貧富の懸隔が著しくなるといふのみでは社會的問題は起り難いが、大體今日は自由經濟組織であつて、社會に財力以外に經濟的消費上に何等の制限もないから、彼れ等は無遠慮に驕奢な生活をし勝ちであるが、人の知る如くこの傾向は今日米國に於て最も著しい。一例を擧ぐれば同國の或富豪がその幼兒の玩具たる例のガラ／＼に八百弗の金を投じ、愛娘の初見合の舞踏會で五十萬フランの金を費ひ、十二萬フランをその會場の床にふりまく花に費したといふ話である。これは最も極端なる例ではあるが、今日では錢の使用に何等の制限もないから人々は社會の不快を買つても顧みるところなく奢侈に耽らんとする。これでは貧民階級の反抗心がたかぶり、社會的に兩者の間に大なる溝渠を築くといふことは止むを得ぬところであつて、無遠慮なる奢侈の中に養はれたる驕慢とみじめなる生活の下に養はれたるひがみ根性とは兩階級を分離闘争に導くのみである。この社會的弊害についてはなほ後に論ずるが、經濟上から見ても容易ならぬものがある。資本階級のものが奢侈に耽るから國民經濟上非常に悪影響を生ずる。即ち彼れ等は金錢にかまはず奢侈贅澤品を欲するから、企業家は彼れ等の慾望を當てにして生産費が高くなるに構

はす奢侈品を製造する。その結果自然社會の一般的生産力が減退して國民の一般的生活の必需品の製造費が騰貴し、一般國民が高價の物品を購買消費せねばならぬやうになる。随つて一般國民の生活が困難となる。資本家が自分の金を自分で使用するのであるから、どうしても自由であると考へるかも知らぬが、その奢侈的行爲は一般國民に迷惑を掛けること多く、無産階級のもは彼れ等にかゝる贅澤をさせるために働き、而して彼れ等が贅澤するために益々物價が騰貴して人は日々生活の困難に陥る。

併し吾々と雖もすべての意味に於て今日資本家階級の人々に對してその奢侈贅澤を止めよといふのではない。或る程度の奢侈贅澤なれば社會の進歩のために必要であることを認める。一體人間心理の微妙なる作用からいふときは社會の人々は生活の自然に對して直接的需要をもたぬでも、感覺や貴族心に對して魔力ある珍しきものであるときはこれにその注意を奪はれるものである。文明に對する自然的誘惑はこゝに見られる。第一自然がその産物によつて人類を無限の勞働に誘うて居るから、これまでも社會に文明の發達といふことが見られたのである。礦物界に於ては金銀寶石、鐵銅硫黃といふやうなものは人類を誘うて新領土の發見や新工業の發達を促さしめて居るが、無數の人的活動は人類社會ではそれ自身單獨に起こるものではなく、何時もかゝる

企業と連續して起こつて來るのである。植物界はその食料品の産出によつて夙に人類に農業及び商業の發達を促し、就中、砂糖珈琲、茶及びその他の美しき食料品は人類に大なる企業的精神を發達せしめて居る。動物界に於てはラッコやオットセイまたは鯨等の海獸ならびに諸種の陸上動物の温き毛皮は寒き地方の人類に勇敢なる企業的精神を養成し、又蠶の繭はあらゆる階級の人々に養蠶と商業との發達を促して居る。これ等の例によつても判るやうに人類の生活からまつたく贅澤品を去るときは文明は進歩するものでないから、人類は如何なる時代に於てもその製造を直接間接に奨励せぬことはなく、科學的分析によつて生活の不必要品を除き、只必需品をのみ製造する現代經濟の眞中に於て實は贅澤品はどしどし製造せられて居ることは人々の知るところである。人類生活の眞理からいふときは所謂必要が發明の母であるといふことは、生活の最下級の必要についていふことではなく、多少の意味に於て贅澤の必要についていふことであるのは吾々の注意すべきところである。

かゝる點から見るときは余は或る極端なる人々のやうに人類の社會から凡ての贅澤品をとり去るといふやうなことには賛成せぬ。随つて經濟に餘裕ある資本家階級が或る種の贅澤なる生活をするといふことは強ち咎むべきものではないと思ふ。社會の沈滞せる文化を刺戟し保守的氣分を

新鮮にする範圍内に於ては個人に於ても國民に於ても贅澤といふことは必要である。否、贅澤が必要であるといふよりも余はこれを進歩の刺戟をもつ文化生活が必要であるといふ方が適當であると思ふ。歴史の一般的眞理にも注意すること能はず、時勢の如何なるかをも洞察すること能はざるところの頑固なる贅澤排斥論といふやうなことは吾々の傾聴すること能はざるところである。吾々はかゝる場合に當つては常に鋭敏なる觀察を以て一般に歴史の進歩と現在の時勢とに注意し、歴史の眞理一般を具體的に現在の生活事情に適應せる點において生活程度を決定せねばならぬ。なほ一步進んでいふならば、この歴史の眞理一般から現在の特殊の生活事情を規定し、これを以て唯一無二の歴史的発展の過程とする點に於て現在の文化的生活の程度を決定せねばならぬ。随つて吾々は現在經濟的に如何なる消費をして居るかといふことよりも、本來歴史的創造の個性的文化生活をして居るか否かといふことが重要な問題であつて、吾々はこの個性的文化をもつならば、如何なる生活も贅澤の意味はない。個人に於ても國民に於ても常に歴史的進歩の意味ある道德的睿智の生活であるといひ得る。随つて何が贅澤であるかといふことは個人によつても國民によつても一概にいへぬことである。贅澤といふのはかゝる個性的文化の創造もなく、時代も知らねば歴史も知らず、只先進文化國民の跡を追つて無見識に奢侈の生活をなし、金錢を浪

費するが子供の教育のためにもならねば大人の仕事の能率も上らぬやうな場合にいふことである。勿論かゝる場合には何の定見もないから只享樂の生活を追うのみであり、金のある限り享樂生活をする。その一例を擧ぐれば家を建てる場合に於ても生活の享樂といふ事を主眼として堅牢とか耐久とかいふことは又これを顧るに至らぬから、此度のやうな地震などに遭ふときは一とたまりもなく將棋倒に倒れる。おまけにかゝる場合に對する注意を拂はずして木造の家屋に不用意に瓦斯をとりつけてあつたから、倒れるとその瓦斯の火から火事が到る處に起こるといふ有様であつたのである。丁度晝飯時であつたから大抵の家には瓦斯を使つて居つたが、その點火最中に家が倒れたのであるから自然火が四方に起こつて市内に擴がつた有様である。この一事を見ても今度の震災には吾々の反省すべき問題が多い譯である。これまでの吾々の歴史には改良を加ふべきもの、非常に多いのを發見するが、一般に社會がかく贅澤に走り、享樂に傾いて居る場合には、社會に虛榮心が刺戟せられて居るから、大なる流行の力を以て人々は生活の必需品をすて、も贅澤品を求め、從て金錢を消費する割合に健康とか發達とかいふものが得られなくなる。飲食衣服が不經濟となるのみでなく、建築の如きも虛榮享樂を目的とするから基礎工事などには何等の注意をも拂はず、一寸とした地震や風嵐にも破壊するを免れぬやうになる。今度の如き大地

震に遭ふときは一たまりもなく倒れて終ふ上に、又非常用の防火設備がないから瞬く間に焼けて終ふ。社会の人々は全く足下に大危険が伏在して居るのに気がつかずして只享樂をこれ求め虚榮をこれ追うて往くのである。勿論かゝる場合には製造家は又この氣分に迎合して贅澤品の製造に大資本を投ずるから自然國民の日常生活必需品の製造に資本の缺乏を來たして、製品の不足から騰貴を見るやうになり、一般社会の生活困難を一層高めて往く。昔、ローマ人はパンと演劇とを覺めて又他あるを知らなかつたが、今日も社会の人々は食ふこと、贅澤、生命のある間は贅澤をすといふことより外又他あるを知らぬといふやうな傾向を生ずる。

かゝる場合に於てこの贅澤を防止して國民に正常なる生活の途を踏ましめねばならぬことは斷る迄もないところであるが、偕、如何なる程度のもを以て贅澤とするかといふことになるときは國民の文化の程度によるから頗る六ヶ敷い問題である。これには歴史の正常なる發達殊に國民の歴史の正常なる發達について明晰なる理解あるを要する。遅れた歴史の見方を以てすることは危険であるが、兎に角近代では自由經濟であつて大量生産の大工業は自然資本家の資本を増加するに便利な状態にある上に從來國家が法律の力を以てこの資本家を保護して來たから、今日の社会では富は著しく資本家に偏して來た。随つて自然資本家の贅澤といふことが見られるに至つ

たが、一般社会のものもこれに倣つて自然贅澤を覺えて來た。無益に金錢を使つて享樂生活を食するやうになつて來たから、社会の風儀が素れ勝ちになると共に生活が困難に陥つた。かゝる間に於て近代の經濟的文化生活の恩人の一人たる機械労働者は一體如何なる生活状態にあるであらうか。これについて一瞥することは又最も必要な所である。

さて既に述べたる如く今日の大量生産の大企業に於ては機械及び工場に大資本を投じて居る。随つてその機械を休ませるといふことは不利益であるから晝夜の間斷なくこれを運轉する上に、一體その作業は大系統の分業であるだけ個々の點から見るときは全く單純化する一方である。随つて労働者を以て單純なる機械作用を反覆する非教育的職業の無趣味なる生活として終ふ。全體の機械作用が如何うなつて居るか普通の労働者は全くこれを知らぬ、只極く簡單なる方法によつて單純なる一分業に従事するのみである。而も大概日光の不通なる塵埃の多き不潔なる工場に於て眞青になつて初めから終りまで簡單なる一作業を繰り返しつゝあるのみである。是では知識が進歩せぬ上に健康を害する。勿論古代にも非叡智的職業のために人類の知的地平線を狹隘にするといふ恐れはあつたが、近代の機械的工業に至つてはこの弊害が一層極端である。機械的事業は近代經濟にとつて唯一の恩人であつて、手工業からこの工業に移つたよめに我が經濟界產業界

といふものは長足の進歩をなし、一般人類に無限の幸福を將來したことは既に十分述べた。ヘー
ルマンの發明した紡績機械を使用してレース糸を紡ぐときは普通の製綿一ポンドが數百ポンドの
高價なる練糸となるが、この例でも想像出来るやうに近代の機械的大量生産が社會の産業及び經
濟に大進歩を促し、人類一般に無限の生活幸福を與へ、随つて又資本家に莫大の富を蓄積せしめ
た。併し又その裏面に於て機械労働者には莫大なる生活の不幸を與へるやうになつたことは忘る
べからざるところである。過去に於ける手工業時代に於てもその分業が發達するに随つて労働者
の知的地平線を狹隘にし、多數の労働者の教育的發達を脅迫したことがないではなかつたが、そ
れでも手工業時代に於てはその職業は色々の知的範圍の職業を包含するを得たから、今日の機械
工業に於ける分業の單純さとは到底比較にならなかつた。手工業では原料から仕上げまで大概一
手であるが、その中には色々の程度の加工が必要であつて諸種の知識を要求した。手工の變化的
過程によつて労働者は或る連續的進歩の工業的知識を得られる。使用するところの器具はこの勞
働者に對して身體の發達や若しくは態度性格に對して教育的影響をあたへるから、労働者は器具
の奴隸といふよりも却つてその器具によつて自由活動の教育的影響を受けるを得、製造品の輪廓
の中に知的工夫の活動及び發達を示すを得る。併し近代の機械的労働となるときは事情は全くこ

れと反對であつて、労働者の手は直接その製造品に觸れることなく、殊に甚だしき場合に於ては
労働者の全く知らざるところの方法によつて製造品が上成せられる。随つて労働者は全く一部分
の機械的分業に與るのみであつて、全體の製造過程については毫も知るところがない。製造品に
よつて自己の知力の輪廓を示すといふやうなことは全く思ひも寄らざるところである。随つて機
械的労働の單純は教育の效果からいふときは好結果を生ずるものではなく、人の手より聰明なる
發明及び工夫を奪ひ去り、凡ての生活労働を單純なる機械作用に化して終ふ。只發明者が機械製
造の初めに當つて諸種の知力を以て工夫するのみであつて、労働者となるときは全く非叡智的に
單純なる機械的労働をなすに過ぎぬ。その労働過程が如何なる體系的工業の一部分であるか、ま
た如何にして製品が出來上つて來るか全く知るところがない。前に述べた労働の種類の教育的發
展に對する影響から考へるときは、この機械的労働者ほど惡影響を蒙つて居るものはない。彼れ
等に於ては教育的發展の可能が全く機械作用の單純性の中に否定せられ、叡智的輪廓の大なる性
格などは到底これを求めるに由もない。彼れ等の労働は意匠的目的の意識なくとも活動し得べき
機械的熟練のみである。随つてその労働に伴ふ知識といふものは何處までも單純化するのみであ
る。職業は人間を實際的に訓練する唯一の教育であつて、人は職業をもつから生活の明晰なる理

解を得られるのが本来であるが、これでは職業は却つて教育を害するのみであつて、性格の内容は自然單純となり、趣味もなく信仰もなく、只物質的快樂と休息とを要求する劣等なる性格となる外ない。

加之、この機械的工業の一般に非衛生的なるに至つては實に驚くの外なきものがある。日光の不通なること、通風の不完全なること、一般に掃除の行き届いて居ないこと、殊に綿糸布工場に於て塵埃の多いこと、これ等は一として人の健康を害はぬものはなく、殊に臭氣の満ちた蒸し暑き空氣の中に塵埃や綿花の埃り、小砂利などの交はつたものを吸入するといふことは最も結核病を誘發し易き原因である。工場は物理的にも精神的にも極めて有害なる状態にあるから、永く工場で働くときは非常な疲勞を覺えて来る。大抵の職工は一日勞働すれば極端に心身の疲勞を來たすから、方法を選ばず只休息をこれ求める。勞働の後には所謂なりも風もかまはず、怠惰なる安逸を貪るのみである。身體の疲勞と神經衰弱とを來たすから、若い職工などは性慾の病的刺戟によつて規則のやうに墮落の生活に走つて往くとともに、永く斯かる不健全なる生活を續けるときは申合せたやうに疾病に襲はれて死期を早める。今日でも疾病は生存の淘汰上最も有力なる動因であるが、彼れ等は食ふために機械勞働に従事せねばならぬ、而もその勞働は無慘にも彼れ等の生存を淘汰して往くのである。

勿論今日は商工業の時代であつて、生活は凡て世界的である。極く隔られたる田舎の不便の地にあつても世界の各地に生産する物品によつて生活し、随つて農業も最早以前の地方史的時代の農業と異なつて世界的農業となり、凡て世界的科學的である。生活に於ても販賣に於ても世界的である。随つて先祖の家に生活し、先祖からのこされたる生産によりて生活しながらも先祖の家や故郷を以前のまゝの意味で重んじ、これを固守せんとするの意志はなく、人々は自由に職業を求めて他郷に出でんとする。曾て人類が農業を發見した時代に社會の人々は先を争ひてこの農業を營み以て生活の安全を得んとした。又その後手工業を發見した時代に農家の資産なきものはこれに走つて獨立の生活を得たが、今日は又自由經濟を楯に人々は故郷へ何の未練をも残さずして他郷に出て行き、新職業を求める。併し事實をいへば今日多くの人々は田舎から都會に向つて流れ込むけれども、これは都會生活の誘惑によるものであつて自己の適當なる職業を發見して後に移住するのであるから、多數のものは只都會地に來れば何でも職業があり贅澤が出来るものゝやうに考へて漠然都會地に浮かれて出てくる。随つて金を費つた揚句適當なる職業を發見せず、往きつくばつたり不適當なる職業に就いて往く。随つてその新職業に於て失敗するものが多く果

ては單純なる日傭労働者となる終ふ。これまでにはならぬでも只辛うじてその日の生活を送り得る程度の職業につき、少しも餘裕がないから生活の向上發展など、いふことは考へられぬ。子供の教育など、いふことは凡て放棄して終ひ、その日暮らしの自暴自棄の生活に陥る。又技術にも進歩がないからその中に何かの機會に淘汰され解雇されるといふことになり、全く路頭に惑ふやうになるが、その中でも機械工場に於て働いて居つたものになるときは、既に述べたる如く單純なる技術の機械化によつて轉業が六ヶしくなるから愈々困る。政府や社會ではかゝる失業の場合に對する救済策として、職業紹介所といふやうなものを設けて彼れ等の世話をする。我が國の官廳に於ても中央及び地方共社會局又は社會課といふやうなものを設けてその世話をするやうになつて居るが、併しかゝる外科的治療だけで彼れ等の大なる社會的疾を治癒することが出来ぬことは勿論であるから、近代に於てはこの方面からも困難が増加して居る。生活の荒廢、子弟教育の放任、社會に對する不平、野卑なる慾望満足、これ等の忌むべきものが彼れ等の身邊を襲うて居る。國民の品位とか歴史とかいふものはこの邊りから壞れて往くことが多い。彼れ等の生活は自暴自棄に陥る上に、社會の文化及び歴史の進歩に對する理解なく、文明的生活の利益よりも寧ろその弊害のみに目をつけて往くから、不平は次第につつて來るのみである。子供に

も幼い時からこの不平を教へて往く。彼れ等は心から子供の教育に注意せず、會々注意せんとする親心を有つて居るものがあつても一家團樂の家庭生活をなすべき時間を有たぬ。會々一家の者が全部集つても工場に於ける労働に疲勞して終つて居るから、實際子弟の教育の世話などをする餘力がない。貧乏者の子澤山といふことは昔からあるところの眞理であるが、彼れ等は多くの場合に子澤山であるに拘らず優種學から見て子孫の繁榮を圖るべき生活條件なるものは一もこれをもつて居らぬ。只多數の子供を産み棄てにするのみであるから、品質の劣等なるものが次第に社會に増加する。かくて社會は教育や諸種の設備によつて國民の發達進歩を圖るが、その裏面に於てこの進歩を裏切るものは澤山に出て來る。吾々の注意すべき問題は正にこゝにあるを考へねばならぬ。

尤もかゝる困難の種となる労働者はその數からいふときは全國民に比して非常に少數である。現に我が國などに於ても官廳に使用せる職工は大正九年度に於ては十七萬七千人弱であつて、民間事業に使用せる職工は大正八年度に於て約百五十二萬人であるから、全體として約百六十九萬七千人ばかりである。同年に於ける本國全人口は約五千七百二十萬であるから、人口の比例をとるときは約三十五分の一にしか當らぬ。論ずるに足らざる程の少數であると考へるものがあるか

も知れぬが、これは工場に働いて居るものだけをいふのであつて、今日我が國の社會組織では工場に働いて居なくとも多數の無産階級の労働者が居る。露國の農民、支那の苦力ほどでなくとも兎も角も裸一貫で働いて居るところの貧民は我が國に於ては歐米先進國よりも非常に多數である。我が國では急激に國家の富を増加したけれども、その富は歐米の富に比較すれば非常に少額に止まつて居る上に、一部少數の資本家に分たれて居るから、國民一般は非常に貧乏である。おまけに一體我が國ではなほその社會思想に於ても法律的制度の上に於ても世襲的家族制度の痕跡が多く、財産は常に長男の系統をもつたものに傳はつて次男以下のものは裸一貫になり易い傾向をもつて居るから、かた／＼無産階級の労働者の數は我が國に於ては案外に多い。全國人口の大多數を占むる農家の子弟は多くこの無産労働者であり殊に最近農村の疲弊につれてその數を増加して居る。随つて都市の不健全なる工場労働者間に養成せられたる諸種の忌むべき思想はこの現代生活の困難に乗じて地方の農民に傳染するやうになる。我が國の現在は決して樂觀を許さるべきものではない。

諸、以上余は近代の大量生産の機械的工業による社會生活の發達について述べたが、勿論この發達には商業の共働がなければならぬ。實に現代では大工業と共働するに大商業を以てし、凡て

の産業を根本的に改革し人類の社會生活に於ける幸福を急激なる速度を以て増加した。試みに暫らく瞑目して明治維新前の我が國の狀態を追懐してこれを今日の狀態に比較するときは、社會のこの變化の餘りに大なるに驚くの外なきものがある。併しまたそれだけ近代生活に於ては資本主義が強くして生活の利益及び幸福は一部の資本家の手に握られ多數のものゝ生活を以てこれに比較するときは、その差異があまりに顯著であつて、動もすれば人をして近代生活の大資本主義の經濟は只一部の人々をのみ利して居るのであるといふやうに感ぜしめ、文明生活の恩澤を以て社會の極く少數の階級のものゝみの受け得るところであつて、多數のものはこれに與らぬといふやうに想像せしむる所がないでもない。近代生活では生活の幸福が急激に増加して居るに拘らず、富の分配が不公平であるために、その社會生活の幸福が一部分の資本家に限られ、社會一般のものに比較的はこの幸福の恩恵に浴して居らぬ。過去の時代に於てはこの資本主義及びこれに伴ふ富の分配の不公平といふことは止むを得なかつたにしても、今日に於ては明らかに一個の社會的缺點である。さて吾々は今日これを如何に改良すべきであらうか、余は以上述べたる結果この問題について考へねばならぬが、これを考へるに先つて法律及び政治は元來如何なるものであらうか、これについて攻究しそれから徐ろにこれを社會問題として公平に考察して往かうと思ふ。

第二章 政治と歴史

一、法律の一般的性質

先づ法律思想に於て兩方面を代表するものとして希臘人及びローマ人の有つて居つた法律思想を批評し、それから法律の一般的性質に論及しようと思ふ。

一口にいふならばローマ人の法律思想は權利本位なるに對して希臘人は義務本位である。而して希臘人がかく義務本位の法律思想を抱くに至つたのは、彼れ等の民族的心理が個人よりも社會を重んずる性質をもつて居つたのと、當時の政治的社會的事情とに由るものと思はれる。ドリオン種族が東方から今の希臘半島に流れ込んでユーロタス河畔にその定住地を定めたときは、四方の蠻民に對して反抗しながら自衛の途を講ぜなければならなかつた。随つて彼れ等の社會では全體の保存のために個人に對して凡有犠牲を要求すべき必要があつた上に、彼れ等の社會を重んずる性質が國家を個人以上に置いたから、彼れ等は國家を以て市民に對してあらゆる犠牲を要求すべき權利を有し、個人は國家に對してその要求するところの犠牲を捧ぐべき義務あるものとなし

法律によつてこれを規定するのみでなく、なほ細心なる教育上の注意を以てこの法律に規定するところの國民を養成せんとして努力した。全く國家の存在及び繁榮のために彼れ等は市民に大なる義務を課するを辭せなかつたのであるが、勿論これには社會及び國家の形而上學的實在の考へが根柢をなして居ることは斷るまでもないことである。

希臘人の立法的生活に比較するときはローマ人の立法的生活は反對の方向に向つて進み權利を承認するに努めて居る。希臘人の立法は何處までも義務主義であつたが、ローマ人には權利思想が発達して居る。希臘人は元來社會を重んずる國民であつて、彼れ等は社會なくんば生活を理解すること能はざる國民であつたが、ローマ人はこれと異なつて人格の本來的權利を建設するため社會を要求した。權利絶對に關する考察はローマ人には何よりも先きにその念頭に浮んだものである。彼れ等の考へによるときは、個人の權利は何物からも與へられるものではなく、人格の本來有するものとして凡てのものによつて承認されねばならぬものである。併しかゝる權利を何等の修飾もなく實行するといふことは不可能なるところであるから、人類は社會を構成してその生活中に於てこれを實行するものであるとした。彼れ等がこの權利思想を養成するために細心なる注意を拂ひつゝ國民の教育に従事したることは、希臘人が市民に義務思想を養成するためにそ

の教育に従事したると熱心に於て相似て居るが、この兩國民がその法律に對する解釋に於てかくも異なり兩極端に走つて居ることは、古代法律界の最も著しき現象であるといつてよい。かくて近世生活に於ける法律思想の發達に對して彼れ等は共に大なる貢獻をなして居るが、その中でも希臘人は社會的生活の哲學的思辯に走つたから、法律思想及びその實際生活上に於ける訓練はローマ人には及ばなかつた。今日の法律に對する貢獻はローマ人を主とせねばならぬ。ローマ人は何處までも個人の權利を徹底的に考へ、法律的主體としての獨立を明晰にせんとした國民である。個人の權利は社會によつて承認せられるけれども、附與せられるものでなく本來所有するところであるといふのが彼れ等の法律に對する根本思想である。

併しこの思想は果して正當なる思想として承認するに足るべきものであらうか。これには多大の疑問がある。勿論希臘人の考へたるやうに吾々は本來義務を有するのみであつて、權利を有せざるものではない。さりとして又吾々は本來權利のみを有し義務を有せざるものでもない。權利も義務も共に吾々の社會生活に於て有するところの事實である。随つて吾々は公平なる立場に於て權利及び義務について考へるにあつては、自然的形而上學的に個人又は國家の實在を肯定する獨斷論的立場を去つて、吾々の社會生活に於ける事實としての權利及び義務その物の批判から考

察して往かねばならぬ。而して吾々はこの批判的立場に立つて考へるときは結局吾々は認識批判に於て、吾々の認識は經驗と共に初まるが經驗の作るところでないといふことを承認せねばならぬやうに、權利及び義務は社會生活と共に初まるが社會生活によつて作られるものでないことを承認し、法律の先驗説を承認せねばならぬに至る。以下順次これ等の點について考へて見よう。

一體吾々はその生活に於て權利なるものを口にするが、この權利は吾々の社會生活に於て或る人が他人に對して權利として有するのみで、他人がその或る人に對してこれを以て義務であるといふことを承認せざる時は、事實に於て權利として成立するものではない。吾々がその社會生活に於て個人の權利を承認するのは、同一の事件に對して他の凡ての人々が權利放棄の意志を表明する場合に限るのである。随つて權利承認といふことは同一の政治的社會の成員間に限られるのであつて、この社會以外に於て權利の成立を考へるといふことは全く想像すべからざることである。吾々は只この同一社會内に於て、或る人の權利とするところのものに對して自己の權利を放棄すべき旨を言明し、反面から見れば直接か間接かにこれを義務として承認するときに、その或る人の權利が成立するのである。随つて權利も義務も全く社會生活に於て生ずるものである。近代の學者中にもこの經驗的事實を無視して絶對的に個人の權利を承認すべきものであると説く

ものがないではなく、全くローマ人の人権神聖説を踏襲するものがあるが、彼れ等は單獨なる個人がどれだけ権利の主體となり得るかといふ點については少しも攻究するところがない簡單に權利神聖説からその實在を考へるのみであるが、社會生活に先ちてその實在を承認する點に於て科學的考察を省みざる獨斷がある。吾々は自然の力や疾病の流行、野獸の攻撃に對してその存在の安全を保障すべき權利をもたぬ。自然の吾々に附與するところのものは只能力とこれを使用すべき欲望とのみである。權利ではない。自然的欲望が權利となるのは吾々がこれを以て社會的に承認するからである。例へば或る流行病を撲滅するために案出せる藥品の專賣が個人の權利となるのは、社會がその專賣の權利を承認するからである。この社會的承認なく、或る個人の欲望を承認して他人が同種類の欲望を達すべきことを放棄するのではないならばその個人の欲望は權利とならぬ。吾々の自然的欲望が權利となるのは社會内に限るのである。社會内に於て人々がその相互間の交際によつて他人の欲望満足に尊敬を拂ひ、その目的貫徹の能力に對して權利たることを承認すると共に、直接若しくは間接に吾々自身がこれに對して援助的義務を承認せねばならぬ。随つて吾々の法律的生活では自然に有せるところの自由を社會的に制限すると共に、自然に有せざるところの自由を與へるところの新現象を見る。

吾々の共同的社會生活に於ては欲望の衝突が甚だ多いから、人々をして平和なる生活を送らしめ、共同的生活の相互的援助の利益を享受せしむるには、或る範圍まで個人の意志を制限しその要求を放棄せしめねばならぬ。尤もかゝる道德的制限及び權利放棄は主として私權の場合に起こるものであるが、公權の場合にも起こらぬではなく、現に國際聯盟會議によつて國家の武備及び平和運動に或る制限を與へ、國家の公權を放棄せしめたる例すらある。權利放棄は私權の場合にも公權の場合にも起こるのであるが、この放棄をなさしむべき拘束力は凡て社會的である。個人を以て單獨的存在のものとして拘束するのではない。全く社會の共同的平和幸福、その歴史的進歩に對する批判によつて共同的に生活の進歩を將來せんために拘束するのである。随つて權利及び義務の實際適用に於ては何處までもその社會的道德性の徹底に努めるべきものである。權利であるといつてもその行使が社會に迷惑を及ぼすものはこれを差し控へねばならぬ。權利義務の立法的制定及び政治的行使に於ては共にその社會性が如何に徹底するか、これが運用によつてどれだけの人々が共同的社會に生存し得るか、また如何にしてその享樂の根源を共同的進歩のために使用するを得るかといふやうな問題は常に吾々の考へねばならぬ問題であり、一口にいふならば社會的道德的努力によつて如何にして共同的に歴史の進歩を起し、人類の生活を幸福にするか

といふ問題は常に考へねばならぬ問題である。法律は穂積小博士もいはれて居るやうに義務を強行し權利を擁護するがこれその終局目的ではなく、終局目的は社會的生活の利益の保護増進にあるのである。

希臘時代の如く法律を以て義務の體系であると解した場合には法律のこの社會的精神を破つたことが随分多く、服従者の恩恵といふものは只これを要求するところの主權者の意志に求めるの外なかつた。かくて我が國の封建時代に於ても君主の不興を蒙つたものが忍耐強くその不興の解けるのを待ち、數年のみでなく時には一生の長き間に亘つて忍耐強くこれを待つて居る中に、その君主に死に別れたといふやうな悲惨な例も随分澤山あつた。これでは人類の法律生活に不都合の多いことは勿論であるが、權利を重んずる時代の法律となるときは最早かゝることはない。法律は凡て權利を主張する形式で制定せられる。併しそれでも君主の權利を主張する場合に於ては臣下の權利は無遠慮に蹂躪せられることが多かつた。併し人類の社會生活からいつて個人はかくの如く或る權力者の個人的意志によつてその利益や名譽を蹂躪さるべきものではなく、自己の利益と名譽とは自己の本來有するところのものとしてその獨立を承認さるべきものである。この點から見るときはローマの權利本位説が法學上に現はれて來たといふことは斯學の進化として吾々

の最も喜ぶところである。併しこの權利本位説に於ても法律本來の性質から見てなほ不完全のあつたことは既に述べたる如くである。眞の法律はこの權利本位説でもなければ又勿論義務本位説でもなく、この兩説を止揚せる社會本位説に於て見らるべきものである。

法律では何處までも個人の權利を尊重し、みだりにこれを蹂躪することをせぬ。併しそれかといつて又今日吾々の法律生活では個人の權利であるからというて社會の不利益を招くに拘らずこれを勝手に行使するといふことを容さぬ。社會の利益を侵害せざる範圍内に於てのみこれを行使すべきであるといふのが現代の解釋である。曾て權利の神聖を唱へ、社會生活以前に於て人格の有するものであるといふことを承認した所謂權利神權説の思想が専ら思想界を支配して居つた時代に於ては、權利である以上は社會の利益を侵害してもこれを行使することに何等の反對をも提出すべき正當の理由を發見せなかつた。併しこれは法律の元來社會的なるべき點から見るときは誤れるも亦甚だしきものである。個人の權利であつても社會の公安に害ある以上はこれを行使することを差し控へねばならぬことは當然である。進歩せる國民の民法では明瞭にこの點に關する規定を設けて居るが、一般に今日文明國民に於ては明文に規定あると否とに拘らず、その解釋に當つてこの精神を取るのが規則であつて、現に我が國の現行法に於てもこの明文はないけれど

も仍且この精神で法律の適用を司ることになつて居る。このことは所謂大審院立法によつても十分に證明されて居るところである。社會に於ける立法の根本的精神からいふときは、或るものが法律の保護によつて大なる利益を受ける傍らに於て、他の者が反對に不利益を蒙るといふことは最もよくないところであつて、法律は出來得る限り凡ての階級の人々が利益に均霑しつゝ、社會が共同的に繁榮し進歩するだけの秩序を作るものでなければならぬ。即ち法律はその根本精神に於て社會的互惠的でなければならぬ。一方のものが利益を受けること非常に大であるに拘らず、他方のものゝ利益を省みずその不利益を防禦するだけの法律の制定を見ぬといふやうなことは最もよくないところである。

これについて最近面白き一例がある。即ち昨年の大震災の際社會の大問題となつた火災保險金額支拂の経緯である。當時社會には保險金額全部を支拂ふべしといふ被保險者側の議論と、少しも支拂ふべき必要がないと言ふ會社側の意見とがあつた。これに相當社會の有名なる學者達が加つて議論を闘したから、社會に可なり大なる論戰が起こつたのみでなく、この論戰の内面に於て最も不幸なる人々から既に可なり深刻なる社會的運動が起こされたのであつた。所が法律の一般的性質としても又我が國の現行法としても決してかゝる極端なる一方にのみ加擔したる議論や運

動を起すことを許すものではない。若しかゝる一方の議論が他の暴力即ち民衆の暴力とか資本家の資本力とかいふものと合同して片手落ちの勝利を占めるならば、それこそ國家の大憂患である。吾々の立場から省みて憂ふべき現象が見えたから余は當時震災の臨時議會が開かれる前、十一月に當市の「貿易新報」でこれについて論じ、社會の公平なる反省を促したのであつた。法律一般の性質を示す例として多少参考になる時事問題と思ふから、左に特にこの點に關係した議論のみを摘録しよう。

(前略)……商法によるときは火災保險會社は火災による損害には支拂はねばならぬといふことであつて、これが通則でこの會社が成立して居るのである。併し會社から見るときはこれを文字通りに解して今回の如き不可抗力の天災による火災にも支拂をなさねばならぬとするときは、何時大天災のために不意の破産を食ふかも知れぬ。若し破産するときは火災を受けたものゝ十分の支拂を受けることが出來ぬのみでなく、火災を受けぬ被保險者は全くの損害を受けねばならぬ。かくては自然保險業その物をも危険にし被達を害するから、自然約款として天災による火災には支拂ふべき必要がないことを承認する。

併しこの承認は會社側の利己的行爲を達成せんとする目的のために利用せらるべきものではない

い。随つてこの約款による會社側の權利に對しても、かゝる行爲による權利行使を牽制すべき法律がなければならぬ。かくて初めて火災保險會社を設立すべき可能の一般的基礎を作ると共に、またその會社の事業をして社會や國家の公平なる立場から見ても人類の幸福、財界の安定のために貢献せしめることが出来るのである。我が國の法律ではこの會社側の權利を抑制すべき法律として公序良俗を害する場合に於ては會社が支拂を停止するを得ぬといふことになつて居る。即ち不可抗の天災による火災には支拂はぬでよいといふことを法律で承認しても、その支拂拒絶が社會の公安を害したり人類の幸福を阻害すると認むべき場合に於ては矢張支拂の必要を承認するのである。併しまたそれだけ被保險者が利己的便宜から會社の破産を起こして他の保險加入者に迷惑を及ぼし、社會一般の財界に悪影響を及ぼす範圍内にまで喰ひ込んで支拂を要求すること能はぬ事情にあることは勿論である。

かゝる點から見るときは今回の火災保險金問題の如きも只法律上の或る文句に拘泥して三百代言的の解決を下すべきものではない。上田貞次郎博士が過日火災保險問題について述べたところによるときは、この問題について法律家の中には目下二派の意見があるといふ話である。その一は法律に火災保險會社は火災による損害には必ず支拂ふべしといふ條章のあるのを楯にとり、

遮二無二支拂を主張するものであつて、他は反對に約款に不可抗の天災による火災には支拂はぬでよいといふ個條のあるのを楯として支拂不必要を主張するものがあるさうである。併しこれは双方共甚だしき見當違ひである。勿論法律上の明文は何處迄もこれに準據せねばならぬが、これと共に社會や國家の安寧幸福を考へ、公平なる態度によつて凡ての點から見ても大局を失はぬ範圍内に於てこれを解決して往かねばならぬ。なほ一步遡つて考へるならば吾々は國家が社會の幸福、財界の安定の上から火災保險業を認可しその法律を制定したる精神で現行法に準據しつゝ、解決を下して往かねばならぬ。随つて結局國家經濟の根柢に於て認むべき道徳が今回の火災保險金問題の解決に當つて活躍せねばならぬ筈である。

近代の法律の進歩によるときは權利であるからといつて社會に害あるを顧みず之を行使するをゆるさぬのは、正にこの法律の解釋に於て道徳的精神を尊重するに至つた結果である。我が國に於ても所謂大審院立法に於ては常にこの點に注意し、社會の進歩に鑑がみ法律の道徳的精神に着眼して進歩的解釋を試み固定的法律の道徳的進歩的活用に努めて居ることは人の知るところである。聞くところによるときは既にこの保險金支拂について訴訟を提起せるものがあるといふ話である。これに如何なる判決を下さるかはその時局上最も注意すべき問題であるが、恐らく大審院まで

持ち上げられるであらう。随つて被保険者や會社側の意見の如何に拘らず大審院がこれを獨立に裁定し、自ら制定したる法律をその精神に基いて自由に解釋せねばならぬ時機が早晚來るに違ひない。吾々は刮目してその日の來るを待ち、光榮ある大審院立法を見たいものと思ふ、

併し時局問題として今日既に解決を遷延せられて居るこの火災保險金問題を、何年かの後の大審院立法にまつて解決するといふやうなことは、被保険者の堪へ得るところでもなければ、又社會の黙つて見て居られるところでもない。今日の場合は矢張被保険者側からも會社側からも誠意を以て接近し紳士的態度を以て速に妥協的解決をなすべき時節である。併しその中でも問題の性質及び社會に於ける財界の地位からいつて、この際會社側が率先して誠意を披瀝し帝國國運の發展のため、時局解決のために一層の努力をなすべきは斷るまでもないところである。……(後省)

余はこの論旨から當時詳しくこの保險金額支拂問題を中心として社會問題復興問題等をも論じたのであつたが、その後山本内閣に於ても清浦内閣に於ても政府の取つた方針が大體余の主張するところと同一であつたことは非常に歡ばしい。時期が遅れた上に支拂金額が只三分乃至一割で保險金額に比して非常に少なかつたことは遺憾であるが、これは政府の補助が足らなかつたとい

ふよりも會社側の利益を貪つたことが原因して居るといつてよい。併し被保険者の中には二重に保險に加入して居つたものがあつたから、一割以上になつたものも少くはないと云ふ話である。因みに余の當時同論文の意見では三割程度の支拂が適當であるといふことになつて居るが、實は二割といふことであつたのである。實は同論文を起稿して全部これを一手に纏めて新聞社に手交したのであつたから終の方の部分が紙上に掲載せられるまでには約十日間も日數があつた。その間に於ける余の新らしき調査研究によるときは二割程度を以て適當とすると思ふたから、余は新聞社に往つて親しく二割と訂正したのであつたが、印刷の不注意から矢張三割となつて居つた次第である。併しこの何割支拂ふかといふことになるときは、最早政治問題であつて法律問題ではない。法律問題としては吾々は本來社會にかゝる保險法なるものゝ存在すべき理由を考へて現行法を最も進歩せる意味で社會的・道徳的に解さねばならぬのであつて、この法律の精神を貫徹するため現在の事實問題に面して如何にこれを解決すべきかといふことになるとき、吾々は法律問題から政治問題に入り、少くとも現在及び近き將來を考へた上で事件を具體的に判斷せねばならぬ。思ふにこの點に於て本係争問題については將來大審院は或る人々の訴訟に對しては十分明晰なる裁斷を下さねばならぬことであらうが、事件が大きいから非常に六ヶ敷きことであらうと思

ふ。

事件が小さいと明晰なる裁断も容易である。大正九年の大審院の判決には次ぎの新例がある。或る人が妻子を残して渡米したが食へるだけの金を送つて寄せさない。よつて妻は他人から借金して生活を續けた。所が民法第十四條によると妻は夫の許可を得ずして借財するを得ぬとある。貸主が返金を要求したとき、妻はこの民法を楯にとつて契約を無効としてその返金を拒絶した。つひに裁判となつたが、裁判官は「夫が出稼ノタメニ妻子ヲ故郷ニ殘シテ遠ク海外ニ渡航シ、數年間妻子ニ對スル送金ヲ絶テタルガ如キ場合ニ在リテハ、ソノ留守宅ニ相當ナル資産アリテ生活費ニ充ツルコトヲ得ルガ如キ特別ノ事情ナキ限りハ妻ニ於テ一家ノ生活ヲ維持シ子女ノ教養ヲ全クスルガタメニ、其ノ必要ナル程度ニ於テ借財ヲナシ以テ一家ノ生計ヲ維持スルコトハ、夫ニ於テ豫メ之ヲ許可シ居リタルモノト認ムベキハ條理上當然ニシテ、斯ク解シテ初メテソノ裁判ハ條理ヲ盡シタルモノト謂ハザルベカラズ」といふ理由で妻に返金を命じたことがある。妻は夫の許可を得て居ないから民法第十四條によれば拂ふべき必要のないものであるが、裁判官はこの貸借に於ける道徳的意味の重要なるを認め、法律の形式を履んだ許可はなくとも當然許可のあるべきものとなし、この道徳的精神から新らしき法律の解釋を下して、妻を敗訴せしめたのである。裁

判に於て最も重んずべきものはこの精神のない法律の條文ではなく、この條文には勿論準據するが、その條文の中にある精神であつて、この精神によつて實は吾々は絶えず新らしき法律を作つて居るのである。

最も熟練なる裁判官が事件を審理するに當つてはその結論は直覺的に自由の人格に映るといふことである。勿論判決には理由がなければならぬ。理由書の附いて居らない裁判といふものは最早今日の法治國に於ては見ることも能はぬが、この判決の理由を陳べるに際して裁判官の頭に直覺的に浮ぶものはその判決に對する結論の眞理如何といふことである。此事件はかくあるべきであるといふ直覺的命令によつて事件を審理するのが各裁判官のなすところであつて、これに對し法律の既成條章は寧ろ此直覺的判決に合理的理由を附する助となるのみであるといふ話である。

生きた法律、眞に事件を處理するに足るべき生きた法律は裁判官自身の人格である。この人格の立法によつて判決は生きた眞理あるものとなり、その判決によつて法律は凡て事件ある毎に新らしき生命あるものとなる。既成法律の外觀上の條章は同一であるが、法律は人格の直接的立法によつて常にその生命を新らたにして往くべきである。法律の生命は全く人格にある。この點から見るときは北米合衆國に於て幾多のビューリタニズムの法律を作り、法律の力を以て國民に道

徳を實行させようとして居ることは敢て怪しむに足らぬ。これが一體法律の本質であり、生命である。一般に義務教育の法律はこの人格主義を最もよく示すものである。

法律はこの人格主義に於て永久である。言ふ迄もなく法律は變化する。社會の事情が變つて或る既成法律を以て社會全體又は多數のものが不便とする場合に於ては改正せられる。社會が不便とするに拘らず同一の法律を以て以前の通りその共同的生活の規範として墨守するといふことは人間の社會では本來見るべからざるところである。吾々は社會の事情が變化すればそれに隨つてその共同的法律をかへる。この點に於ては吾々の社會生活に於ける法律は變化して止まざる轉化であるといつてよい。併しその變化して止まざる轉化の中に於ても人格の價值を重んずる點に於ては變はるところなく、人格の理想がこの轉化を發生して居るといふ點に於て渝るところがない。法律は所詮その無限に變化發達する中に於て、カントが人格の立法としていつたところの「汝の行動が一般的法則となるやうに行動せよ」といつた事をその永久的生命としてもつものであり、凡ての場合において人格者はかく行動すべきものであるといふ吾々の良心の命令を永久の憲法として進歩するものである。認識に於ては存在の上に意味があるが、法律の認識に於て其意味となるものは人格である。スタムラーが法律をもつて内容の變化する自然法であるといふと、そ

の自然法の中に純理法 *Das richtige oder ideale Recht* の永久を主張したことは法理學に於ては

最も注意すべきことであつて、結局吾々の法律的生活の一切の問題は人格の獨立々法に歸着する。

吾々の社會生活に於て承認さるべき法律は色々であつて場合の異なるに隨つてその内容を異にして來る。全く特殊の法律であるが、この特殊の法律を成立せしむべき根本法として人格の自由立法に基く純理法なるものがなければならぬ。吾々はその社會生活に於ては本來自由であつて、他のものから何等の強制をも受けるのではない、全く自由獨立の立場に立ち人格あるものゝ行動は本來かくあるべきものであるといふ純粹なる良心の道德命令に凡ての法律の根源をもつて居る。隨つて法律は結局實踐理性の要求による自己主張であり、カントの哲學の語を以ていふなら斷言命令から出る自己立法である。吾々はこの命令を有し純理法を有するときに、生活の凡ての場合に於て具體的に自己の利己的意志に拘束を加へたる合理的行爲をする。これが法律である。道德と法律とはその精神に於て一である。非禮勿言、非禮勿動といふことは法律であると共に道德法である。法律は全く人格の自覺に基く自己立法である。隨つて法律生活に於て最も重要なことは社會に於ける人々の人格の價值を公平に承認しその自由を許すべき正義の道德心の上に立つことである。正義の觀念がないならば法律は社會に於てその生命を失ひ、社會の秩序は合法的に維

持せられぬ。北米合衆國の山間の土人は敵の捕虜を苦めるに當つては殘忍酷薄を極める。併しこれを以て直ちに彼れ等が道徳心を缺いて居るためであるとする事は速断である。實は彼れ等の道徳法によるときは、男子はその理想として如何に苦しくとも泣き聲を立てゝはならぬ。忍耐を以て苦痛を輕蔑するだけの勇氣がなければならぬとする。随つて彼れ等はその敵を苦めるときに當つて殘酷を極めるが、これ敵に男子たるべき理想を示さしめ捕虜となれるところの恥辱を雪ぐべき機會を與へるものである。されば苦めて居るものも一度不幸の運命に陥つて敵の捕虜となるときは、同様の苦痛を甘んじて受けねばならぬといふことを忘れぬ。こゝに彼れ等は敵を測ると同様の道徳的標準によつて自己も亦測られるべきであるといふ正義の觀念からその敵對行爲を合法的行爲として居る。勿論彼れ等のなすところは野蠻には違ひないが、その中にも争ひがたき正義の道徳的觀念を有し、これによつて彼れ等はその社會に一種の法律を作つて居るのである。吾々は野蠻民族がその同胞を取り扱ふ上に於て一般に殘酷であつて復仇心の強いのは驚く。所謂その肉を喰はずんば止まぬといふやうなことは、吾々の先祖の歴史にはよく見るところである。併しその殘酷なる生活態度の中にも何處かに正義の觀念を有し、人格の立法が敵に對する場合に於てすらその行爲の規正的力となつて居るのを認める。野蠻人もこの點に於て法律を有するのであ

るが、吾々文明人に於ては一般に人格的立法で規定すること能はざるところの不規則なる社會制度を制定せざるべからざる場合に於ては、その缺點を特殊の修正によつて補正し、例外的取り扱ひとして一般的秩序の人格の價値を傷けぬやうにする。發狂者のために特殊の取り扱ひを設けて法律的にも道徳的にも人類の一般的社會秩序の價値を害せざらんとするは人の知るところであつて、文明人の法律となるほど次第にその法典全體が徹底せる意味で人格を公平に社會的に承認する。

この法律に於ける人格の價値承認は吾々文明人に於ては只立法の際に於てのみでない、一切場合に於て承認するところであつて、吾々は既成法律に對しても常にこの點から新らしき解釋を下して往く。前に述べた大審院立法に於て、妻が法律上の手續として夫の許可を得て借金したのでないに拘らず、許可を得たものと見るべき筈であるといふ道徳上の立場から、これに返濟を命じた如きは最も著しき一例であつて、吾々の生活では絶えずその人格の自覺の進歩によつて法律に新らしき解釋を下して居る。實は新らしい法律を實際生活の上で時々刻々作つて居るのであつて、立法の手續を経るところの法律は吾々のかゝる道徳的擬制が既成の法律と相反すること遠く、全く別の系統の法律と見らるべき立場に至つたとき、新法律の立法手續を経るに由るのであ

る。随つてそれだけ新法律では一層進歩せる意味に於て純粹なる道德的精神の命令が働いて居らねばならぬ。法律の進化は全くこの人格の自覺に基く認識の進歩にある。斯る點から見るときは、法律の進化は認識の進化と同じやうに一種のフィクショナルによるものである。謂は、ウィングラーのアルス・オブの哲學によるものである、存在せぬ法律を道德的立法によりて作つて往くところに法律の進歩がある。

併し法律がかく理想主義哲學の認識の進歩と共に進歩するについては、吾々のなほ最も注意せねばならぬものがある。即ち法律が認識の進歩によつて進歩するといふことは、只法律の價值意識に於て進歩し、普遍的價值の體系に進歩するといふのみでなく、普遍的價值體系上進歩すればするほど道德の本來的性質として益々個性的に發達して法律的生活は本來かくあるべきものであるといふ命令が強くなり、既に述べたる如く自ら一般的價值の法律を發見して、具體的に生活の各場合に起こるべき事件を規正せんとすることは是れである。實に吾々の法律生活に於て最も重要なものは、吾々が法律の意味を自己の人格の自覺せる立場から進歩的に解釋し、一層意味の深きものとなすと共に、これを自己の現實的生活の各事實に具體的に適應し、これを以て只一般的法則とせず現實的生活に生命ある活きた具體的規範とするにある。法律はその認識から見るとき

は何處までも一般的價值に進歩すると共に、實踐に於ては又何處までも特殊的個性に進まねばならぬ。近代法律に對して *scholae* ではない *Vitae* であるといふことが八釜しく主張されるのも全くこの實踐的個性の立場に立つてのことであつて、本來法律が人格の自己立法に基く道德的個性である直接的結果であるといつてよい。

しかし論じてこゝに至るときは吾々の法律的生活では更らに新問題を生ずる。即ち吾々の法律的生活に於ては現在の生活事實を如何にするか、歴史的發展によつて吾々國民の現在有するところの生活事實を如何なる方向に向つて指導し、同胞をして最も價值ある歴史を作らしむべきかといふ問題これである。法律の形式からいふときは一般と特殊の調和した個性にあるが、内容からいふときは、現在の生活を如何にするか、一度あつて二度とない國民の歴史的發展の現在を如何に指導すべきかといふことが、吾々の新らしき問題とならねばならぬ。併しこれは法律問題ではなく政治問題である。次節に於て改めてこれを論ずる。

二、政治の根本原理

先づ政治の一般的形式の發達を簡單に調べて見よう。昔から政治の發達して來た跡を見ると

は色々の形式があるが、初めて人類の歴史を作るに至つたときは既に述べたる如く全く腕力によつて自然を開拓したる、野獸や猛禽の襲來に對して防禦したりする必要があつたから、既に述べたる如く自然強き腕力を有せる男子はその社會生活に於て強大なる權力を有せる上に、當時に於ける歴史的な思想ならびに經濟關係は自然極端なる父系家族の親權時代を作つた。この時代に於ては妻子は父の所有物であるとするが、かゝる時代に於ては政治が專制となるべきは説明するまでもないところである。文明が進歩して個人の人格及び權利が明瞭に認識せらるゝに至るときは、次第にかゝる極端なる自然的關係の社會生活が消滅して道徳的關係の社會生活が発生するから、人類はその進歩せる人格の自覺によつて社會的改良を企て、往くけれども、未だ十分なる人格の自覺を有せず只自然的關係によつて支配せられる時代に於ては自然強大なる腕力を以て生活の安全を保障する外ない。随つて家庭に於ては父權が絶対となるが、廣く社會生活に於ても矢張これと同様の關係が見られる。一家族内に於ては父權が絶対であつて、妻子の生活を保護して居るけれども、その家族が更らに大なる社會内に於て生活の安全を保障されて居るかといふことになるときは疑問がある。父親がかゝる場合に於て我がまゝを通すが如く社會内に於ても仍且我がまゝを通すものがあつて家庭の平和は常に暗雲に閉される。加之、一家族内に於ては父親の我がまゝ

も家族に對して、あるから戰慄すべきことは妙いけれども、社會ではさうでないから残酷なる殺害や窮乏が横行する。或る強大なる權力を有せる家族又は氏族が一般に人類のこの社會的弱點につけ込んで專制的權力を振り廻すことがあるが、勿論その間には戰爭があり、奪掠がある。かくてその中に勝利を得たる氏族は敗北せる氏族の權利を奪ひ、全くこれを其支配下に置くやうになるから勝利者の專制は益々甚だしきものとなる。尤も征服せられたる氏族も彼れ等自身のみに関係せる事件となるときは自由を許されるのが普通であるが、支配者に對する關係に於ては絶對的服従を要求せられ、所謂生殺與奪の權力を把握せられるから政治上では全く奴隸である。人類は一般に古代に於てはかゝる專制を以て社會的運命であると考へ、只その習慣なるが故に人類は代代その專制君主に事へ、或る場合には想像するも痛ましきほどの忍耐を以てその支配者に服従し、これを以て避くべからざる人間生活の運命であると諦めた。東洋に於ては支配者の登るところの王位は殆ど普遍的に絶對神權であると考へられて居つた。彼れ等はその行政に於て國民的制度的大部分を自由に放任するを辭せぬが、只君主の威嚴を保つといふ點に於ては少しの容赦もなく、絶對的服従に寸分の動搖あることをも許さぬ。

或る王國が滅亡して他の王國が勃興し、またはその領土が他國の支配の下に落ちてても、この状